

中国縦貫自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

55年3月

島根県教育委員会

中国縦貫自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書正誤表

P	行	誤	正
2	18	6300千円	63000千円
3	21	月坂遺跡	星坂遺跡
5	1	80km	40km
5	23	第I区	第II区
5	7	南北約80m、第III区	南北約80mの第III区
6	5	SB03R	SB03R ₄
9	14	(1-1~16)	(第6図1~16)
9	16	1-1,3	1,3
9	21	皿(1-14)	皿(14)
9	22	(1-9~12,15,16)	(9~19,15,16)
9	25	(1-17~54,2-1~13)	(第6図17~54,第7図1~13)
9	26	杯(1-17~19,21····,2-2~9)	杯(第7図17~19,21····,第7図2~9)
9	30	A類(1-17~19····)	A類(第6図17~19····)
9	30	B類(1-52~55)	B類(第6図52~55)
9	31	D類(1-22)	D類(第6図22)
9	33	皿(1-26~35,2-1)	皿(第6図26~35,第7図1)
9	34	A類(1-26~31,2-1)	A類(第6図26~31,第7図1)
9	34	3類(1-32~35)	B類(第6図32~35)
9	35	C類(1-36~38)	C類(第6図36~38)
9	36	2-1	第7図1
9	39	(2-10~13)	(第7図1~13)
9	41	(2-14~21)	(第7図14~21)
9	41	(2-27,23)	(第7図27,23)
12	29	含む精選されている。	含むも精選されている。
12	35	胸上半部のみ存在	胸上半部のみ存在
12	37	接合部	接合部遺
14	16	存在する	存在し
14	20	4受部	4は受部
19	10	残す7脚部	残す7、脚部
19	16	糸	糸
19	22	よって損壊し	よって損壊し
19	24	5cm現存	5cm、現存
20	5	し引いている。	押し引いている。
22	12	安8	8
28	2	方形であるか、	方形であるが、
22		第22図S108遺物実測図	第22図S109遺物実測図
22	31	遺物(第24,25図)	遺物(第24,25図,図版43~45)
22	40	やや深身の筒である。	やや深身の碗である。
25	9	遺物(第27図)	遺物(第27図、28、29図,図版43)
25	9	遺物に伴う遺物(同2,5,6)	遺物に伴う遺物(第28図)
27	12	頸部は	胴部は
28	23	遺物(第9~12図)	遺物(第31~34図,図版46~48)
28	24	遺物に伴う遺物(第9図1~19)	遺物に伴う遺物(第33図1~19)

P	行	語	正
29	26	サラ状の	ササラ状の
29	28	欠損する15は・・・	欠損する。15は・・・
29	34	第8図20, 22~24, 26第9図20, 22~25 第10図)	(第33図20、22~25、第34図)
29	35	壺A (同1, 2)	壺A (第34図1、2)
29	38	壺C。複合口縁では	壺C。(第33図20、22、23、26) 複合 口縁では
31	3	壺D。(第10図3)	壺D。(第34図3)
32	11	遺物 (第13, 14図) 遺構に伴う遺物 (同1, 2, 3)	遺物 (第36、37図, 図版49、50) 遺 構に伴う遺物 (第37図1~3)
32	11	直上から出出	直上から出土
33	8	覆土内の遺物	覆土内の遺物 (第36図、37図4~20)
34	5	石器類 (第14図)	石器類 (第36図)
34	6, 7, 9	石彫丁状未製品	石彫丁状未成品
34	37	(遺物第15図)	(遺物第39図、図版50)
36	14	遺物 (第16図, 17図) 遺構に伴う土 器 (16図1から6)	遺物 (第42、43図, 図版51~52) . ・・・ (第42図1~6)
37	11	口冠部は	口冠部は
37	38	胴部外面はハケ目胴, 部内面は	胴部外面はハケ目、胴部内面は
38	7	(第17図1, 2)	(第43図1、2)
38	11	未製品	未成品
39	4	遺物 (18図)	遺物 (第45図、図版53)
39	9	調整をす	調整を施す
39	21	砥石 (1)	砥石 (第46図1)
39	37	胴部は	胴部は
39	32	遺物 (第49, 50, 51図)	遺物 (第49~51図, 図版53)
41		第50図S119遺物実測図	第50図S119外 出土遺物実測図
41	8	(18) がある。	(18) がある。
42	1	石器類 (第21図)	石器類 (第51図)
44	19	遺物 (写23図)	遺物 (第57図, 図版54)
44	33	「く」の字の	「ノ」の字の
44	35	へら削調整を施す	へら削り調整を施す
45	3	石器類 (同1, 2)	石器類
45	15	遺物 (第25図)	遺物 (第60図)
45		第60図遺物実測図	第60図S121遺物実測図
47	5	遺物 (第62図)	遺物 (第62図, 図版55、56)
49	25	遺物	遺物 (第66図、67図) .
50	1	七玉51	七玉 (第67図)
63	34	この種の石器が	この種の石器は
71	18	しやすいであろう。	しやすいであろう。
71	30	様相をみると	様相のものをみると
76	7	(1-1~4)	(第108図1~4)
76	8	注口の一部である。(5)	注口の一部である(5)。
76	8	形のもの(6)	形のもの(7)
76	9	中国製	中国製品は
76	9	第127図8は青白磁の壺の	第108図9は青白磁の合子の
76	13	図版)	(図版67)
76	15	高台付を	高台を
76	18	19, 20, 2は	19, 20, 21は
76	18	約2.6cmある。	約26.1cmある。

P	行	誤	正
71	27	石器1は	石器(第107図1)は
73	27	のぞ	ので
78	2	山鬼	山城
78		第109図	スケールの余白部分は100m。
78	14	三代代	三代代
78	18	注目すべき事実	事実
79	10	1点、胴身部が中央より、屈曲して	1点は胴身部が中央より屈曲してい
		いるが、	るが、
79	13	煙導部と吹口部には明瞭なるつき	トル
		目が確認された。	
79	19	板材厚さは	板材の厚さは
80	3	鉄数本であった。	14本であった。
80	8	若干本	3本
82	8	筆記した。	筆記した。注1 ※文献(1)
85	1	遺構に判わない遺物	遺構に伴わない遺物(第118図～
			第123図, 図版71～73, 79)
85	5	第 図	第118図
85	13, 14	幾可学的なや反転して内湾する。	幾可学的な沈線を施し、やや内湾
沈		沈線を施し、	する。
85	25	出土しこいる。	出土している。
85	30	「L」字	逆「L」字
85	34	須恵器(5, 6)	須恵器(第120図5, 6)
88	7	石	石
88	11	第1図	第121図
88	11	第2図	第122図
88	16	前3図	第123図
88	17	第2図	第122図
92	5	中世	中世から近世
93	11	遺跡	遺構
93	20	小皿の	小皿で
93	34	口は	12は
95		第128図物実測図	第128図九郎原II遺跡遺物実測図
97	7	指月遺跡	指月経塚
97	10	月神社	指月神社
98	27	約300mで地上に上達するが	約300mで地山に達するが
		図版43前立山遺跡SI01出土遺物	図版43前立山遺跡SI11出土遺物

中国縦貫自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和55年3月

島根県教育委員会

序

この報告書は、島根県教育委員会が日本道路公団広島建設局から委託を受けて、昭和53年度から54年度にかけて実施しました中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の調査は、石見地方山間部では初めての本格的調査であり、多くの成果を得ることが出来ました。そして、それは古代における同地域の文化と、その交流を解明するための資料になるものであります。

本書は発掘調査の記録としては十分とはいえない面がありますが、広くご利用いただき、埋蔵文化財に対する一層のご理解を賜われれば望外の喜びとするものであります。

島根県にとりましては初めての大規模な調査でありましたが、調査事業が円滑に進みましたことは、日本道路公団広島建設局をはじめ地元関係各位のご援助とご協力のたまものと心から感謝申し上げます。

昭和55年3月

島根県教育委員会

教育長 水津卓夫

例 言

- 1 本書は、昭和53年度、昭和54年度の二ヶ年にわたって鳥根県教育委員会が日本道路公団広島建設局から委託を受けて実施した中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。
- 2 この事業は次のような調査組織、構成で鳥根県教育庁文化課が行った。(敬称略)

〔昭和53年度〕

- 事務局 遠藤 豊 (文化課課長)、藤岡 亨 (文化課課長補佐)、森山敏夫 (文化課課長補佐)、京谷 昇 (文化振興係係長)
- 調査指導 山本 清 (鳥根県文化財保護審議会委員・鳥根大学名誉教授)、町田 章 (鳥根県文化財保護審議会委員・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存処理室長)、甲元真之 (熊本大学文学部講師)、渡辺貞幸 (鳥根大学法文学部講師)
- 調査員 岩谷建二、池田満雄、門脇俊彦、藤岡法暉、東森市良 (以上鳥根県埋蔵文化財調査員)、勝部昭、石井 悠、前島巳基、宮沢明久、卜部吉博、西尾克己、松本岩雄 (以上文化課職員)、三宅博七、平野芳英 (以上鳥根県立八雲立つ風土記の丘職員) 磯村利和、赤木研二、村岡伸雄

〔昭和54年度〕

- 事務局 遠藤 豊 (文化課課長)、藤岡 亨 (文化課主査)、森山敏夫 (文化課課長補佐)、秋月延夫 (文化振興係係長)
- 調査指導 山本 清 (鳥根県文化財保護審議会委員・鳥根大学名誉教授)、町田 章 (鳥根県文化財保護審議会委員・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存処理室長)、甲元真之 (熊本大学文学部助教)、渡辺貞幸 (鳥根大学法文学部講師)、中村和成 (鳥根医科大学教授)、中村徹也 (山口県教育庁文化課課長補佐)、山中敏史 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)、鬼頭清明 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)
- 調査員 勝部 昭、石井 悠、松本岩雄、宮沢明久、卜部吉博、西尾克己、内口律雄、田根裕美子 (以上文化課職員)
- 調査補助員

鳥谷芳雄、宮木節昭、竹中 哲、熊野高裕、井戸 学、柳前俊一

- 3 遺物整理、報告書作成にあたっては、次のものの協力を得た。
村上 勇、永見 英、吉岡七江、横山博子、片岡詩子、広江耕史、山田克己、片寄義春、門脇裕、関山和男、佐藤順子、鈴政泰子、小原明美、村上紀美子、渡辺委佐子、井上洋子、竹中和夫、石倉敬子、坂田 巴
- 4 本報告書は、事情により直接現場で調査を担当した者が記録することができなかった。文責は文末にそれぞれ明らかにし、編集は内田律雄と勝部 昭が行った。
- 5 本文中で使用する遺構記号は次のとおりである。
S I (住居跡)、S K (土坑)、S D (溝)、S X (墳墓・特殊遺構)、S B (掘立柱建物跡)、P (柱穴)
- 6 本文の図に示した方位は磁北を示す。

目 次

1. 調査の経過	1
2. 位置と周辺の遺跡	3
3. 前立山遺跡	5
4. 河内遺跡	76
5. 九郎原Ⅰ遺跡	78
6. 九郎原Ⅱ遺跡	93
7. その他の遺跡	96
8. ま と め	99

挿 図 目 次

第 1 図	周 辺 の 遺 跡	4
	前立山遺跡	
第 2 図	孤立柱建物跡関係図	6
第 3 図	SB 01 実測図	7
第 4 図	SB 02 実測図	7
第 5 図	SB 03 実測図	8
第 6 図	孤立柱建物跡及び周辺出土遺物 (1)	10
第 7 図	孤立柱建物跡及び周辺出土遺物 (2)	11
第 8 図	SI 01 実測図	12
第 9 図	SI 01 遺物実測図	13
第 10 図	SI 02 実測図	13
第 11 図	SI 02 遺物実測図	13
第 12 図	SI 03 実測図	15
第 13 図	SI 03 遺物実測図	15
第 14 図	SI 04・05・06・07・SD 01 関係図	16
第 15 図	SI 04・05 実測図	17
第 16 図	SI 04 遺物実測図	18
第 17 図	SI 06 実測図	19
第 18 図	SI 06 遺物実測図	20
第 19 図	SI 07 遺物実測図	20
第 20 図	SI 08 実 測 図	20
第 21 図	SI 08 遺物実測図	21
第 22 図	SI 08 遺物実測図	22
第 23 図	SI 09・10 実測図	23
第 24 図	SI 10 遺物実測図 (1)	24
第 25 図	SI 10 遺物実測図 (2)	25
第 26 図	SI 11・12 実測図	26
第 27 図	SI 11 遺物実測図 (1)	27
第 28 図	SI 11 遺物実測図 (2)	27
第 29 図	SI 11 遺物実測図 (3)	27
第 30 図	SI 13 実測図	28
第 31 図	SI 13 遺物実測図 (1)	29
第 32 図	SI 13 遺物実測図 (2)	29
第 33 図	SI 13 遺物実測図 (3)	30
第 34 図	SI 13 遺物実測図 (4)	31
第 35 図	SI 14 実測図	32

第 36 図	S I 14 遺物実測図 (1)	33
第 37 図	S I 14 遺物実測図	33
第 38 図	S I 16 実測図	34
第 39 図	S I 16 遺物実測図 (1)	34
第 40 図	S I 16 遺物実測図 (2)	34
第 41 図	S I 15・17 実測図	35
第 42 図	S I 17 遺物実測図 (1)	36
第 43 図	S I 17 遺物実測図 (2)	37
第 44 図	S I 18 実測図	38
第 45 図	S I 18 遺物実測図 (1)	39
第 46 図	S I 18 遺物実測図 (2)	39
第 47 図	石皿様石器	39
第 48 図	S I 19 実測図	40
第 49 図	S I 19 遺物実測図 (1)	41
第 50 図	S I 19 遺物実測図 (2)	41
第 51 図	S I 16 遺物実測図 (3)	41
第 52 図	S I 15・16・17・18 関係図	42
第 53 図	S I 20 実測図	43
第 54 図	S I 20 遺物実測図	43
第 55 図	S I 21 実測図	44
第 56 図	S I 21 遺物出土状態	44
第 57 図	S I 21 遺物実測図 (1)	45
第 58 図	S I 21 遺物実測図 (2)	45
第 59 図	S I 22 実測図	45
第 60 図	S I 22 遺物実測図	45
第 61 図	S I 23 実測図	46
第 62 図	S I 23 遺物実測図	47
第 63 図	S I 23 遺物出土状態	48
第 64 図	前立山遺跡遺物配置図	折込み
第 65 図	S D 01 実測図	49
第 66 図	S D 02 遺物実測図 (1)	49
第 67 図	S D 02 遺物実測図 (2)	49
第 68 図	S D 02 実測図	50
第 69 図	溝及びピット群	51
第 70 図	S K 01 実測図	52
第 71 図	S K 02 実測図	52
第 72 図	S K 03 実測図	52
第 73 図	S K 04 実測図	52
第 74 図	S K 05 実測図	52
第 75 図	S K 06 実測図	53

第 76 図	SK 07 実測図	53
第 77 図	SK 08 実測図	53
第 78 図	SK 08 石 録	53
第 79 図	SK 09 実測図	53
第 80 図	SK 10 実測図	53
第 81 図	SK 11 実測図	54
第 82 図	SK 12 実測図	54
第 83 図	SK 12 遺物実測図 (1)	55
第 84 図	SK 12 遺物実測図 (2)	56
第 85 図	SK 12 遺物実測図 (3)	57
第 86 図	SK 13 実測図	59
第 87 図	SK 13 遺物実測図	59
第 88 図	SK 14 実測図	59
第 89 図	石皿様石器実測図 (1)	60
第 90 図	石皿様石器実測図 (2)	61
第 91 図	石皿様石器実測図 (3)	62
第 92 図	石皿様石器実測図 (4)	63
第 93 図	SX 01 実測図	64
第 94 図	SX 02 実測図	64
第 95 図	SX 03 実測図	65
第 96 図	SX 04 実測図	65
第 97 図	SX 05 実測図	66
第 98 図	SX 06 実測図	66
第 99 図	SX 07 実測図	66
第 100 図	SX 08 実測図	67
第 101 図	墳墓出土の遺物 (1)	69
第 102 図	墳墓出土の遺物 (2)	70
第 103 図	墳墓出土土器関係図	72
第 104 図	墳墓実測図	折込み
第 105 図	第三調査区の石器 (1)	74
第 106 図	第三調査区の石器 (2)	75

河 内 遺 跡

第 107 図	河内遺跡出土遺物実測図 (1)	76
第 108 図	河内遺跡出土遺物実測図 (2)	77

九 郎 原 I 遺 跡

第 109 図	九郎原 I 遺跡発掘調査区	78
第 110 図	九郎原 I 遺跡近世墓実測図	79
第 111 図	九郎原 I 遺跡 (SX01-1~7, 02-44, 03-8-26, 07-27-40, 08-41~43)	80

第112図	S X 01 実測図	82
第113図	S X 02 実測図	82
第114図	S X 06 実測図	83
第115図	S X 07 実測図	83
第116図	S X 08 実測図	84
第117図	S X 09 実測図	84
第118図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (1)	86
第119図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物	87
第120図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (2)	88
第121図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (3)	89
第122図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (4)	90
第122図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (5)	90
第123図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (6)	91
第124図	九郎原 I 遺跡	孤立柱掘物跡	92

九郎原 II 遺跡

第125図	九郎原 II 遺跡位置図	93
第126図	九郎原 II 遺跡出土遺物実測図 (1)	93
第127図	九郎原 II 遺跡出土遺物実測図 (2)	94
第128図	九郎原 II 遺跡出土遺物実測図 (3)	95

その他の遺跡

第129図	沢田 I 遺跡	B グリッド土層図	96
第130図	沢田 I 遺跡	A グリッド土層図	96
第131図	沢田 II 遺跡	B グリッド土層図	96
第132図	沢田 II 遺跡	A グリッド土層図	97
第133図	指月遺跡	経塚実測図	97

図 版 目 次

前 立 山 遺 跡

- 図版 1 前立山遺跡遠景(東より), 同Ⅱ区調査前(Ⅲ区より), 同Ⅲ区発掘前(西より)
- 図版 2 前立山遺跡Ⅰ, Ⅱ区全景調査前(西から), 同Ⅰ, Ⅱ区全景調査後(南から)
- 図版 3 前立山遺跡S B01・02・03全景(東から), 同S B03柱穴, 同S B03柱穴,
- 図版 4 前立山遺跡S B01・02・03, 同S B01・02・03, 掘立柱建物跡付近出土墨書須恵器
- 図版 5 前立山遺跡掘立柱建物跡周辺出土遺物
- 図版 6 前立山遺跡掘立柱建物跡周辺出土遺物
- 図版 7 前立山遺跡Ⅱ区全景(南から), 同第1号住居跡(S I 01)全景(南から), 同第2号住居跡(S I 02)全景(北から)
- 図版 8 前立山遺跡S I 03, 同S I 03, 同S I 04・05
- 図版 9 前立山遺跡S I 04・06遺物出土状態, 同S I 04遺物出土状態, 同S I 04遺物出土状態
- 図版 10 前立山遺跡S I 04遺物出土状態, 同S I 04遺物出土状態, 同S I 06
- 図版 11 前立山遺跡S I 06中央ピット遺物出土状態, 同S I 08, 同S I 08遺物出土状態
- 図版 12 前立山遺跡Ⅱ区遠景(東から), 同S I 09, 同S I 10
- 図版 13 前立山遺跡S I 10中央ピット内遺物出土状態, 同上, 同Ⅰ区遠景(西より)
- 図版 14 前立山遺跡S I 11・12(西より), 同S I 11・12(北より), 同S I 12中央ピット遺物出土状態
- 図版 15 前立山遺跡S I 11鉄製鏝出土状態, 同上, 同S I 13
- 図版 16 前立山遺跡S I 13こしき出土状態, 同上披形器台出土状態, 同上柱穴の構造
- 図版 17 前立山遺跡S I 14, 同貼床除去後, 同S I 15・16・17・18の関係(北より)
- 図版 18 前立山遺跡S I 15・16・17・18の関係(南より), 同S I 15, 同S I 16
- 図版 19 前立山遺跡S I 17, 同S I 17中央ピット及び棒状石製品出土状態3-1, 同S I 17中央ピット内棒状石製品出土状態
- 図版 20 前立山遺跡溝溝に接するピット内竈出土状態, 同S I 18(南より), 同S I 18P 6内遺物出土状態
- 図版 21 前立山遺跡S I 19(南より), 同S I 20(北より), 同貼床除去後(北より)
- 図版 22 前立山遺跡S I 21(東より), 同S I 21貼床化粧床状態(北より), 同S I 21中央ピット内遺物出土状態
- 図版 23 前立山遺跡S I 22, 同S I 23(東より), 同S I 23中央ピット
- 図版 24 前立山遺跡S I 23遺物出土状態, 同S I 23柱穴断面, 同S I 23柱穴断面
- 図版 25 前立山遺跡S D01, 同S D02及び出土土玉
- 図版 26 前立山遺跡及びピット群(北より), 同(東より), 同(西より),
- 図版 27 前立山遺跡S K12内土鏝出土状態, 同S K12内出土土鏝, 同
- 図版 28 前立山遺跡S K12出土土鏝, 同S K12出土土鏝, 同S K12出土土鏝, 同S K12出土土鏝
- 図版 29 前立山遺跡S K09, 同S K10, 同S K08
- 図版 30 前立山遺跡S K11, 同S K13, 同S K13, 遺物出土状態
- 図版 31 前立山遺跡S K14, 同S K14, 同S K14
- 図版 32 前立山遺跡S K07, 同S X01, 同S X01

第112図	S X 01 実測図	82
第113図	S X 02 実測図	82
第114図	S X 06 実測図	83
第115図	S X 07 実測図	83
第116図	S X 08 実測図	84
第117図	S X 09 実測図	84
第118図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (1) 86
第119図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (2) 87
第120図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (3) 88
第121図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (4) 89
第122図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (5) 90
第123図	九郎原 I 遺跡	遺構に伴わない遺物 (6) 91
第124図	九郎原 I 遺跡	独立柱掘物跡 92

九郎原 II 遺跡

第125図	九郎原 II 遺跡位置図	93
第126図	九郎原 II 遺跡出土遺物実測図 (1)	93
第127図	九郎原 II 遺跡出土遺物実測図 (2)	94
第128図	九郎原 II 遺跡出土遺物実測図 (3)	95

その他の遺跡

第129図	沢田 I 遺跡	B グリッド土層図 96
第130図	沢田 I 遺跡	A グリッド土層図 96
第131図	沢田 II 遺跡	B グリッド土層図 96
第132図	沢田 II 遺跡	A グリッド土層図 97
第133図	指月遺跡	経塚実測図 97

図版目次

前立山遺跡

- 図版 1 前立山遺跡遠景（東より）、同Ⅱ区調査前（Ⅲ区より）、同Ⅲ区発掘前（西より）
- 図版 2 前立山遺跡Ⅰ、Ⅱ区全景調査前（西から）、同Ⅰ、Ⅱ区全景調査後（南から）
- 図版 3 前立山遺跡S B01・02・03全景（東から）、同S B03柱穴、同S B03柱穴、
- 図版 4 前立山遺跡S B01・02・03、同S B01・02・03、掘立柱建物跡付近出土墨書須恵器
- 図版 5 前立山遺跡掘立柱建物跡周辺出土遺物
- 図版 6 前立山遺跡掘立柱建物跡周辺出土遺物
- 図版 7 前立山遺跡Ⅱ区全景（南から）、同第1号住居跡（S I01）全景（南から）、同第2号住居跡（S I02）全景（北から）
- 図版 8 前立山遺跡S I03、同S I03、同S I04・05
- 図版 9 前立山遺跡S I04・06遺物出土状態、同S I04遺物出土状態、同S I04遺物出土状態
- 図版 10 前立山遺跡S I04遺物出土状態、同S I04遺物出土状態、同S I06
- 図版 11 前立山遺跡S I06中央ビット遺物出土状態、同S I08、同S I08遺物出土状態
- 図版 12 前立山遺跡Ⅱ区遠景（東から）、同S I09、同S I10
- 図版 13 前立山遺跡S I10中央ビット内遺物出土状態、同上、同Ⅰ区遠景（西より）
- 図版 14 前立山遺跡S I11・12（西より）、同S I11・12（北より）、同S I12中央ビット遺物出土状態
- 図版 15 前立山遺跡S I11鉄製鏝出土状態、同上、同S I13
- 図版 16 前立山遺跡S I13こしき出土状態、同上鼓形器台出土状態、同上柱穴の構造
- 図版 17 前立山遺跡S I14、同貼床除去後、同S I15・16・17・18の関係（北より）
- 図版 18 前立山遺跡S I15・16・17・18の関係（南より）、同S I15、同S I16
- 図版 19 前立山遺跡S I17、同S I17中央ビット及び棒状石製品出土状態3-1、同S I17中央ビット内棒状石製品出土状態
- 図版 20 前立山遺跡間溝に接するビット内甕出土状態、同S I18（南より）、同S I18P 6内遺物出土状態
- 図版 21 前立山遺跡S I19（南より）、同S I20（北より）、同貼床除去後（北より）
- 図版 22 前立山遺跡S I21（東より）、同S I21貼床化粧未状態（北より）、同S I21中央ビット内遺物出土状態
- 図版 23 前立山遺跡S I22、同S I23（東より）、同S I23中央ビット
- 図版 24 前立山遺跡S I23遺物出土状態、同S I23柱穴断面、同S I23柱穴断面
- 図版 25 前立山遺跡S D01、同S D02及び出土土玉
- 図版 26 前立山遺跡及びビット群（北より）、同（東より）、同（西より）、
- 図版 27 前立山遺跡S K12内土鏝出土状態、同S K12内出土土鏝、同
- 図版 28 前立山遺跡S K12出土土鏝、同S K12出土土鏝、同S K12出土土鏝、同S K12出土土鏝
- 図版 29 前立山遺跡S K09、同S K10、同S K08
- 図版 30 前立山遺跡S K11、同S K13、同S K13、遺物出土状態
- 図版 31 前立山遺跡S K14、同S K14、同S K14
- 図版 32 前立山遺跡S K07、同S X01、同S X01

- 図版 33 前立山遺跡墳墓全景
- 図版 34 前立山遺跡 S X02, 同 S X05, 同 S X09
- 図版 35 前立山遺跡 S X06遺物出土状態, 同 S X06土層断面, 同 S X06
- 図版 36 前立山遺跡 S X08内七器出土状態, 同 S X08内土器出土状態, 同 S X08全景
- 図版 37 前立山遺跡墳墓遠景, 同墳墓遠景, 同墳墓遠景図版
- 図版 38 前立山遺跡墳墓東側の溝近景, 同墳墓東側溝の上層(北から), 同墳墓北側の溝遺物出土状況(東から)
- 図版 39 前立山遺跡 S X02遺物出土状態, 同墳墓出土焼石, 同墳墓出土焼石
- 図版 40 前立山遺跡 S I01出土遺物, 同 S I03出土遺物
- 図版 41 前立山遺跡 S I04出土遺物, 同 S I06出土遺物
- 図版 42 前立山遺跡 S I08出土遺物
- 図版 43 前立山遺跡 S I07出土遺物, 同出土遺物左 S I10, 右 S I09, 同出土遺物左 S I11,
- 図版 右 S I10, 同 S I11出土遺物
- 図版 44 前立山遺跡 S I10出土遺物
- 図版 45 前立山遺跡 S I10出土遺物
- 図版 46 前立山遺跡 S I12出土遺物, 同 S I13出土遺物
- 図版 47 前立山遺跡 S I13出土遺物
- 図版 48 前立山遺跡 S I13出土遺物
- 図版 49 前立山遺跡 S I14出土遺物
- 図版 50 前立山遺跡 S I14出土遺物, 同 S I15出土遺物, 同 S I15出土遺物
- 図版 51 前立山遺跡 S I16出土遺物, 同 S I17出土遺物, 同 S I17出土遺物
- 図版 52 前立山遺跡 S I17出土遺物
- 図版 53 前立山遺跡 S I19出土遺物, 同 S I19出土遺物, 同 S I19出土遺物, 同出土遺物左 S I18, 中 S I18, 右 S I19
- 図版 54 前立山遺跡 S I21出土遺物, 同 S I22出土遺物
- 図版 55 前立山遺跡 S I23出土遺物
- 図版 56 前立山遺跡 S I23出土遺物, 同 SK13出土遺物, 同 S I17出土遺物
- 図版 57 前立山遺跡 S X08出土遺物, 同上
- 図版 58 前立山遺跡墳墓出土遺物, 同上, 同(上からみる)
- 図版 59 前立山遺跡墳墓出土遺物, 同(上からみる), 同上
- 図版 60 前立山遺跡墳墓出土遺物, 同上, 同上右溝内左 S X02
- 図版 61 前立山遺跡Ⅲ区出土石鏃, 同サヌカイト片
- 図版 62 前立山遺跡 S I13出土砥石, 同裏面, 同Ⅲ区墳墓出土砥石
- 図版 63 前立山遺跡住居跡出土石皿様石器 S I02, 同 S I04, 同 S I11
- 図版 64 前立山遺跡住居跡出土石皿様石器 S I13, 同 S I14, 同 S I16
- 図版 65 前立山遺跡住居跡出土石皿様石器 S I18, 同 S I20, 同 S I23,

河内遺跡

- 図版 66 河内遺跡遠景前立山遺跡よりみる, 河内遺跡石臼出土状態, 同出土石器
- 図版 67 河内遺跡出土遺物, 同上, 同上,

- 図版 68 河内遺跡出土遺物, 同上, 同上
 図版 69 河内遺跡出土遺物, 同上, 同上

九郎原 I 遺跡

- 図版 70 九郎原 I 遺跡遠景 (南より), 同 S B01, 同 S B01
 図版 71 九郎原 I 遺跡出土遺物, 同上, 同上
 図版 72 九郎原 I 遺跡出土遺物, 同上, 同上
 図版 73 九郎原 I 遺跡出土遺物, 同上, 同上
 図版 74 九郎原 I 遺跡近世墓全景, 同 S X01人骨出土状態 (西から), 同 S X02人骨出土状態 (西から)
 図版 75 九郎原 I 遺跡 S X06人骨出土状況 (北西から), 同 S X07人骨出土状態 (北西から), 同 S X08人骨出土状況 (西から)
 図版 76 九郎原 I 遺跡 S X09人骨出土状況 (東から), 同 S X03出土遺物, 同 S X03出土遺物
 図版 77 九郎原 I 遺跡 S X03出土遺物同 S X07, 同 S X07
 図版 78 九郎原 I 遺跡 S X07出土遺物, 同上, 同上
 図版 79 九郎原 I 遺跡出土遺物, 同石器, 九郎原 II 遺跡遺

九郎原 II 遺跡

- 図版 80 九郎原 II 遺跡を I 遺跡からみる, 九郎原 II 遺跡遠景 (北より), 同全景
 図版 81 九郎原 II 遺跡出土遺物, 同上, 同上
 図版 82 九郎原 II 遺跡出土遺物, 同上 (内面), 同上
 図版 83 九郎原 II 遺跡出土遺物, 同上 (内面), 同上
 図版 84 九郎原 II 遺跡出土遺物, 同上 (内面), 同上 (中国製, 青磁, 染付)

その他の遺跡

- 図版 85 沢田 II 遺跡 A グリッド 同 B グリッド 同 I 遺跡 A グリッド
 図版 86 指月経塚遠景, 同近景 (調査前), 同断面
 図版 87 指月経塚出土一字一石経 (赤外線写真), 同上, 同上
 図版 88 田野原遺跡遠景, 妙見神社付近風景, 前立山遺跡現地説明会

1. 調査の経過

契機 中国縦貫自動車道は昭和45年頃、日本道路公団広島建設局から基本計画の発表があり、ルートの一部が島根県の西端の町、鹿足郡六日市町を通過することとなった。

分布調査 このため島根県教育委員会では昭和47年度事業予定計画の示された範囲の歴史文化財の分布状況を把握し、事業の設計協議に備えるため、国庫補助を得て「中国縦貫自動車道予定地内埋蔵文化財分布調査」事業を実施することとした。

事業は六日市町教育委員会の協力を得ながら、県埋蔵文化財調査員池田尚雄、東森市良、岩谷建三等の応援を得て、県社会教育課（現文化課）の門脇俊彦、近藤正等が現地踏査を実施した。調査は昭和48年3月7日から3月10日までの4日間であり、踏査した範囲は六日市町の東端、山口県の飽町と境を接する田野原から、西は山口県鹿野町境までの東西約20km、幅2kmであった。

この調査を実施する以前において六日市町内全体の遺跡数は、昭和37年3月刊の『島根県遺跡目録』によれば、星飯遺跡、注連川遺跡、中山城跡など20遺跡が発見されているにすぎなかった。そして、これらの遺跡発見は、県立津和野校教諭であった岩谷建三の努力に負うところが大きかった。

踏査による分布調査によって、調査員は諸々が弥生式土器片、土師器片、須恵器片、黒曜石製石鏃など、当時の遺物を採集することができた。また、丘陵断面に堅穴住居跡が露呈しているのを発見することもできた。こうして、弥生時代の集落跡と考えられる蔵木の林作田遺跡、古墳時代の集落跡と考えられる注連川の前立山遺跡など集落跡推定地が35ヶ所、中世の山城は有飯の陣賀城跡、田野原の中山城跡の2ヶ所、その他國口のイナキ宝園印塔群、蔵木の林古墳群等が存在することを確認し、町内の遺跡総数は66ヶ所となった。このため中国地方西部の瀬戸内と山陰にはさまれた山間地にも多数の遺跡が営まれていることに改めて関心が集まった。

分布調査に基づく資料を日本道路公団広島建設局に示したところ同局では設計の参考資料とされた。

部分調査 昭和50年度になって、日本道路公団広島建設局から中国縦貫自動車道計画予定路線が示され、遺跡存在の有無についての照合があった。昭和47年度に実施した分布調査結果に照らしてみると計画予定路線地内には勘五郎山遺跡、光富遺跡等10ヶ所の遺跡が存在することが判明した。この事実を道路公団に通知するとともに、これらの遺跡は現地踏査による表面観察の結果明らかになったものに過ぎず、遺跡の範囲については不明な点があり、実態については推定の域を出ないことを申し添えた。これに対して、道路公団からは計画路線地内に該当する遺跡の範囲や調査費、調査期間等について適確に把握したいという希望があり、部分的な発掘調査を実施してほしい旨依頼があった。

具体的には昭和51年10月発掘調査についての打合せをし、現地に赴いて計画路線を確認した。そして、16ヶ所の遺跡のうち実際には6ヶ所の遺跡が計画路線に関係することがわかった。

早速、昭和51年11月1日道路公団と県教育委員会との間で発掘調査委託契約を締結し、現地で発掘調査をするための準備を整えた。そして、12月発掘調査を実施した。もともと、この段階では、自動車適用地として買収されておらず、土地所有者の発掘承諾の得られない遺跡もあった。対象となった遺跡は蔵木の勘五郎山遺跡、九郎原の溝手遺跡（後述のように九郎原Ⅰ遺跡と呼ぶことにした）有飯の有綱遺跡、沢田の光富遺跡、注連川の前立山遺跡である。調査を担当したのは文化課主事横山純夫と同川原和人である。

この調査の結果、溝手遺跡と前立山遺跡の2ヶ所については不明確とはいえず遺構の一部を検出することができた。溝手遺跡では4ヶ所のグリッドを設定し、そのうちの2ヶ所から直径、深さとも30cmほどのピットを確認した。前立山遺跡では2ヶ所のグリッドを設定したところ、いずれのグリッドか

らもピットが検出された。直径は40cm又は20cmで、深さは40cmあまりあるものであった。この時の調査は用地買収が進んでいない段階であってごく小範囲の調査であったため、適確な状況把握ができにくかった。なお、他の3ヶ所の遺跡については調査区を設定した範囲内には遺跡の拡がりが見られなかった。

こうした結果を踏まえて道路公園では事業の実施設計、用地買収を進められ、昭和53年度になっていよいよ発掘調査を県教育委員会に委託されることとなった。そこで、県教育委員会では道路公園六日市工事事務所と実際の調査工程について協議を重ね、昭和53年度と昭和54年度の2ヶ年で発掘調査をすることとなった。

53年調査 初年度の昭和53年度調査は委託経費12000千円で前立山遺跡Ⅰ区の2000㎡を対象に調査を行った。前立山遺跡はパーキングエリアの予定地で、その東側部分にあたる。昭和51年度に部分的な調査を実施し、遺構が存在するとして前立山遺跡の畑の地点については調査範囲を150㎡に広げたものの明確な遺構が存在しなかったため、それ以上発掘をすることはしなかった。

調査はおもに8月から12月までの期間に実施した。初めは杉の伐採から始めた。調査によって検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡8棟、平安時代と推定される掘立柱建物跡である。

この期間中、昭和54年度調査予定遺跡について遺跡の広がりや遺跡の包含状況を知るための調査を実施した。即ち、かつて勝手遺跡と呼んでいた九郎原Ⅰ遺跡で2×2mのグリッドを6個、下瀬則遺跡と呼んでいた九郎原Ⅱ遺跡で2×2mのグリッドを4個設けて発掘をした。

54年調査 昭和54年度は委託経費6300千円の調査費で、前立山遺跡Ⅰ区の続きの丘陵地Ⅱ区3000㎡、前立山遺跡の東に広がる水田中の河内遺跡500㎡、九郎原Ⅰ遺跡2500㎡、九郎原Ⅱ遺跡3500㎡の合計8500㎡を対象として調査の計画を立てた。結果的には調査の中心は前立山遺跡で、昭和53年度のⅠ区に加えて、Ⅱ区とそれより一段と高い丘陵地Ⅲ区の1500㎡を調査した。河内遺跡は700㎡、九郎原Ⅰ遺跡1300㎡、九郎原Ⅱ遺跡250㎡の合計7320㎡であった。

各遺跡とも10m方眼のグリッドを設定して調査をした。前立山遺跡では竪穴式住居跡16、墳墓1、溝状遺構8などで弥生後期から古墳時代前期に属する遺構を検出した。河内遺跡では遺構は検出されず多量の中世陶磁器が出土した。九郎原Ⅰ遺跡では掘立柱建物跡Ⅰ、近世墓7、土壁2が検出された。九郎原Ⅱ遺跡では遺構は検出されなかったが、中・近世の陶磁器が発見された。

2ヶ年におよぶ調査は、殆んど調査らしい調査の行なわれなかった石見西部の山間地における古代の様子の一端を浮きぼりにし、大きな成果を収めた。

調査対象地となった六日市町の発掘現場は泉戸のある松江からは200km余りで、7(車と自動車では6時間ほどかかり、現場と事務局が離れており連絡に苦心した。また、調査体制については十分でなく、1年目と2年目は調査員の多くが交代する事態となり、現地において発掘調査に携わった職員苦労はひとしおであった。

道路公園から受託をうけて調査した遺跡は諸般の事情で記録にとどめるという措置をしたが、ともかくも調査を無事に終了することができたのは、事業者である道路公園広島建設局、同六日市工事事務所、地元六日市町、六日市町教育委員会、地元の発掘作業員の方々の御協力の賜物である。

(勝部 昭)

2. 位置と周辺の遺跡

位置 六日市町は鳥根県の最西南端にある町である。現在、六日市町からは国道187号線によって南は山口県岩国市、北は益田市と連絡しており、石見西部山間地にあって陰陽を結ぶ交通の要衝地である。行政区画の上では南側半分が山口県鹿野町、錦町に囲まれ、北半分は鳥根県の柿木村と匹見町に囲まれている。

地形的には6000mから1000mの山々が迫り、町の中央部を高津川が蛇行しながら北流しているが平地は狭い。町の平地の標高は240mから300mである。町の東端には断崖によってできた深谷狭があり、紅葉の時期には美しい自然のパノラマが展開する。六日市町野原の深谷大瀧のうえに立つと中国山地の分水嶺であることを実感する。気候のうえでは晩秋から初冬にかけて霧がこみ、冬は積雪が相当あり、気温は下がる。山間奥地ということで、熊や猪、時として猿なども出没するという。

六日市町は人口約6700人（約2000世帯）で主産業は農林業である。

周辺の遺跡 六日市町の東方広島県の冠山（標高1800m）では石器の原石ササカイトを産出し旧石器時代の遺跡があるともいわれるが、六日市町内には今のところこの時代遺跡は発見されていない。縄文時代以降は各時代の遺跡が知られており、古くから拓けていたことを物語っている。以下各時代毎に遺跡を概観し、主な遺跡について説明しておく。

縄文時代 町内に縄文土器片や縄文時代の石器を出土した遺跡は月夜遺跡など7ヶ所程知られる。発掘調査例はなくその実態については今だ明らかでない。

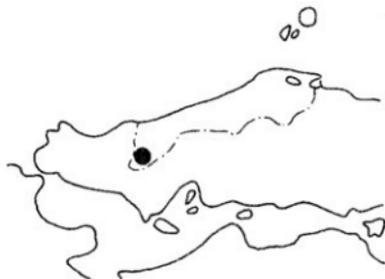
星坂遺跡 六日市町大字田野原字星坂 中山857外に所在する。西に面する低丘陵部麓の台状地にあり、山を越えると山口県錦町となる場所である。松本素民、山本利市陶氏の屋敷地を含む一帯が遺跡である。遺跡の西北方50mのところには水田に囲まれた一つの独立した小山があり、妙見神社が祭られている。この小山は周囲に濠があり、中世には砦であった可能性が考えられる。

星坂遺跡は町道沿いの横面に遺構の一部らしい個所が露出している。遺物としてはササカイト製や姫島産黒曜石製の石鏃70個以上が採集されている他、縄文地土器片、弥生土器の壺、甕片、土師器の甕片等がある。縄文時代から古墳時代にかけての遺跡と考えられる。また、中世の堀も採集されており、長い間生活の舞台となったことを示している。

弥生時代 高津川沿いに形成された平地のうち山麓に近い位置に六日市町全域に広がって19ヶ所発見されている。

田丸遺跡 六日市町大字真田字田丸 柿木村境に近い場所、かなり広い水田の拓けた平地のうちふところにある。町道七村線沿いにある明泉寺から北へ200mほど離れたところにある。耕地整理をした時に地下60から70cmのところから弥生式土器の破片が発見された。須恵器、杯、土師器、高杯、石斧、石鏃等も採集されている。これらの遺物は津野高校や田丸の長瀬久好氏が保管されている。

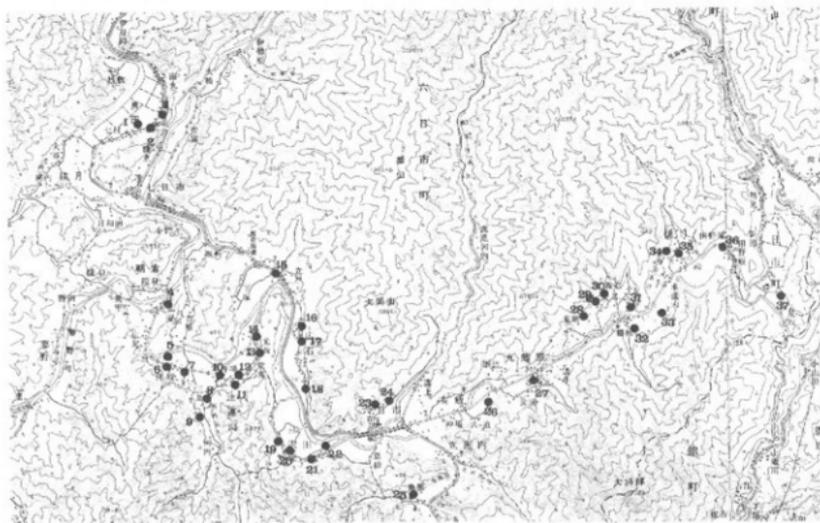
古墳時代 町内には古墳をふくめて38ヶ所の遺跡が知られている。



六日市町の位置

抜月古墳 六日市町大字抜月 奇鹿神社西方にあって吉賀川左岸側の水田中にある。土地所有者は抜月の村上保氏である。墳形は不明で、封土を失っている。現在、横穴式石室を構成していたと考えられる側壁が残って古墳の面影を伝えている。復元すれば石室は全長4mを超え、側壁を構成する石材の大きさは1.2mを超えるものがある。遺物には須恵器片、直刀、紡錘車があり、村上保氏や津和野高校に保管されている。六日市町にあって今のところ唯一の横穴式石室をもつ古墳である。付近にはいくつかのくろ（塚）があり、古墳の可能性もある。

律令時代 六日市町が古代の文献に登場するのは承和10年5月(843)のことである。続日本後紀の13卷仁明天皇の条に石見国美濃郡をわから鹿足郡を新設したことがみえる。鹿足郡の郡名は「新郡取邑号为鹿足郡」とあり鹿足郷による。和名抄によれば鹿足郡は鹿足郷と能濃郷の二つの郷がみえ、郡としては小郡であった。その鹿足郡家を野津左馬之助は六日市町往速川光長に比定している。それは光長にあるコブケという地名が郡家の遺称地であろうと考えたからである。後述する前立山遺跡から東へ約5kmにあたる。前立山遺跡の調査はこの鹿足郡家の位置を考えるうえで興味深い成果があった。(勝部 昭)



第1図 周辺の遺跡

1. 七村跡 2. 七村遺跡 3. 田丸遺跡 4. 仲仙遺跡 5. 仲野原下遺跡 6. 泉流寺遺跡
7. 藤安遺跡 8. 前立山遺跡 9. 竹ノ鼻遺跡 10. 沖場遺跡 11. 堂而遺跡 12. 廃寺下遺跡
13. 弘武家遺跡 14. 光長遺跡 15. 立戸遺跡 16. 中組遺跡 17. 岡組遺跡 18. 業師堂跡
19. 西ヶ原遺跡 20. 何場遺跡 21. 聞き森原遺跡 22. 光富遺跡 23. 追遺跡 24. 湖上遺跡
25. 亀原遺跡 26. 有頼遺跡 27. 沖番遺跡 28. 林古墳群 29. 蔵木観音堂下遺跡 30. 利光遺跡
31. 旧役場屋敷遺跡 32. 勘五郎山遺跡 33. ウツキソニ遺跡 34. アイナキ宝篋印塔群 35. アイナキ遺跡
36. 道郡遺跡 37. 黒坂遺跡

3. 前立山遺跡

遺跡の概要 前立山遺跡は鹿児島県六日市町大字津連川字前立山にある。高津川河口である益田市より南へ約80kmほど上流にあたる。このあたりは中国山地の深い谷間が重なり、その地形に沿うように高津川の支流は幾度も大きく蛇行しながら本流に注いでいるのが一般的な光景としてみられる。前立山遺跡もそうした高津川支流の一つと、その付近に出来た比較的に広い水田地帯を主な生産基盤としたと考えられる。

前立山遺跡は、水田との比高差約20m、東西約110m、南北約100mの第Ⅰ、Ⅱ区と、その南の同比高差約50m、東西約120m、南北約80m、第Ⅲ区の二つの舌状丘陵から成っている。便宜上、昭和53年度調査区を第Ⅰ区、その続きで昭和54年度調査区を第Ⅱ区、南側丘陵を第Ⅲ区と呼ぶことにした。この丘陵の高さの差は約30mで南側のそれが高い。

検出された主な遺構は、竪穴住居跡23（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区）、土城14（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区）、溝状遺構4（Ⅰ、Ⅱ区）、ピット群（Ⅱ区）、掘立柱建物跡3（Ⅰ区）、墳墓（Ⅲ区）（第64図折り返し参照）

竪穴住居跡は概ね弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての晩期のものであり、土城、ピット群や溝状遺構もほぼ同時期のものと考えられる。Ⅲ区に発見された平面形がU字形をする溝を伴う土城群は弥生時代中期末から後期後半にかけての墳墓であり、第Ⅰ、第Ⅱ調査区の竪穴住居跡、土城、溝状遺構等と密接な関係があると考えられた。Ⅰ区に検出された掘立柱建物跡は三棟あり、それぞれが異った時期のものである。付近からは多量の須恵器、土師器を出土した。これらの遺物の中には墨書須恵器や文字を刻した土師器が含まれ、平安時代初期のものを上限としていて、掘立柱建物跡の年代や性格を示唆しているように思われる。また、遺構に伴わない遺物の中には中世陶磁器もあり、その中には15から16世紀頃の中国製青磁片もみられた。

第Ⅰ、Ⅱ調査区は発掘調査開始前から丘陵上に45m×18m、30m×20mの二ヶ所の広い平坦面が存在していた。前者は丘陵の東側で第Ⅰ調査区にあたり、後者は丘陵の西側でほぼ第Ⅱ調査区にあたる。どちらも発掘調査前の表面的な観察からでも明らかに人工的な平坦面であることが予期され、遺構は丘陵上のこの二つの平坦面と第Ⅰ区の北側の緩斜面とに集中してみられた。

第Ⅰ、Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区は幅約20mの狭長な谷をはさんでいる。

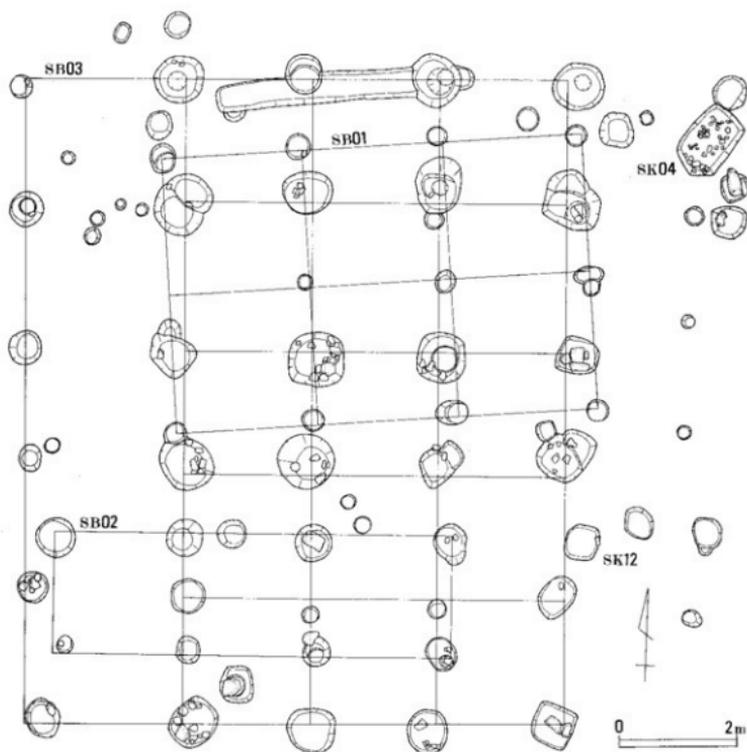
また、この谷の西側（第Ⅱ調査区の西側）に自然の湧水が存在する。標高にして約300m、第Ⅰ調査区の平坦面から約4mほど下がったところに位置している。発掘調査時にも冷たい水が涇々と湧き出していて、丘陵下の水田や付近の人家の飲料水として引かれ利用されていた。この集落遺跡の中ではどの時代にも関係し、特に重要な位置を占めていたと思われるが、時間の関係上この部分の発掘調査をすることが出来なかったのは惜しまれる。

前立山遺跡の存在する丘陵に、人間が働きかけをはじめたのは、今度の調査の限りでは弥生時代中期末のころが上限であり、最盛期は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての頃である。今回の調査では古墳時代中期、後期、また飛鳥、奈良時代の遺跡、遺物は発見出来なかった。このことは付近に、この時代の遺跡がほとんど知られていないこととあたかも対応しているかのように思われる。そして平安時代から中世にかけて、再びこの丘陵は利用されることになる。ちょうどこのころから古代の鹿児島県が文献に見えはじめることと付合し興味深いことである。その後はあまり利用された跡はなく、付近には近世に墓地が数ヶ所作られ、現在に至っている。（内田律雄）

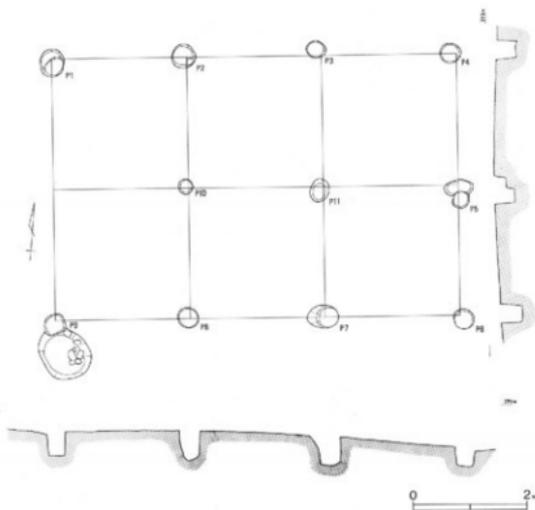
掘立柱建物跡

SB01 (第1号掘立柱建物跡) (第3図・図版3)

2間 (5.42m) × 3間 (7.4m) の総柱構造の掘立柱建物跡である。ただし、 P_1 と P_9 の間にはピットを検出できなかった。柱穴の平均的規模は P_4 に代表され、その径は35cm、深さ35cmであり、このSB01、SB02、SB03の掘立柱建物群の中では小さい。 P_{21} は10cm×20cmの自然石が存在し、 P_9 はSB03 P_9 と切り合っている。その切り合い関係は、SB01がない。柱間の距離は南北2.31m、東西2.37mで東西方向距離が6cm長い。総柱構造であるところから倉庫的な性格をもつ建物の可能性もあるが、 P_1 と P_9 の間にピットが検出されなかったことを重くみれば、もう少し別の機能を有したものであったとも考えられる。(内出律雄)



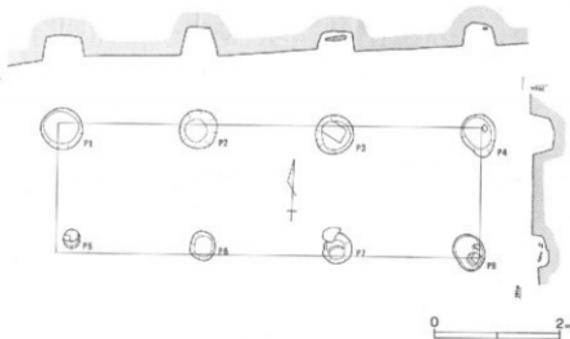
第2図 掘立柱建物跡関係図



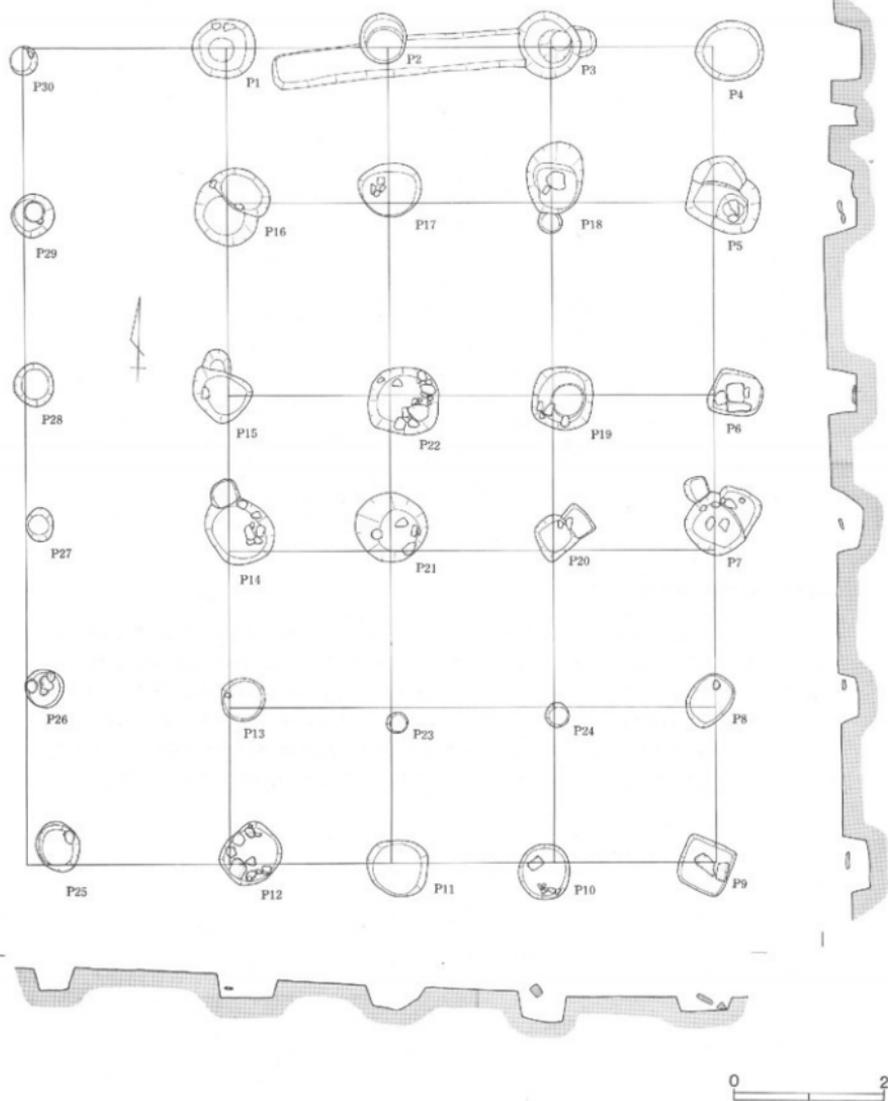
第3図 SB01 実測図

SB02 (第2号掘立柱建物跡) (第4図)

第1号掘立柱建物跡の南に長軸を東西においた1間(2.1m)×3間(6.75m)の掘立柱建物跡である。検出した8個の柱穴は円形平面プランで、最大径のP₁で68cm、最小径のP₈で30cm×28cmを測る。深さは検出面より浅いもので20cm、深いもので50cmある。P₅は柱根を固定するためと考えられる径20cm、深さ5cmの浅い掘込みがピット底部にみられる。またP₃、P₄、P₅、P₆、P₈には自然石、あるいは、割石がみられる。とりわけ、P₈は37cm×25cm、厚さ8cmの扁平な自然石で、柱穴の底部より5cm浮いた状況で出土した。根石としての機能をはたしていた可能性がある。(内田律雄)



第4図 SB02 実測図



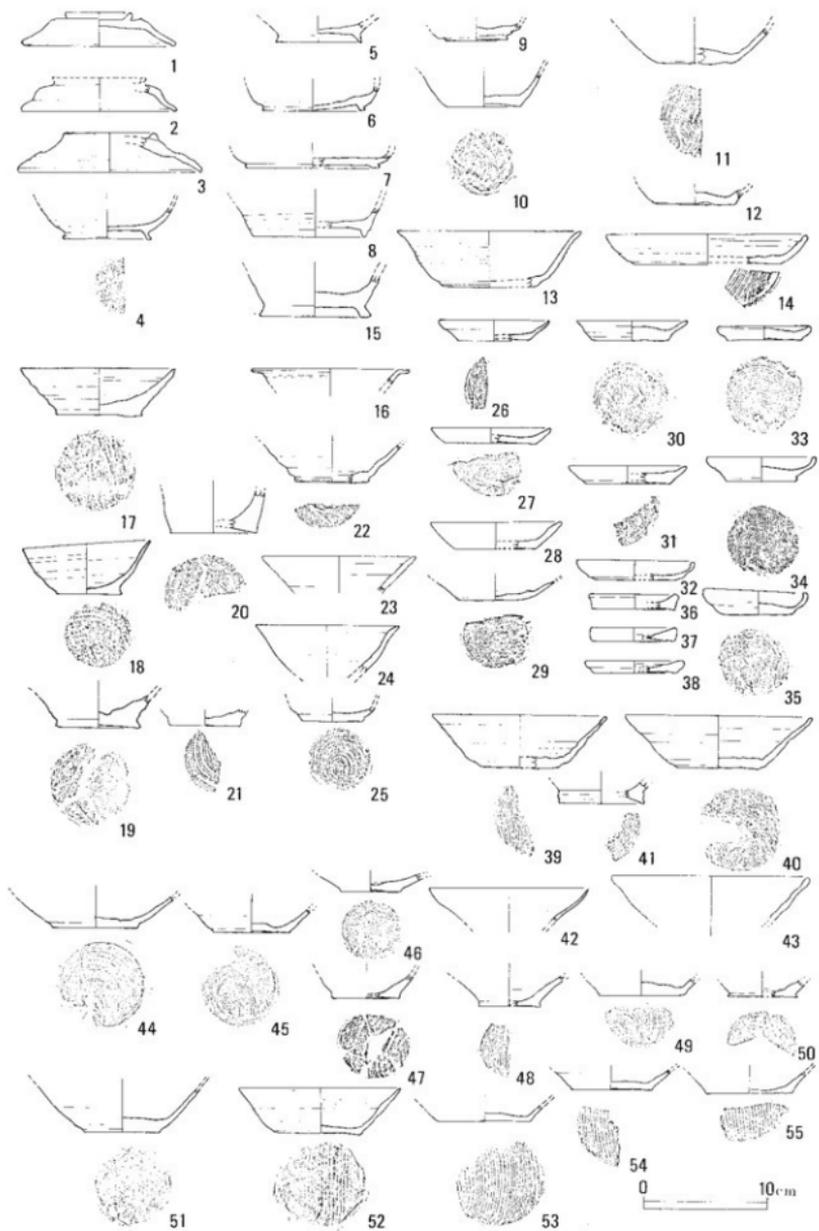
第5圖 S B 03 実測図

SB03 (第3号掘立柱建物跡) (第5図)

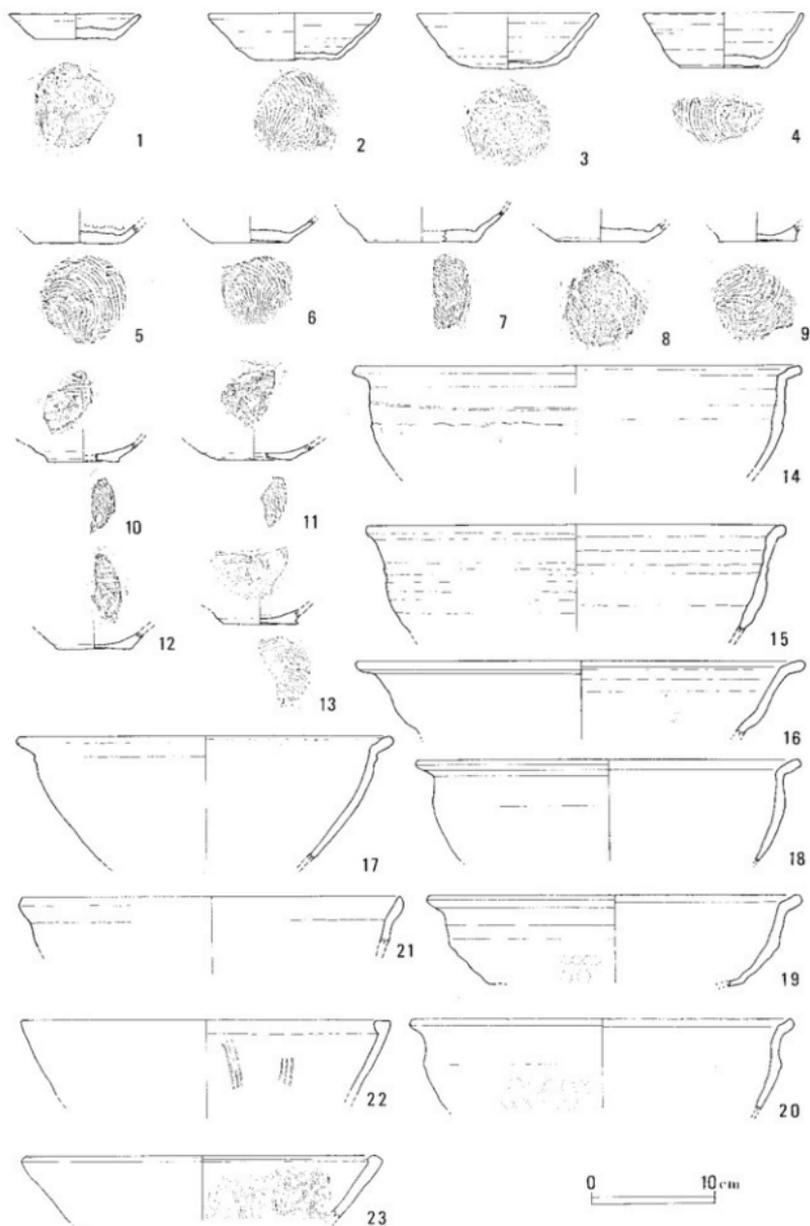
第1号掘立柱建物跡、及び第2号掘立柱建物跡の上に重複する総柱構造の掘立柱建物跡である。3間(6.46m)×5間(10.96m)で南北に長く、柱穴は24個全部検出された。柱穴掘方の平面プランはほとんど円形であるが、P₅、P₆、P₉、P₂₀、P₁₉の様に方形プランと考えられるものが混在する。平均的な柱穴は径90cm、深さ40cmから50cmほどである。柱穴の底はほぼ水平であるがP₁₁の様に必ずしも一律でないものがある。柱間距離は2.1mではほぼ正方形を呈するが、建物北側より二列目と三列目の間は2.58mで広がっている。また、建物の南より二列目P₂₀、P₂₄は径30cmの規模の小さなもので他の柱穴とは異なった機能を有していたものと思われる。さらに、建物の西側に沿って、南北方向に一列6個の柱穴が検出された。建物からは西へ2.66m離れ、南北の柱間距離もかなり不均等である。また柱穴の規模は径50cmから60cmとやや不整形の円形プランである。ここでは、SB03に伴う庇状のものを想定することにした。従ってSB03の入口があるとすればこの庇のある西側ということになる。(内田律雄)

掘立柱遺構及び周辺の遺物(第6、7図、図版5、6)

掘立柱遺構周辺からの遺物の大半は北側斜面からの出土である。須恵器(1-1~16)は蓋环、坏、皿等がある。蓋环(1~18)蓋は3点あり、いずれも口縁内側のかえりはなく、口徑に比して天井部は高い。1-1、3は輪状つまみを貼り付けするもので、3は判認不明であるが天井部内側に墨書痕が認められ、1は掘みの内側に「今居」と読める。1、2は胎土、焼成とも良好で暗灰色を呈し、3は焼成不良で艶く暗黄灰色である。坏身はいずれも貼り付け高台で、糸切り痕を留める。破片が多く全体を把握できないが胴部~高台にかけての器形は変化に富む。4~7は内湾ぎみに立ち上る胴部で、高台は胴部と底部の境より若干内側に貼り付けされる。8は直線的に立ち上る胴部で、胴部との境に高台を有す。皿(1-14)は口縁内に一条の沈線が廻り、底部に糸切り痕が残る。坏(1-10)は粘土塊から直接水引きしたと考えられ、輪の狭い口縁が残る。その他(1-9~12、15、16)9~12は底部のみで器種が不明だが10、11には糸切り痕が残る。15は壺の底部でしっかりとした高台を付ける。16は壺の口縁部であろう。非常に薄い。坏と同様中世陶器と呼んだ方が適当であろう。土師器(1-17~54、2-1~13)は、器形がよくわからない第1図20のようなものを除けば坏と皿である。坏(1-17~19、21~25、39、40、42~55、2-2~9)は全形を知るものが少なく底部の破片が大多数を占めている。器形は概ね逆「八」形に外反するものが多い。器形をよく保っている土器から類推すると、口徑は12.8cmから15.2cmのものまで存在する。底部は6cm~7cmの土器が主流である。器高もばらつきがあるが3.8cmから4.5cmまでの間に集約できる。底部の切り離しで大別すると、回転糸切りを施すA類(1-17~19、21、25、39、40、44~51) 静止糸切りを施すB類(1-52~55)、回転とも静止ともつかない糸切りを行なうD類(1-22)とがある。A、B類は胎土は比較的良好なものが多く、色調は淡黄灰色を呈す。これに対してC類では胎土は荒く砂粒が多い。色調は淡茶灰色を呈す。皿(1-26~35、2-1)は器形に変化が認められる。口縁部が短く逆「八」形に外反するA類(1-26~31、2-1)と口縁部が内湾するB類(1-32~35)口縁部と底部の区別ができないほど立ち上りの短いC類(1-36~38)とがある。調整はいずれも内外面ともに回転ナデを施し、底部の切り離しは2-1を除いて回転糸切りを行なう。2-1は坏C類に対応する土器で、胎土は荒く底部に糸切り痕を残す。A類では口徑が9~10.6cm底径が5.6~7.2cmに集約され、器高は1~2cmである。C類は口徑が7~8cm底径6.8cm、器高が1.2cmで器高が低く、口徑底径の差が殆んど認められない。へら書き土器(2-10~13)は皿か坏かよくわからないが、見込み「寺」とへら書きする土器が四点出土している。胎土焼成とも良好で、底部は回転糸切り痕が残る。色調は黄灰色を呈す。他に土鍋(2-14~21)や、すり鉢(2-22、23)が出土している。(卜部吉博)

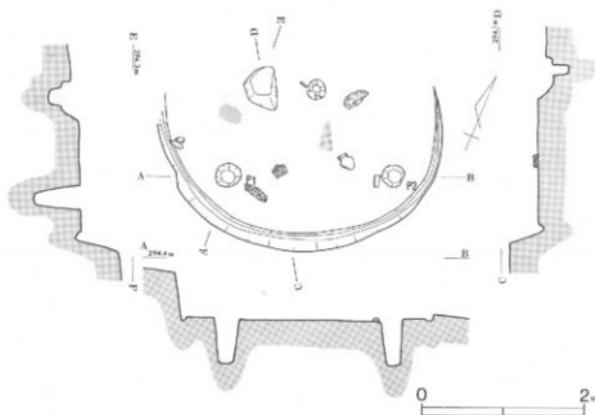


第6図 獨立柱建物跡及び周辺出土遺物(1)



第7图 掘立柱建物跡及び周辺出土遺物(2)

竪穴住居跡



第8図 S I 01 実測図

側溝は幅約8cm、深さ6cmで全体に巡っている。壁は現存する南側で高さ約60cmを測り、80°の傾きである。床面はほぼ水平でその径は約3.5mある。床面積は残存部で6.6m²ある。また、中央ピットの南側と住居跡の中央に、それぞれ30cm×20cm、34cm×12cmの築土面が存在する。また中央ピットの東1mのところ、P₁付近に合計3ヶ所住居に使用された木材と考えられる炭化物が残存していた。

(内田律雄)

遺物 (第9図図版40)

甕と高坏が出土している。甕C(第9図1~5)すべて床面出土である。シンプルな複合口縁を持ち、やや外方に開く。体部は、その最大径が、ほぼ胴部中央に位置し、底部は面積の小さな平底になると考えられ、全体に丸い感じを与えるものである。調整は口縁部頸部は内外面ともに横ナデ、胴部は外面が目の細いハケ目調整、内面は丁寧なヘラ削りを行う。

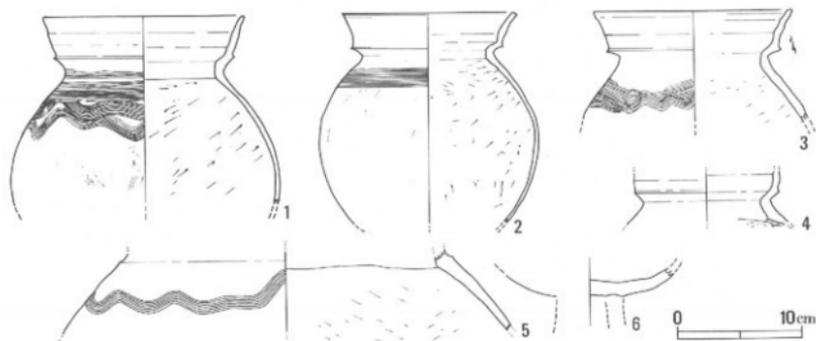
1は口径16cm、胴部最大径21.5cmを計る。器厚は胴部で0.3cmと薄い作りである。胎土は一部に砂粒を含む精選されている。焼成は良好で色調は淡赤褐色を呈す。胴部上半にはハケの上から櫛描波状文、平行線文を施すが、波状文は乱れている。2は口径14cm、胴部最大径17.6cmを計る。器厚は胴部で0.3cmと薄い作りである。胎土はよく精選されており、緻密である。焼成は良好で黄褐色を呈す。口縁端部は平らに作る。胴部は上半には櫛描平行線文を施す。3は復原口径15.8cmで器厚は0.5cmと、この類のものとしては厚めの作りとなっている。胎土には若干の砂粒を含み、焼成はやや不良である。色調は暗黄灰色を呈す。口縁端部は平らに作られている。櫛描波状文は粗雑になっている。4は胎土、焼成ともに良好で淡黄褐色を呈す。5は、胴上半部のみ存在するが乱れた櫛描波状文が認められる。器厚は0.5cmと若干厚めで、胎土には砂粒を若干含む。焼成は良好で淡黄灰色を呈す。

高坏(第8図6)は一点のみ出土している。受け部の破片で全形は判然としないが脚部との接合部が明確に残る。受部内面はハケ目を施す。(卜部吉博)

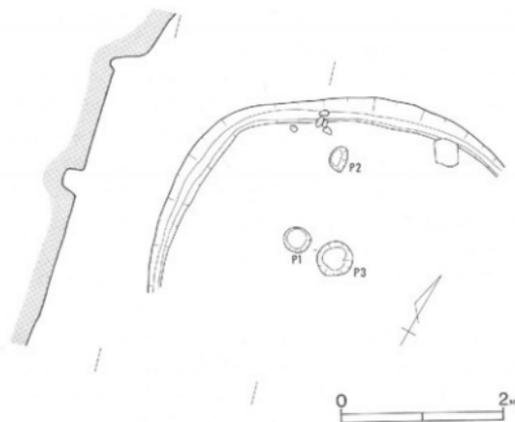
S I 01 (第I号住居跡、

第8図、図版7)

調査区域の北東隅に発見された住居跡で、住居跡の北側約3分の1は傾斜面のため削尖している。残存部を観察すると、ほぼ円形平面を呈しながらも、柱穴と考えられるP₁、P₂付近にはやや角を残している。P₁とP₂の間隔は2.1mで(7尺)ある。中央のピットは40cm×52cm、深さ38cmの不整形である。



第9図 S I 01 遺物実測図



第10図 S I 02 実測図



第11図 S I 02 遺物実測図

S I 02 (第2号住居跡, 第10図, 図版7)

調査区の東南隅に存在する住居跡で、南側が傾斜面のため、全体の約3分の1が残る。残存部の観察では、住居跡の平面プランはほぼ円形と考えられるが、北西隅にやや角を残すものである。住居跡の径は復元すれば4.5mほどと考えられる。ピットは3穴検出され、P₁は柱穴、P₂は不明。P₃は中央ピットと考えられ45cm×45cm、深さ30cmを測る。側溝は最大幅18cm、最少幅10cm、深さ8cmで全体に巡っている。現存する北側の壁は約32cmの高さで、70°の傾きをもつ。床面はほぼ水平である。住居跡北壁の床面に接し、34cm×28cm、厚さ10cmの自然石を利用した石皿様石器(第10図)が出土している。また、周溝上に石器として用いられたと考えられるこぶし大の自然石の集石があった。

第2号住居跡の西に発見された住居跡で、住居跡の南側は約2分の1損壊している。残存部から判断すると、いわゆる隅丸方形の平面プランであると考えられる。柱穴と考えられるピットを合計6穴検出したが、P₁P₄P₅P₆は不規則であり、また、他の住居跡にみられるような中央ピットは検出できなかった。P₁とP₂との間隔は2.70m(9尺)である。残存する北壁は壁高60cmあり75°の傾きをもつ。側溝は最大幅22cm、最小幅8cm、深さ4cmで全体に巡っている。ただし、住居跡の北から北西にかけては、側溝と壁との間に15cmの平坦面があり、建てかえの行なわれた可能性もあるが、土層の観察からは確認できなかった。また、住居跡の西南隅は後世の土坑状ピットによって大きく削り取られている。住居跡の床面は水平である。現存する部分の床面積は24.9㎡ある。また、住居跡外の北東に25×26cm、厚さ10cmの扁平な自然石があったが、当住居跡との関係は不明である。(内田律雄)

遺物(第13図, 図版40),

甕, 高坏, 低脚鉢, 底部が存在する。

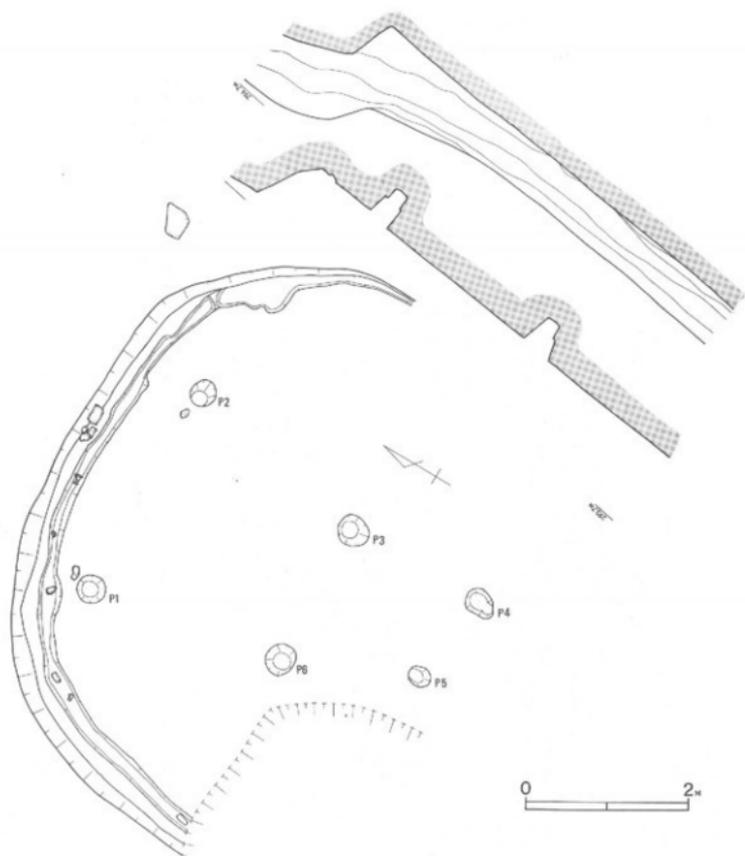
甕C(第13図1, 2)は複合口縁を呈す。口縁部はやや外方に開きながら立ち上っている。1は復原口径14.6cmを計る。口縁から頸部の内外面は横ナデ、胴部内面はへら削りを施す。胴上部内面はへら削りを行う。胴部の厚みは0.4cmを計る。胎土は緻密なるも、焼成はややもろい。色調は黄灰色を呈す。2は口縁部のみ存在する復原口径22.2cmを計る。内外面とも横ナデを施す。口縁部は丸く仕上げる。胎土は良好であるが焼成はややもろい。色調は黄灰色を呈す。

高坏C₂(第13図3~5)4, 5は床面出土である。4は口唇をつまみ上げる無段のものを一括した。3は復原口径28.6cm器厚0.6cmを計る。口唇は横ナデ、内面はへら磨きを施す。胎土、焼成ともに良好で、黄灰色を呈す。4受部のみ存在する。受部は内湾きみに外方に開く。口径12.6cm、受部高3.8cm、器厚は0.7cmを計る。口唇は内外面とも横ナデ、受部内面は縦方向のへら磨きを施す。脚部接合部外面には指頭による押圧が認められる。胎土には若干の砂粒を含む。焼成はややもろく、黄灰色を呈す。5は復原口径18cm、器厚0.8cmを計る。胎土には砂粒を若干含むけれども焼成は良好である。色調は黄灰色を呈す。風化が著しいため、調整不明である。

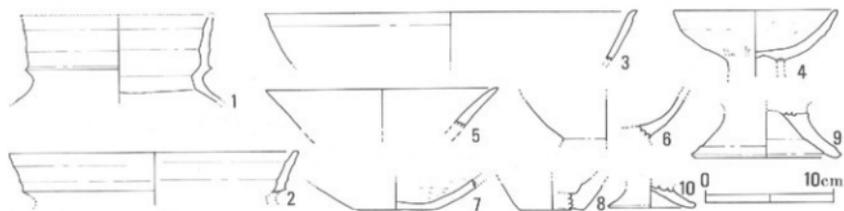
鉢(第13図6)は底部近くの破片である。外面は縦方向に細いハケ目が認められる。胎土は良好である。黄灰色を呈す。

底部(第13図7, 8)は鈍角に立ち上る7と鋭角に立ち上る8とがある。7は底と胴部との境が必ずしも明確ではなく器厚も均一である。底径6.5cm、器厚0.6cmを計る。内面は横方向のへら削りが認められる。胎土は緻密で焼成は良好である。淡黄褐色を呈す。8は復原底径4.8cm、器厚1.4cmを計る。底外面は、やや中凹みを呈し、へら削りを施す。側面にはへら磨きが認められる。内面には指頭による厚さ0.5cmを計る。焼きはややもろいが、胎土は緻密である。黄灰色を呈す。

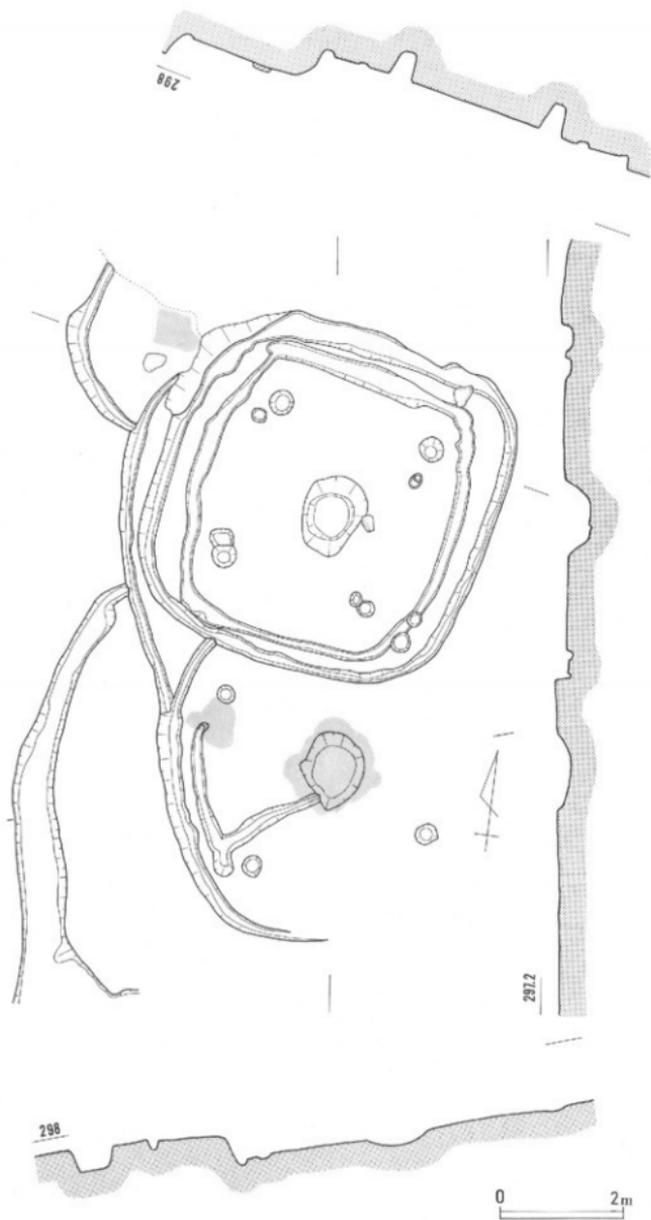
低脚(第13図9, 10)10は床面出土である。大小2個体が存在する。9は脚の復原径11.4cm、脚高3.5cm、器厚は1.5cmを計る。外面は縦方向のハケ目を施した後、指頭による押圧が認められる。脚端部及び内面は横ナデによる調整を施す。10は脚径6.7cm、脚高1.7cm、器厚0.5cmを計る。内外面、ナデによって仕上げる。胎土には砂粒を含むけれども、焼成は良好である。茶褐色を呈す。(卜部吉博)



第12图 S I 03 实测图



第13图 S I 03 遗物实测图



第 14 圖 S I 04・05・06・07. SD01關係圖

S 104 (第4号住居跡, 第14図, 図8版)

発掘区のはほぼ中央に位置する住居跡群中の一つで保存状態の比較的良好な住居跡である。一辺約5.5mのやや扇張りのある隅丸方形の平面プランを呈す。ピットは合計8穴検出し、そのうち柱穴と考えられるのはP₁, P₂, P₃, P₄, P₅, P₆であり, P₇, P₈は不明である。また, 中央ピットは1.3m×0.9m, 深さ0.4mである。側溝は全周し, 最も広い北側で幅46cm, 他は20cmで深さは8cmである。壁高は比較的良好な保存状態の良い西側で32cm, 最も低い東側で17cmである。床面はほぼ水平である。床面積は19.3m²である。また, 床面に接して炭化した木材が残存していた(図版10)。さらに, 住居跡南側側溝上にこぶし大の集石があり, 住居跡東北隅には40×30cmの自然石を利用した石皿様石器があった。(内田律雄)

遺物(第16図・図版41)

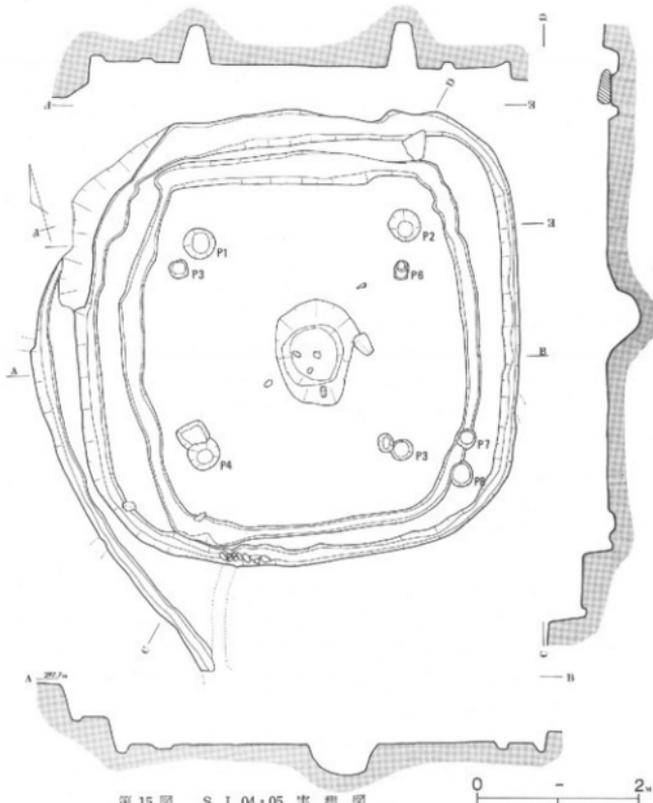
甕と壺が出土している。

甕D₂(第16図1~3) この類は「く」字に外反する口縁を持つもので, 口縁端部をつまみナゲするものを

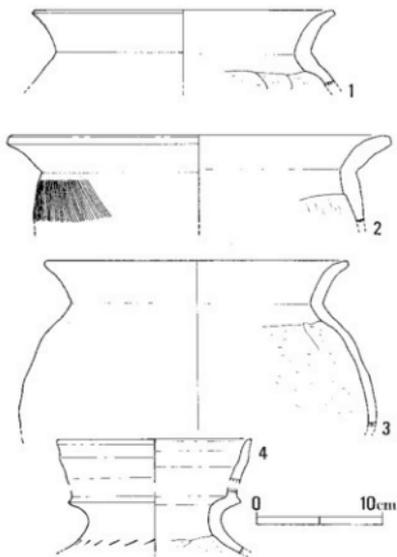
一括した。

総じて, 器厚は厚く, 胎土に砂粒を多量に含み, そのプロポーシオンもいびつなものが多い。

1は床面出土のもので, 復原口径23.7cm, 器厚は1.3cmを計る。外面は風化が著しく調整不明であるが, 内面は口縁部が横ナデ, 頸部が丁



第15図 S I 04・05 実測図



第16図 S104遺物実測図

峯なへう削り、胴部は荒いへう削りを施す。胎土には0.5cm大の砂粒を多量に含み、焼きはややもろい。赤横褐色を呈す。

2は中央ビット出土のもので復原口径29.8cm、器厚1.5cmを計る。厚手で口縁端部には面が存在する。調整は口縁部から頸部にかけて内外面ともに横ナデが施されている。ただし、口縁部外面には縦方向のハケ目の痕跡がありこの部分の荒仕上げにはハケ目調整が行なわれていたらしい。胴部は外面が縦方向のハケ目調整が行なわれ、内面は下から上への荒いへう削りが施されている。胎土には0.5cm大の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で黄褐色をなす。

3は床面出土の土器で復原口径239cm、器厚1.0cmを計る。調整は口縁部から頸部にかけて横ナデが内外面ともに施され、胴部は外面が縦方向ハケ目、内面は上部では横方向の荒いへう削り、中部では斜め上への荒いへう削りを行っている。胎土には0.5cm大の砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

壺(第16図, 4)中央ビットから出土した土器である。基本的には甕Cと同様に複合口縁をなす。復

原口径15.3cmを計る。調整は外面に於ては口縁から胴上部にかけて横ナデが施され、内面では口縁から頸部にかけて横ナデ、胴上部では縦方向のへう削りが施されている。なお、胴上部外面には櫛状工具による左下りの「ノ」字状刻突文が施文されている。(卜部吉博)

S105 (第5号住居跡, 第16図, 図版8)

第4号住居跡の床面に発見された住居跡。したがって壁高は残存しない。一辺約4.5mのやや胴の張った隅丸方形の平面プランを呈す。床面積は15.3m²。周溝は全体に廻り最も広いところで40cm、狭いところで12cm、深さ8cmを測る。この住居跡と考えられるビットはP₅、P₆で中央ビットは第4号住居跡のそれと重複していると考えられる。(内田律雄)

S106 (第6号住居跡, 第17図, 図版10)

第4号住居跡の南に発見された住居跡。第4号住居跡によって、住居跡北側の壁及び側溝が失なわれ、東から南にかけても、後世の地山成形のため消失している。残存部から推定すると、かなり胴の張った隅丸方形であると考えられ、復原した住居跡の径は5.5mほどになる。ビットは住居跡隅に4穴発見された。P₁、P₃、P₄の間隔はそれぞれ2.85m(9.5尺)を測る。中央ビットは1.3×1.0m深さ20cmの不整形なものである。側溝は残存部には余てみられ、幅16cm、深さ10cm。また、側溝の内側に長さ2.5m、幅20cm、深さ6cmのL字形の溝が存在し、その一方は中央ビットにつながっている。床面はほぼ水平で、その面積は18.5m²である。(内田律雄)

遺物(第18図, 図版41)

甕, 高坏, 鉢, 底脚部底部破片が出土している。

甕D₂(第18図1~4)いずれも「く」字に折れ曲る口縁を持つ上器で口縁端部にはつまみナデを施す。1・3・4は床面出土である。総じて胎土には若干の砂粒を含むけれども良好で、焼成も良い。

口縁部にはつまみナデを施す。

1は復原口径13.4cmを計り、暗黄灰色を呈す。2は復原口径19.8cmを計り、頸部以下内面にはへら削りを施す。黄褐色を呈す。3は復原口径20.2cmを測る土器で、口縁端部は平に仕上がっている。頸部以下内面には横方向のへら削りを施す。黄褐色を呈し、炭化物を施す。4は復原口径14.5cmを計る土器で、胴部外面には細いハケ目が施されている。頸部内面には粘土の接合痕が認められる。頸部以下内面にはへら削りが施されている。暗黄灰色を呈し、器表面には炭化物が付着する。

甕C（第18図，5）は復原口径14.4cmを計る複合口縁を持つ土器である。口縁部外面は横方向のハケ目を施した後、横ナデを施す。内面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部にはへら削りを行う。口縁端部は平につくる。黄褐色を呈す。

高坏（第18図6～10）坏部のみ残す6、坏と脚部の一部を残す7脚部の一部のみを残す9、10が存在する。7・8・9・10は床面出土である。いずれも黄褐色ないし、黄灰色を呈す。坏部の調整では6・7では内外面ともにハケ目調整の後、へら磨きを施す。脚部では外面は坏部と同じであるが、内面は横方向のへら削りを行う。

鉢（第18図11）床面出土の土器である。復原口径11.5cmを計る。胎土・焼成ともに良好で、黄灰色を呈す。内面はへら磨きを施す。

低脚坏坏部（第18図12）床面出土の土器である。口径7.7cmを計る。黄灰色を呈す。器面の剥著著しく、調整は不明である

底部（第18図13）肉厚の底を有す土器でやや内湾ぎみに立ち上る胴部が付く。復原底径8.6cmを計る。内面はへら削り、底外面にはハケ目が残る。（卜部吉博）

S107（第7号住居跡，第19図，図版8）

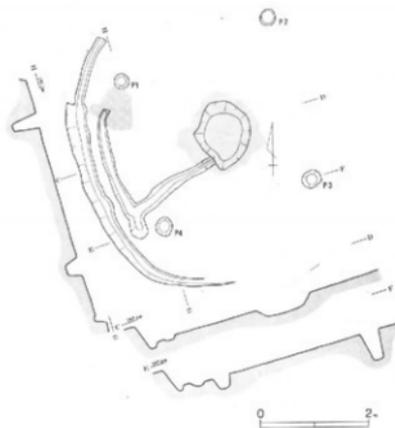
第4号住居跡の東に検出され、第4号住居跡及び第6号住居跡によって損壊し、壁と側溝の一部を残すのみである。壁高は42cm、側溝は幅22cm、深さ5cm現存する長さ約5.5mを測る。（内田律雄）

遺物（第19図・図版43）

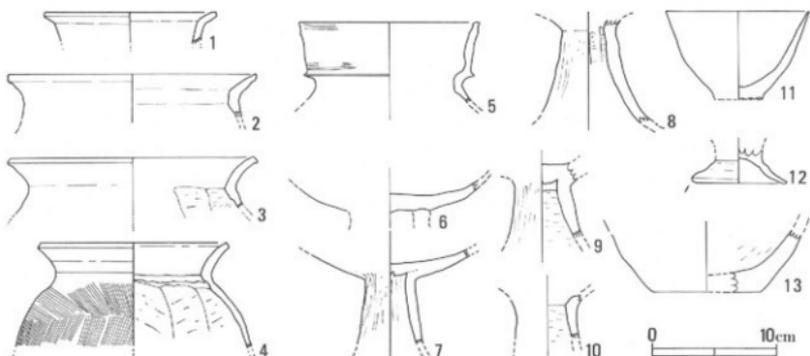
甕と底部破片が出土している。

甕B（第19図1）口縁部をくり上げぎみに外方へ拡大する土器である。この土器は床面から出土した土器である。調整は口縁拡張部外面と口縁から頸部にかけての内面で横ナデ、口縁部から頸部にかけての外面は縦方向にハケ目を施す。頸部以下の内面はへら削りを行う。胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好である。色調は暗黄灰色を呈す。口縁部から頸部にかけての外面には炭化物が付着する。

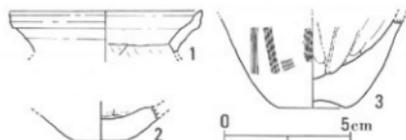
底部（第19図2，3）は2個体出土している。2は比較的鈍角に立ち上る土器である。底径は4cmを計る。接地面はやや明確



第17図 S106実測図



第18図 SI 06遺物実測図



第19図 SI 07遺物実測図

きを欠く。外面の調整は不明であるが、内面はへら
削り痕が残る。3は鋭角に立ち上る土器である。底
径は51cmを計る。底は上げ底状に中間む。調整は、
外面が縦方向のハケ目を施す。内面は指腹を利用し
て強く押し引いている。胎土には0.5cm大の砂粒を
多量に含み、焼きは軽弱である。赤褐色を呈す。器
面の凸凹が著しい。(卜部吉博)

S.I.08 (第8号住居跡, 第20図, 図版11)

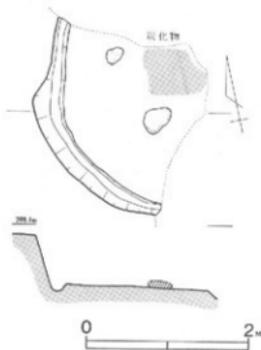
第4号住居跡の西に発見された住居跡。第4号住居跡, 第7号住居跡によって東側は消失しており, 北側も後世の破壊をうけている。従って約4分の1が残存する。残存部から推定すると円形の平面プランが考えられる。西側に残る壁高は60cmである。床面はほぼ水平で, 床面積は2.5cmある。床面に接し, 自然石を利用した磨石様石器があり, その付近に炭化物が認められた。柱穴及び, 中央ピットは検出されなかった。(内田律雄)

遺物(第21図22図, 図版42)

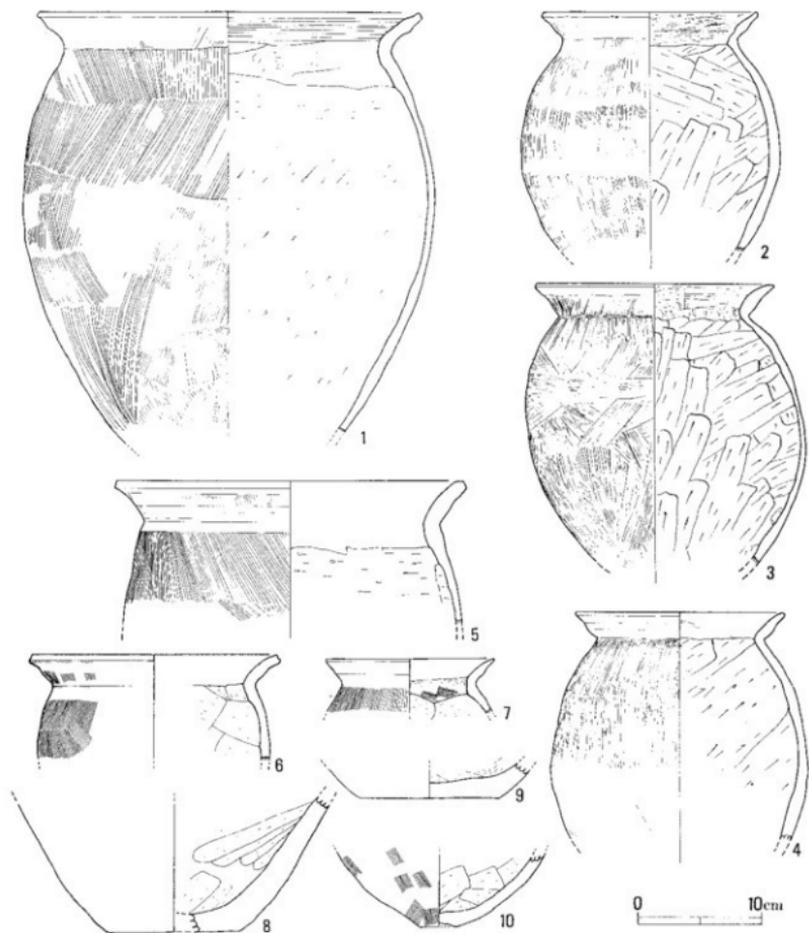
甕と底部破片が出土している。

甕D₂(第21図1~7)は大小の差はあるものの「く」字口縁で, 最大径が胴部中央に位置する土器である。口縁端部は角がなす1, 2, 5, 6と比較的丸く収まる4, 7とがあるが, いずれも口縁端部はつまみナデを施している。調整は口縁部外面を横ナデ, 胴部にハケ目を施すことを基本とするが, 口縁部に縦方向のハケ目の痕跡を残す1, 5, 6が存在し, また, 2, 3のように縦方向のハケ目を残したままにする土器も存在する。口縁部内面にはいずれも横方向のハケ目が残り, 胴部はへら削りを残す。

1は復原口径30.8cmを計る大形品である。床面からの出



第20図 SI 08実測図



第21図 S I 08 遺物 実測図

土で、最大径はほぼ胴部中央に位置し、33.6cmを計る。胴部中央から上部のハケ目は比較的整然と施されるけれども、下部では乱れる傾向が見られる。焼成は良好であるが胎土には0.3cmほどの砂粒を多量に含む。暗黄灰色で器表面と胴部下位内面に炭化物が付着する。2は床面出土の土器で、復原口径17.0cm、胴部最大径20.6cmを計る。口縁内面のハケ目は乱れが著しく、胴部内面のへら削りもその方向が一定しない。黄褐色を呈す。胎土には0.4cm大の砂粒を含み、焼成は良好である。3は床面出土の土器である。「く」字に折れ曲る口縁部は中ほどで内側にふくらむ形をとる。器表面のハケ目は口縁部と胴部上位と下位では縦方向、中位では横方向を基調とするけれども、中位に於いては乱れが

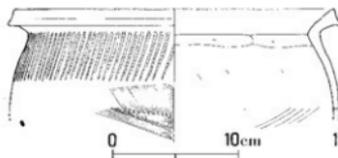
認められる。口縁部では12条の単位が認められた。口縁部と胴部の接合部の内面には指頭圧痕が認められる。胎土には0.4cm大の砂粒を多量に含む。黄褐色で焼きはかたい。4は床面出土の土器である。口径16.8cm、胴部最大径20.6cmを計る。胎土には砂粒を多量に含むけれども焼成は良好である。黄灰色を呈するが器表面には炭化物が付着する。5は床面出土の土器で、復原口径28cmを計る。胎土には0.5cm大の砂粒を含む。この砂粒にはいずれも角のとれたもので河川内の砂利を想起させるものである。焼成は良好で、暗赤褐色を呈す。口縁部外面には炭化物が付着する。6は床面出土の土器である。復原口径36cmを計る。0.3cm大の砂粒を多量に含む。焼成は良好で黄灰色を呈す。口縁部には炭化物が付着する。7は復原口径13.4cmを計る。口縁部と胴部の接合部内面には指頭圧痕が認められる。胴部内面のへら削りは荒い。器表面には炭化物が付着する。

底部(第22図8~9)は3点出土している。9と10は床面出土である。8, 9は安定した平底をなし、8が復原底径10.3cm, 9が復原径10cmであるのに対し、10は中間みで底径が39.1cmを計り、不定な感じを与える。調整は安8が外面ハケ目、内面へら削り、で底外面はへら削りを施す。9は外面横ナデ、内面へら削り、で底外面は横ナデを施す。10は外面ハケ目、内面へら削りを施す。いずれも胎土には砂粒を多量に含む。焼成は良好である。(ト部吉博)

S109 (第9号住居跡, 第23図, 図版12)

第8号住居跡と第10号住居跡とによって、ほとんど消失しているが、壁、側溝、床面の一部を検出することが出来た。残存する壁高は50cm、側溝は幅28cm、深さ14cm、床面積は1.0㎡ある。(内田律雄)

遺物(第22図) 側溝際の床面直上から出土し、S109に確実に伴うと考えられる土器である。



第22図 S108遺物実測図

甕B(1)くり上げ状の口縁になる。口縁部はやや凹む広い面を持ち、肥厚する。頸部は短く胴部の張りはずかである。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目、胴部内面上半は横方向、下半は縦方向のへら削り調整を施す。また、胴部にはクシ状工具によって「ノ」の字の施文をする。(橋浦俊一)

S110 (第10号住居跡, 第23図, 図版12)

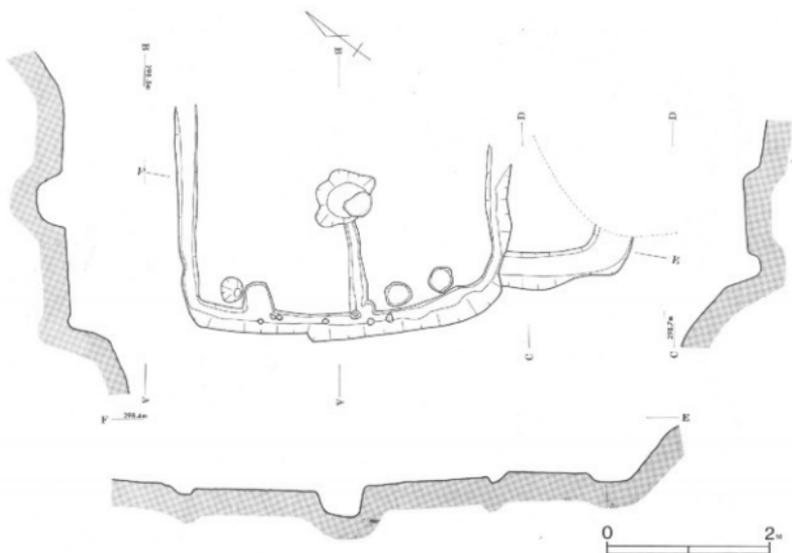
第9号住居跡の西に発見された住居跡で、方形の平面プランを呈す。住居跡の北側は、約3分の1尖なわれている。側溝は全体に巡り、幅25cm、深さ6cmを測る。また、側溝から中央ピットをつなぐ幅18cm深さ6cmの溝も検出された。ピットはP₁、P₂、P₃の3穴が発見されP₁とP₃が柱穴と考えられる。中央ピットは0.7×0.7m、深さ0.3mの不整形である。床面はほぼ水平である。壁高は南側で約60cm70°の傾きである。中央ピットを塞ぐように石皿様石器があった。(内田律雄)

遺物(第24, 25図) 遺構に伴う遺物(第2図)中央ピットから甕、碗がまとまって出土している。

甕D₂(24図1~6, 9)口縁部は「く」の字に反外、口唇部に面を持つが、丸くなり不明瞭である。口唇部がわずかに凹線状に凹むものもある(第24図2, 5)。ほとんどが胴があまり張らず長胴となるが、4や5のように胴部はかなり張り球形である。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へら削り調整するものが一般的だが、1は口縁部内面にもハケ目調整を施す。また6は頸部に指頭痕を残す。

底部(同7)胴部のたちあがりは急で砲弾形をする。底部はわずかに平底の痕跡を残すが丸底に近い。調整は内外面ともハケ目調整を施す。形態、焼成、出土状態からみて前述の甕口縁部のいずれかと同一個体と考えられる。

碗(同9)体部は内湾しながら延びるやや深身の浅である。底部はわずかに平底の痕跡が残すが丸



第23図 S109・10実測図

底に近い。調整は内外面ともハケ目調整を施す。

甕土内の遺物(第25図)

甕A(同9)「く」の字の口縁部は短く、口唇部は広い面を持ち凹線が一条はいる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へう削り調整を施す。

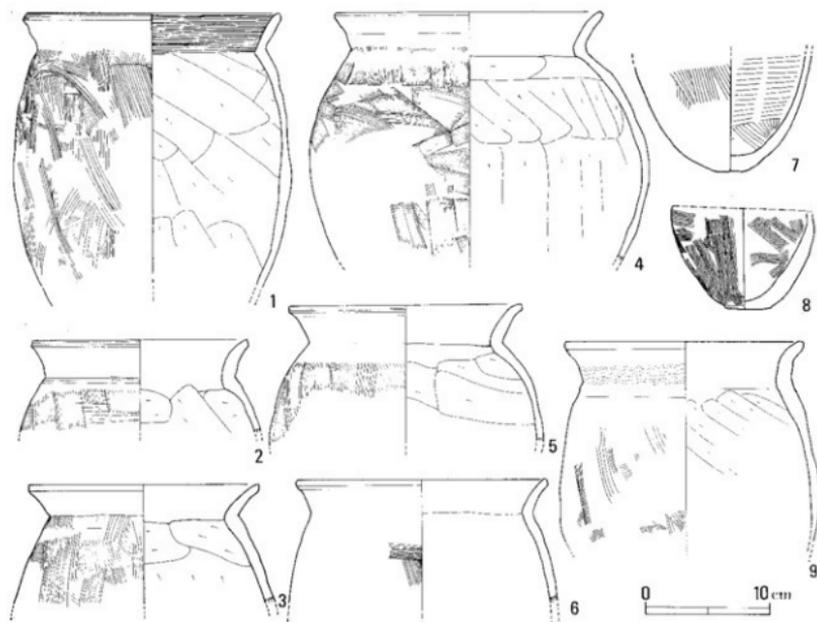
甕C₁(同14, 15, 18)複合口縁になるもので口縁部は短い。口縁部が直立するもの(18)、外反するもの(15)、口縁部の長さが非常に短いもの(14)がある。いずれも口縁部にクシ状工具による5から6条の平行沈線(15, 18)、又は凹線(14)を入れる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へう削り調整を施す。

甕C_a(同13)複合口縁で口縁部は長く内面に明瞭な段がつき、口唇部はやや凹み明瞭な面をもつ。肩はかなり張り最大径は上部にあると思われる。肩部にクシ状工具による8条の平行沈線を施す。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へう削り調整を施す。

甕D₁(同1から4, 10, 11)「く」の字口縁で口唇部は明瞭に面を持ち平坦部はわずかに凹む。肩部はほとんどが張り気味で最大径は胴部上部にあると思われる。1と11は肩部に刺突による施文をする。(1はクシ状工具による「ノ」の字状刺突文)。風化の著しいものもあるが口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へう削り調整を施すものがほとんどである。又1, 4, 10, 11は口縁部内面にもハケ目調整を施す。

甕C₂(同5から7)「く」の字口縁になり口唇部に面を持つが、丸味を帯び明瞭ではない。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へう削り調整を施す。ハケ目を戮す。

甕A(同8)口縁部がやや外反気味に延びる甕で口唇部は丸い。口縁部内面はへう磨き、胴部外面



第24図 S I 10 遺物 実測図 (1)

ハケ目、胴部内面はヘラ削り調整を施す。

壺B(同12) 袋状口縁をもち口縁部は逆「く」の字である。頸部が長く外反しており、下部には凸帯を付ける。口縁部には波状沈線が一木入る。風化が著しく調整は不明だが、口縁部、凸帯部には化粧土と思われる赤色土が付着する。

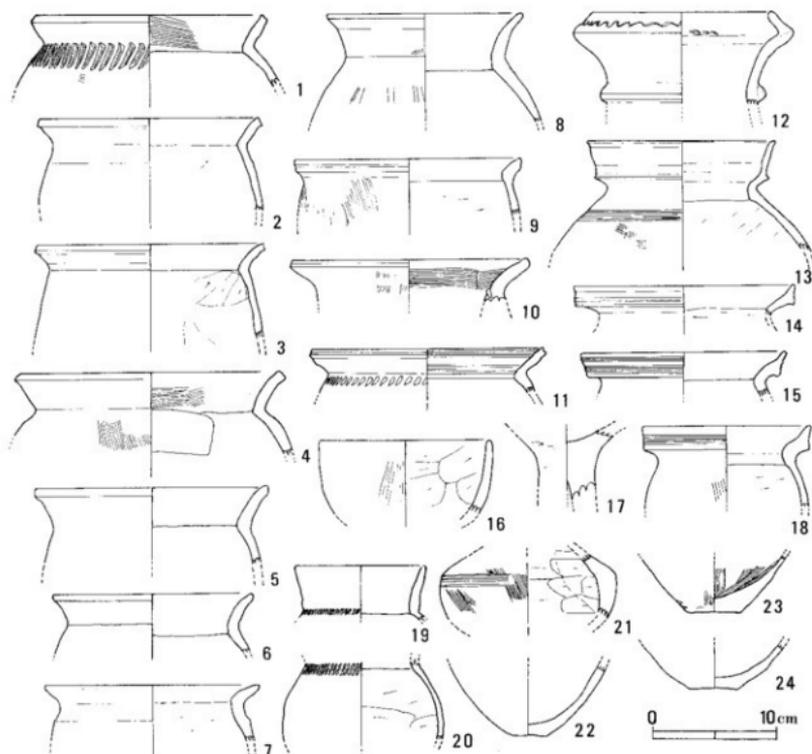
短頸壺(同19) 口縁部はやや開き気味に直線的に延び、口唇部に至る。頸部から肩部にかけでは「ノ」の字の刺突文を施す。口縁部外面はココナデ、胴部内面はヘラ削り調整を施すと思われる。口縁部外面には化粧土と思われる赤色土が付着する。

壺胴部(同20, 21) 20はほぼ球形をし最大径は胴部中程と考えられる。肩部には二枚貝腹縁による刺突文がある。内面へヘラ削り調整を施す。20は全体に器肉が厚い。肩部が張り外面にやや稜ができ、最大径は上部にあると思われる。外面はハケ目、内面はヘラ削り調整を施す。

底部(22から24) 全て平底でいずれも胴部が内湾し、開き気味に延びる。23は内外面ハケ目調整を施す。

高杯(同17) 筒部片がわずかに残る。ほぼ円筒形になると思われる。杯部内面、筒部外面ともヘラ磨きを施す。

碗(同16) 底部は欠損するが体部は内湾しながら延び、そのまま口縁部に至る。口唇部は丸く終る。調整は体部外面にハケ目、体部内面へヘラ削り調整を施す。(柳浦俊一)



第25図 S I 10 遺物実測図(2)

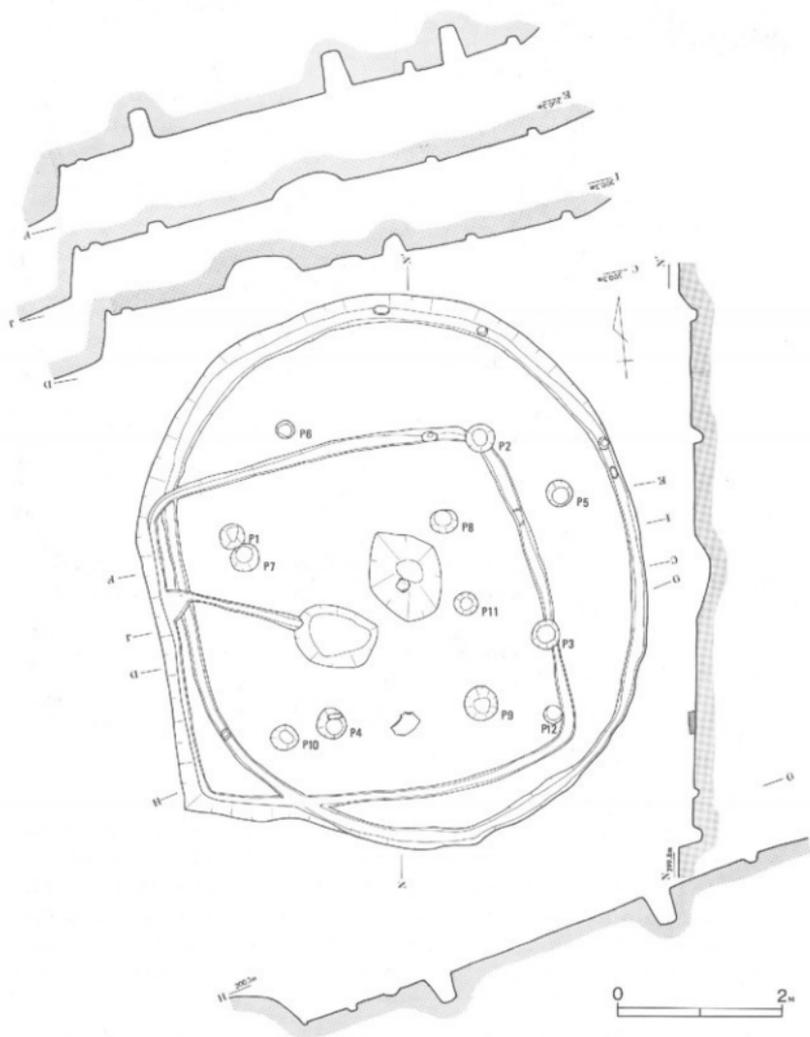
S 111 (第11号住居跡, 第26図, 図版14)

調査区域のほぼ中央に第12号住居跡と重複しあう状態で検出された。長径6.9m, 短径5.7mの楕円形の平面プランを呈し、床面積は23.8㎡とこの遺跡の中では規模の大きな住居跡である。柱穴と考えられるピットはP₁, P₂, P₃, P₄, P₅, P₆である。P₂~P₃の間は2.55m (8.5尺), P₃~P₄の間は2.85m (9.5尺)である。中央ピットは1.1m×0.9m深さ0.2mの不整形なものである。側溝は幅約25cm, 深さ8cmで全体に巡っている。壁高は西側で16cm, 70°の傾きである。床面はほぼ水平で、また床面に接し、P₄付近に花崗岩の割石による石皿椀石器が、また住居跡東側側溝内より磨石が発見された。(内田律雄)

遺物(第27図) 遺構に伴う遺物(同2, 5, 6)中央ピット内から出土した, 壺, 壺, 高杯がある。

壺C₃(同5) 複合口縁で, 口縁部は長く内面に段をつけ外反する。口唇部は面を持ちやや凹む。口唇部内外面ヨコナデ, 胴部内面へラ削り調整を施す。

壺A(同6) 口縁部は直立気味に外反する直口壺である。胴部はほぼ球形をなす。口縁部はヨコナデ, 胴部外面ハケ目, 胴部内面へラ削り調整を施す。頸部内面には口縁部と胴部の接合痕が明瞭に残



第26圖 S I 11・12 穴測圖

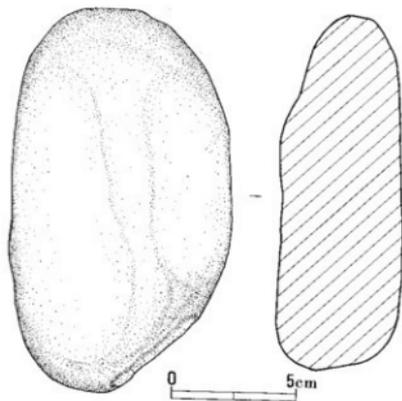
る。

高杯C₂(同2)口縁部は大きく開き、浅い皿形をする杯部である。口縁端部でわずかに外反する。調整は内外面ハケ目の後にへう磨きを施す。内面にわずかにハケ目痕を残す。

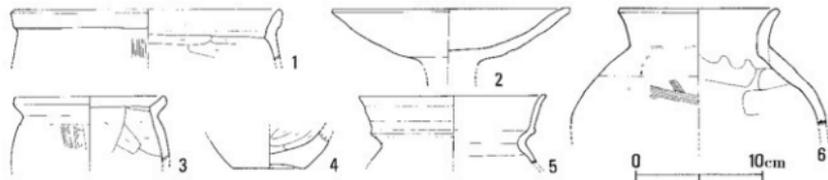
覆土内の遺物

甕B(同1)口縁部は短く、くり上げ状をなす。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へう削り調整を施す。

甕D(同3)「く」の字口縁をなし口唇部は平坦で明瞭な面を持つ。甕部は短く、胴部の張りはわずかである。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へう削り調整を施す。



第27図 S I 11 遺物実測図(1)

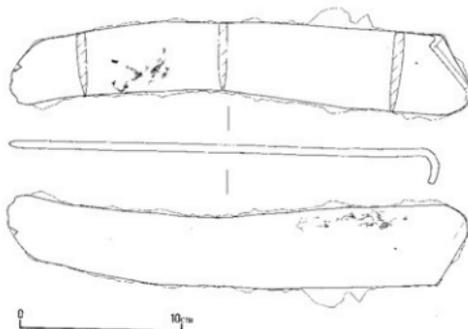


第28図 S I 11 遺物実測図(2)

底部(同4)凹み底。胴部は内湾気味に延びる。内面へう削り調整を施す。

鉄製鎌(第29図)住居跡北壁に貼り付いた状態で出土し、全長28.3cm、幅4.9cm、厚さ6mmの大形製品である。柄の取り付け部が折れかえされている。一部に木質が認められる。

(柳浦俊一)



第29図 S I 11 遺物実測図(3)

SI12 (第12号住居跡, 第26図, 図版14)

第11号住居跡と重複して検出される。平面プランは $4.4m \times 4.8m$ の方形であるが、その四角はやや丸味を帯びている。柱穴と考えられるピットはP7, P8, P9, P10, P11である。P7~P10の間隔は $2.4m$ (8尺)で正方形となる。中央ピットは $1 \times 0.75m$ の深さ $0.3m$ の不整形なものである。側溝は幅 $18cm$ 、深さ $10cm$ で全体に巡る。側溝より中央ピットにむかい幅 $16cm$ 深さ $5cm$ 長さ $1.6m$ の溝が検出される。壁高は比較的保存状態の良い西側で $50cm$ を測る。床面はほぼ水平でかつ貼床である。床面積は $12m^2$ ある。(内田律雄)

SI13 (第13号住居跡, 第30図, 図版16)

発掘区のはほぼ中央の北側傾面に検出された住居跡である。住居跡北側は消失しているが約 $4.4m \times 4.4m$ の方形平面プランであろう。側溝は残存部においては全体に巡り、その幅は広いところで約 $34cm$ 、狭いところで約 $14cm$ を測る。壁高は約 $8cm$ で 60° の傾きがある。柱穴と考えられるピットはP1からP7で、P1からP3の間隔は $2.1m$ (7尺)である。また、他の住居跡の柱穴と比して小形であるがP1は、根石及びつめ石が施されているのが注意される。中央ピット径約 $0.6m$ 深さ $0.16m$ の小形のもので、これにむかい住居跡の西、東、南の三方角の側溝より幅約 $10cm$ 深さ $5cm$ の溝が集中している。床面はほぼ水平で、残存部の床面積は $15.2m^2$ で、約 $20cm$ の厚い貼床を行なった上に、全面にわたり平均約 $3cm$ の白色粘土による化粧が施されている。

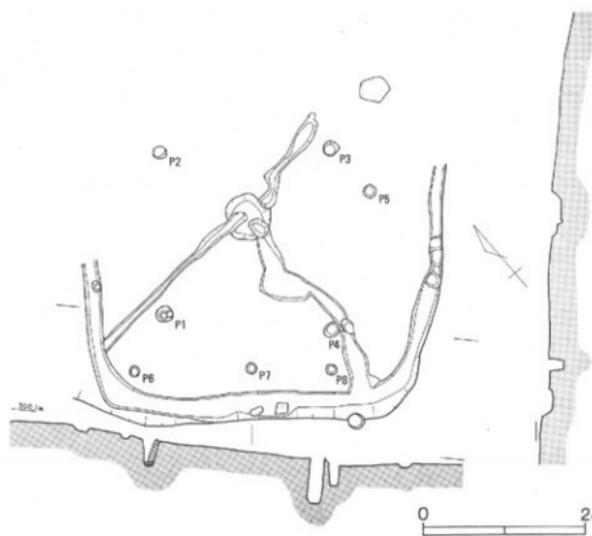
なお、住居跡東側に $30 \times 40cm$ 厚さ $10m$ の自然石による石皿様石器が据え置かれていた。

(内田律雄)

遺物 (第9~12図)
遺構に伴う遺物 (第9図1~19)

床面直上出土のものが多く、中央ピットから出土するものもある。

塊Ca (同7, 10, 11) 全て床面直上より出土。複合口縁になり、口縁はわずかに開くが直立気味である。口縁内面に段が付き口唇部は丸く終る。7は口縁外面にクシ状工

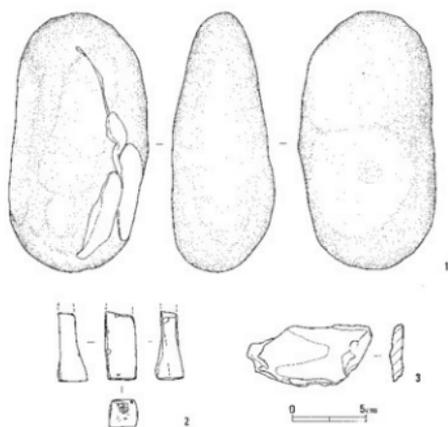


第30図 SI13 実測図

具による11本の平行沈線を描す。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へう割り調整を施す。

底部 (同16) 明確な平底で胴部は開き気味に延びる。外面ハケ目、内面へう割り調整を施す。

器台形土器 (同8・12~14) 受部、脚部とも複合口縁形をしたいわゆる鼓形器台で、全形をうかがえるのは8のみで他は破片である。8・12は大形品で、口縁部、脚部ともラッパ状に大きく開き内面端部近くにへう割りによって稜ができる。胴部は短いが内面に狭い平坦面を持つ。13は内面に段をつ



第31図 S I 13 遺物実測図(1)

様々だが、坏部内外面と脚部外面はハケ目の後へラ磨き、脚部内面は上部はへら削り、下部はへら磨きを施す。

高坏C₂(同5、9) 口縁部が大きく開く浅い小皿形のもので、口唇部は丸く終る。

瓶形七器(同19) 円筒形の瓶で、口縁部はラップ状に開き、基部は欠損するが段をつけてすばむ。口唇部は平坦になり明瞭な面を持つ。上部に縦に2つ、下部に横に2つ、計4つの環状把手をつける。外面ハケ目、内面へら削り調整を施す。外面の一部にハケ目の上に、サラ状の擦痕がある。

低脚(同15、18) ラップ状に開く脚で15は器高が非常に低い。いずれも坏部は欠損する15は内外面ヨコナデ調整、18は手捏ねによって成形する。

手捏ね土器(同17) 底部は丸底で体部が内湾する碗形で、やや大型品である。全面に指頭痕が残り、いびつである。焼成も甘く灰色を呈しもろい。

貼床下の遺物(同21)

甕A「く」の字口縁で、口唇部が広い面となり2条の凹線が入る。内外面ヨコナデ調整を施す。覆土内の遺物(第8図20、22~24、26、第9図20、22~25、第10図)

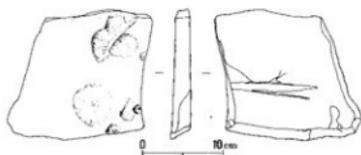
甕A(例1、2)「く」の字口縁で口唇部が広い面を持ち2条の凹線が入る。2は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へら削り調整を施す。1は口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面ハケ目、胴部内面ハケ目、へら削り調整を施す。

甕C₃ 複合口縁で口縁は長く外反しいずれも内面に明瞭な段がつく。26は口縁部が大きく外反するが20・22・23は直立気味になる。口唇部は全て丸く終る。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へら削り調整を施す。

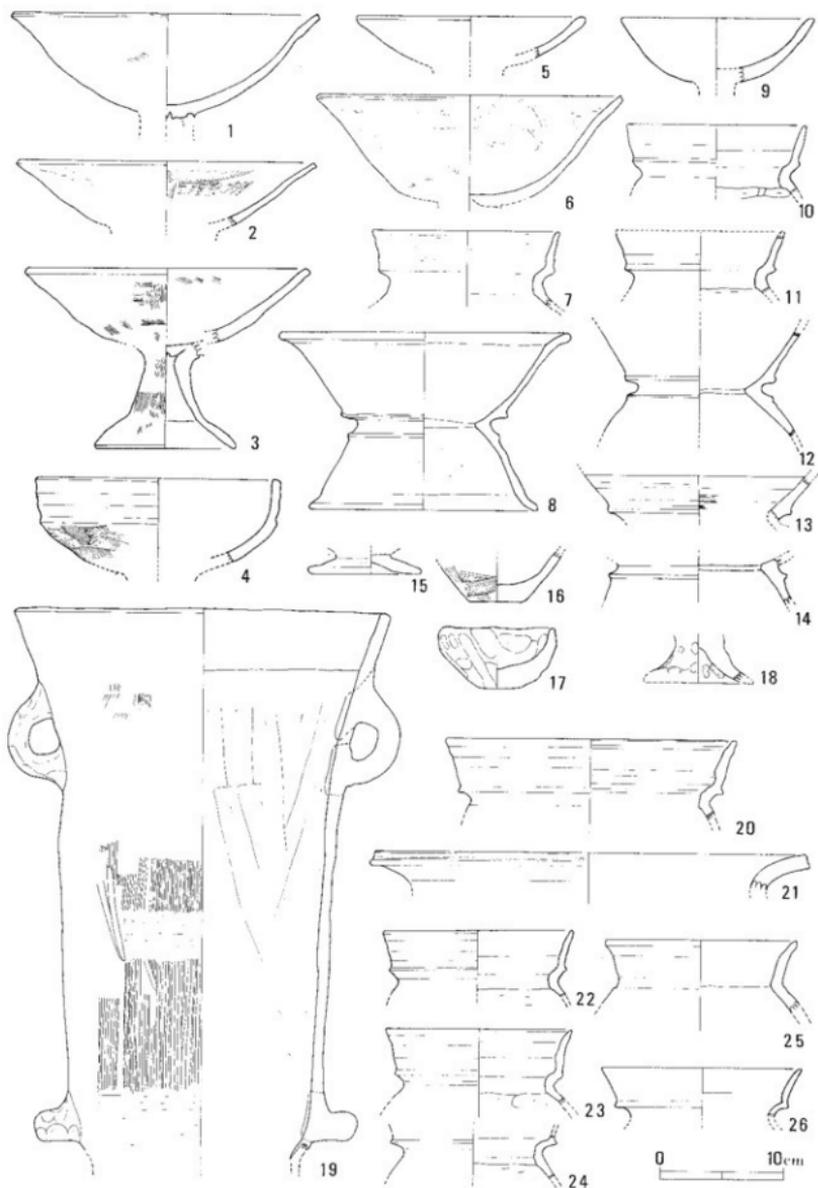
けず直線的に大きく開き、受部と思われる。14はあまり開かず脚部と思われる。8・12と同様胴部内面に狭い平坦面を持つ。受部、脚部ともに内面はへら削り、内面口縁部から外面をヨコナデ調整を施す。13・14は焼成が非常に良好で堅くしまっている。

高坏B(同4) 坏部下半が丸くなり中程で縁がつき口縁部はほぼ直立する。口唇部は平坦になる。口縁部と内面はヨコナデ、下半部外面はハケ目で調整を施す。

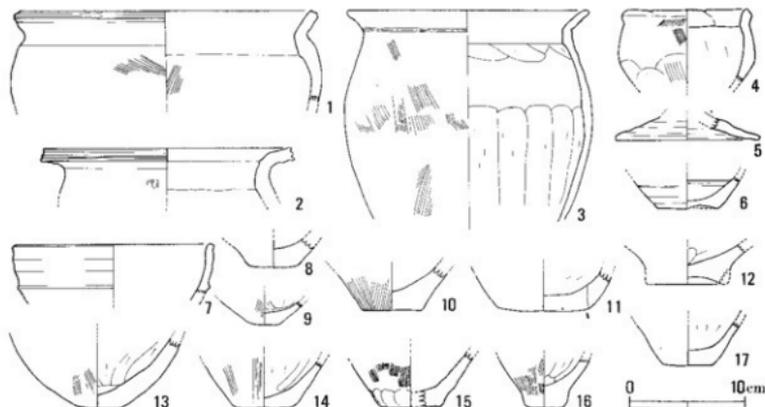
高坏C₁(同1~3、5、6) 坏部は口縁部が大きく開く浅い鉢形をし、口唇部は平坦になり明瞭な面を持つ。脚部がわかるのは3のみであるが、下部で急に大きくラップ状に開き、端部は口唇部と同様平坦で明瞭な面を持つ。調整は精粗



第32図 S I 13 遺物実測図(2)



第33图 S I 13 遗物尖陶图 (3)



第34図 S I 13 遺物 実測図 (4)

甕D₂(同25)「く」の口縁で、口縁部がやや長く外反する。口唇部は平坦になり面を持つが不明瞭である。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へう削り調整を施す。

甕D₃(第10図3)「く」の口縁で、口縁部は面を持たず丸く終る。胴部はあまり強らず最大径は中程にある。頸部に一条のへう描き沈線を描文する。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へう削り(上半斜方向、下半縦方向)調整を施す。

底部(同6・8~17)しっかりした平底のもの(6・8・10~12・14・15・17)、平底だが底は小さく丸味をもつもの(9・13)、小さな底部でバタ高台状に厚くなるもの(16)がある。ほとんど胴部が開いて延びるが16は胴部の立ち上がり之急である。外面ハケ目、内面へう削り調整を施す。底部外面はナデによる調整が多いようである。12は底部と胴部の境が剥離しており、底部は粘土を貼り付けて成形していると思われる。

高坏B(同17)坏部中程で液が付き、口縁部はほぼ直立する。口唇部は平坦になり、明瞭に面を持つ。調整は内外面ヨコナデ調整を施す。

小形甕(同4)短頸で胴部がわずかに張る。手捏ねによって成形し外面ハケ目、内面へう削り調整を施す。口縁部に粘土の継ぎ目が残る。

低部(同15)ラップ状に大きく開き、器高は低い。内外面ヨコナデ調整を施す。

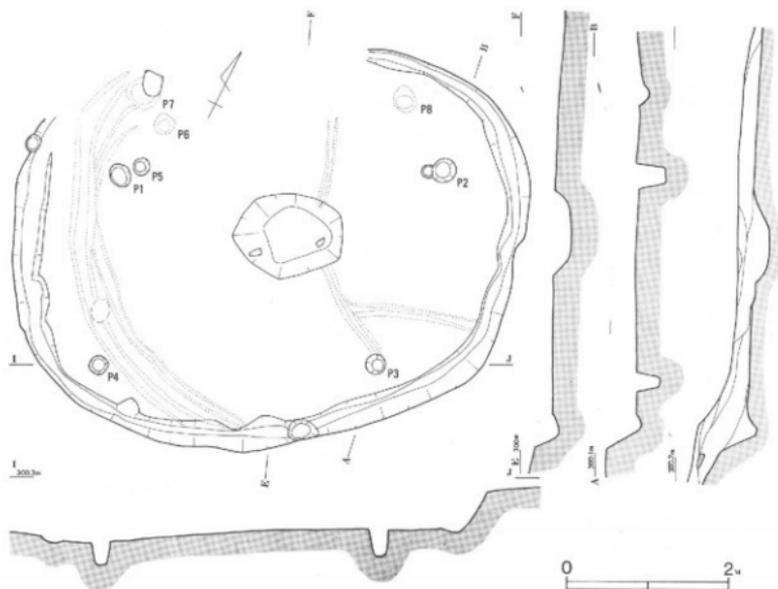
石器類(第31, 32図)、砥石(第31図2, 第32図1)は、直方体に加工した小形のもの(第31図2)と扁平な自然石を利用した板状の大形のもの(第32図1)とがある。後者は全面、前者は全側面を使用している。第32図1は中央に溝状の使用痕が一条ある。

磨石(第31図1)はやや大形の河原石を使用したもので、全面に磨痕がみられ、ところどころ平坦になる。

石包丁木製品(第31図3)は扁平な剥片の周辺部を2次的に加工した段階のもので、研磨痕、穿孔の痕跡は認められない。(柳浦俊一)

S I 14 (第14号住居跡, 第35図 図版17)

第13号住居跡の床下に検出された住居跡で7.1m×4.9mの隅丸の長方形の平面プランを呈す。住居跡の北側は傾面のため壁及び側溝が失われている。側溝は残存部については全体に巡り、その幅約



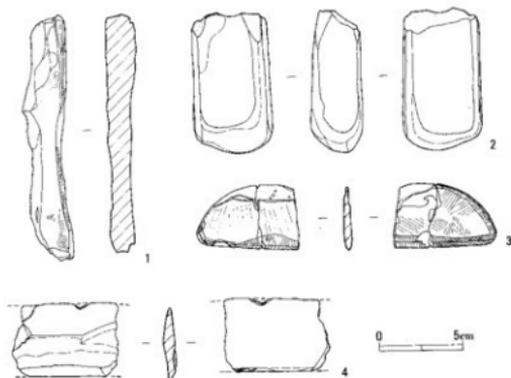
第35図 SI14 実測図

16cm、深さ12cmである。壁高は南側で44cmを測る。柱穴と考えられるピットはP₁からP₅である。中央ピットは1m1.4m深さ0.2mの不整形なものである。床面積は22.4cm²で貼床がみられる。床はほぼ水平である。貼床を除去したところ、中央ピットにむかう二本の溝と住居跡の西に二本の溝、また、柱穴と考えられるピットP₆からP₈を検出した。中央ピットにむかう溝の一つは北側から、長さ1.1m、幅12cm、深さ5cmで、他の一つは南東からのもので、P₆と側溝からはじまるものである。その幅は約14cm、深さ5cmである。住居跡の西側に検出された二本の溝は側溝と考えられる。内側のものより、それぞれ幅12cm、深さ10cm、幅22cm、深さ10cmを測る。すなわち、二度にわたる建てかえが行なわれたと考えられる。従って床下より検出された、P₆、P₇、P₈及び中央ピットにむかう溝等は、第1次住居あるいは第2次住居にともなうものと考えられる。なお、住居跡西部に自然石を利用した扁平な石皿様石器が据え置かれていた。(内田律雄)

遺物(第13・14図) 遺構に伴う遺物(同1, 2, 3) 柱穴から出土したもの(1)、床面直上から出土したもの(2, 3)がある。

壺A(同1) 柱穴内から出土。頸部はすぼみ気味で、口縁部はカーブを描いて外反する。口縁端部は広い面を持ち2条の凹線を入れる。内面はヨコナデ調整を施す。

小型壺(2) 床面直上から出土。口縁部は「く」の字に外反し短く延び、口唇部は丸く終る。胴部は球形をなし、底部はやや凹み底風になる。風化が著しい。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目、胴部内面はヘラ削り(上半は横方向、下半は縦方向)調整を施す。



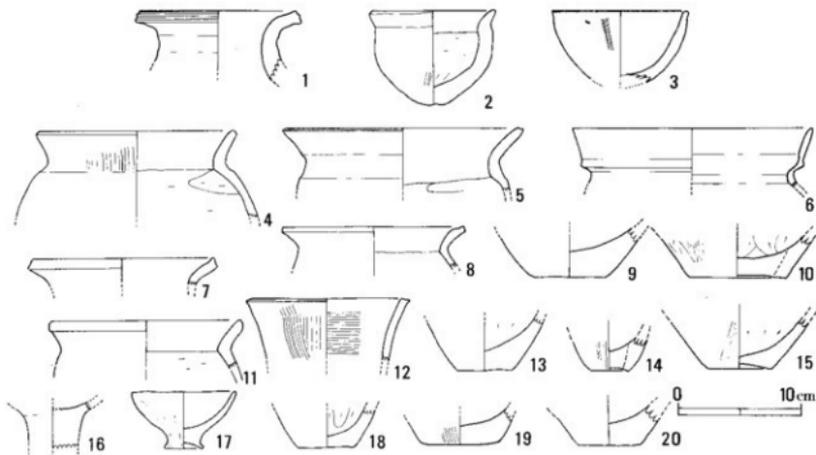
第36図 S I 14 遺物 実測図 (1)

碗(3) 底部は欠損するが、体部は内湾しながら延び、そのまま口縁部に至る。口唇部は平坦な面を持つ。外面にわずかにハケ目が残し、ハケ目調整の後にさらに何らかの調整を加えたものと思われる。内面は縦方向にヘラ磨きを施す。

覆土内の遺物

甕B₁(7) 口縁端部が広い面を持ち、くり上げ状の口縁をなす。口縁端部は複合口縁ほど発達していない。内外面ともヨコナデ調整を施す。

甕C_a(同6) 複合口縁になるもので内面に明瞭な段がつき、口唇部は丸



第37図 S I 14 遺物 実測図

く終る。風化著しく口縁部の調整は不明だが、胴部内面はヘラ削り調整を施す。

甕D₁(8) 「く」の字口縁で、口唇部が明瞭に面を持ち平坦である。8は口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラ削り調整を施す。

甕D₂(4・5・11) 「く」の字口縁で、やや長く延びる。口唇部は丸味を帯び、明瞭には面を持たない。5は口唇部が凹線状にやや凹む。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラ削り調整を施す。

壺(12) わずかに外反気味に延びる。口縁部片のみ残存する。口唇部はやや凹み明瞭に面を持つ。内面は横方向に、外面は縦方向にハケ目調整を施す。

底部(9, 10, 13~15, 18, 20) 胴部が大きく開いて延びるもの(9・10・15・19・20)と胴部の立ち上がり急なもの(13・14・18)とに分けられ、凹み底になるもの(10・14・15)と平坦なもの

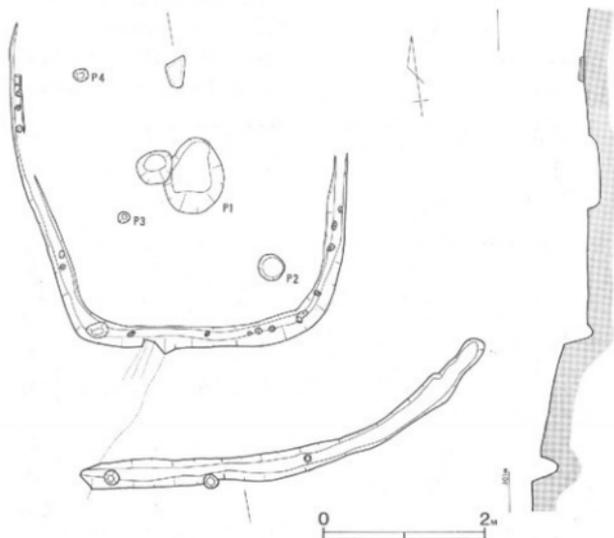
がある。胴部はほとんどが外面ハケ目、内面へう削り調整を施す。

ミニチュア土器 (17) 体部が内湾する杯部に指頭押圧による輪状の低脚をつける。一個の粘土塊から手捏ねによって成形、調整をする。口縁部内面付近に、指頭による指圧痕がみられる。

高杯 (16) 筒部の残片で、ほぼ円筒形になると思われる。調整は風化が著しく不明。

石器類 (第14図)

石包丁(3)、石包丁状未製品(4)、砥石(1、2)が出土している。石包丁(3)は欠損するが半円形で、両面ともていねいに研磨し滑らかである。製品が壊れたものであろうか。石包丁状未製品(4)は、両端が欠損する。板状剥片の片面に粗い研磨痕(特に刃部と思われる箇所)が認められる。石包丁か石剣の未製品であろうか。砥石は棒状の細長いもの(1)と長方形に加工したもの(2)とがある。両者ともよく使用されており、ほとんどの面が滑らかである。1は使用面が波状になるほど使い込んでいる。(柳浦俊一)



第38図 S I 16 実測図

側溝は幅16cm、深さ6cmであるが、住居跡西側で一部切れている。また、側溝の中に16個の小ピットが検出された。柱穴と考えられるピットはP₁とP₂で、この外に小ピットP₃、P₄が床面にある。中央ピットは0.9m×0.8m、深さ14mの不整形なものである。(内田律雄)

(遺物第15図)

壺D₂(1)床面直上より出土。「く」の字口縁で口唇部がわずかに平坦になり



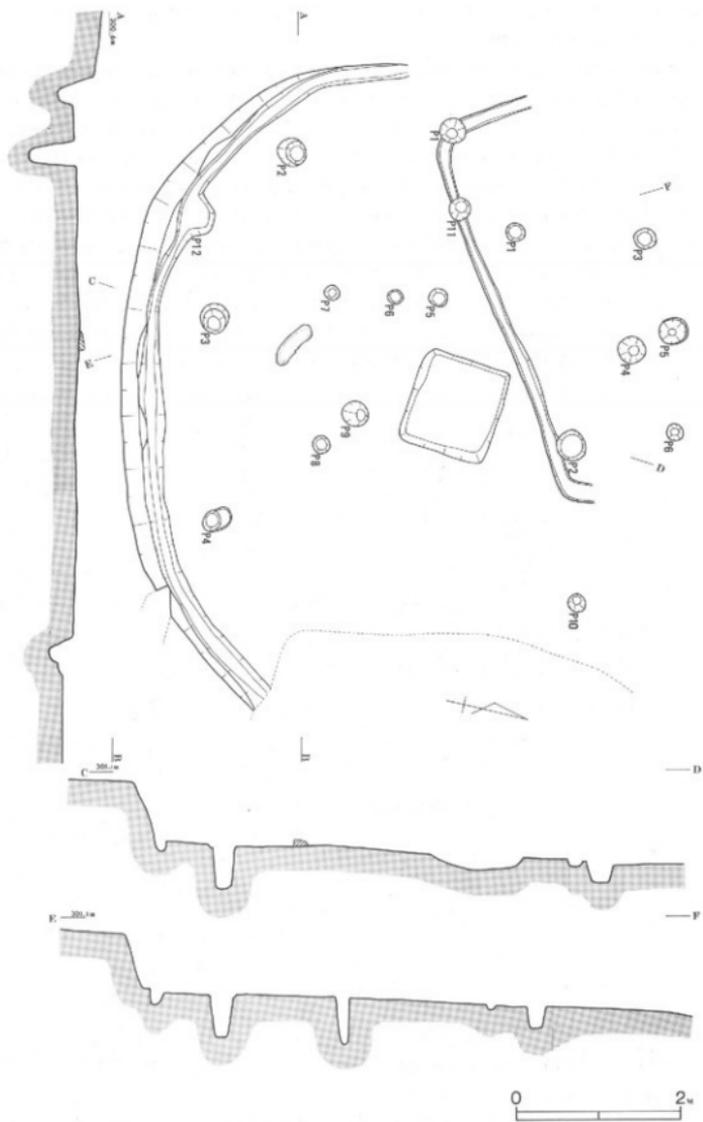
第40図 S I 16 遺物実測図(2)

S I 15 (第15号住居跡、第41図、図版18)

第17号住居跡の床面に側溝とピットが検出された。側溝は幅約14cm、深さ8cmを測り、一辺が約5mの方形の平面プランと考えられる。(内田律雄)

S I 16 (第16号住居跡、第38図 図版18)

第17号住居跡の東に発見された住居跡で、第17号住居跡を一部切りこんでいる。北側は壁と側溝を失っている。残存部から推定すると4.1m×4.1mのほぼ、方形の平面プランであったと考えられる。

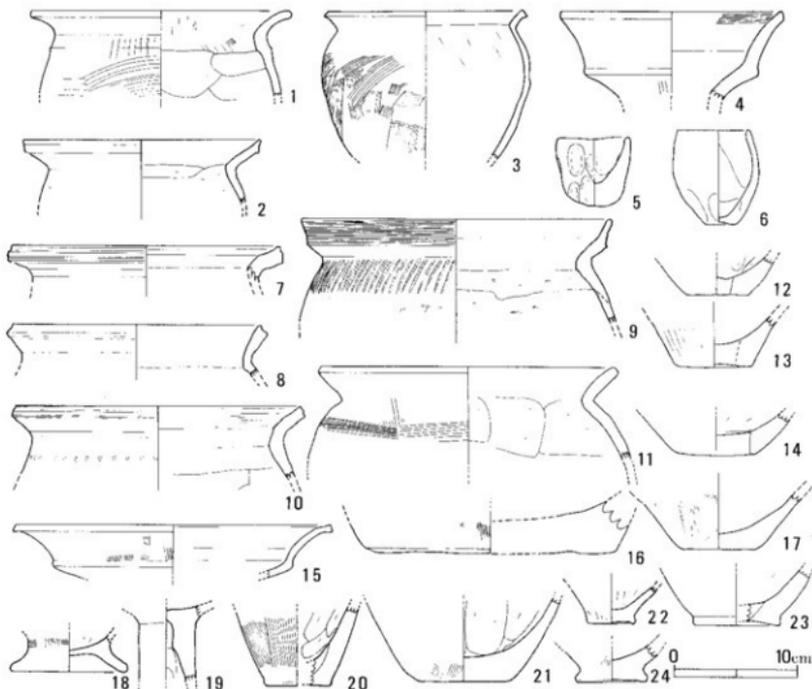


第41图 S I 15·17 实测图

面をもつが不明瞭である。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へう割り調整を施す。(柳浦俊一)

S I 17 (第17号住居跡, 第42図 図版19)

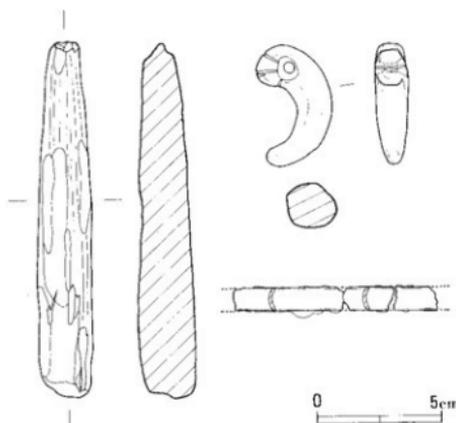
調査区域の西端に発見された住居跡で、この遺跡の中では最大の規模を誇る。住居跡の北側は傾斜面のため壁及び側溝を消失している。長辺はほぼ8mぐらいと考えられる。住居跡の北と西は第15号住居跡及び自然傾斜面、東は第16号住居跡によって消失している。側溝は全体にみられ、幅30cm、深さ12cmである。壁高は南側で70cmと高く、75°の傾きをもつ。ピットはP₁からP₁₂まで検出した。このうち、明らかに柱穴と考えられるのはP₁、P₂、P₃、P₄でそれぞれ、2.4m(8尺)の等間隔で存在し側溝の内側約50cmのところめぐらされている。P₅からP₁₁も補助的な柱穴の可能性があるが、不規則である。中央ピットは1m×0.9m、深さ16mの浅い方形のもので、この遺跡の他の住居跡のそれが不整形であるのに比して特殊である。P₁₂は、住居跡の南に側溝に接して径56cm、深さ16cmで、中に甕形土器が存在していた(第42図)。床面は水平で、現存するその面積は37m²である。また、全体に20cmから30cmの粘床を施し、よく踏み固められている。中央ピットの南側約1.6mの位置に、長さ60cm、幅20cm、厚さ15cmの花崗岩製の自然石が置かれていた。(内田律雄)



第42図 S I 17 遺物実測図(1)

遺物(第16, 17図) 遺構に伴う土器(第16図1から6) S I 17に伴うと考えられる遺物は、側溝内、壁際、床面直上より出土している。

甕B(同2)壁際床面より出土。口唇部がくり上げ状の口縁で、口縁端部の幅が広く内面はわずか



第43図 S I 17遺物実測図(2)

緑状の受部で、筒部、脚部は欠損する。内面に段が付き口縁部は外反し、口唇部はやや角張りわずかに平頂面を持つ。内外面とも風化が著しく、施文、調整は不明瞭だが、口縁部内面、筒部外面にわずかにハケ目調整痕を残す。

ミニチュア土器(同5・6)6は個溝内、5は埋蔵床面より出土。共にコップ形をなす。6はやや大型で、底部はわずかに上底になり、体部は内湾しそのまま口縁部に至る。5は小型で底部は丸底で厚く、体部は閉き気味である。6は風化するが、共に成形は手捏ねによっており、内外面指痕度が明瞭に残る。6は底部ナデ、5は底縁にへら先によるキズがある。

覆土中の土器(同7から24)

器A(同7、10)口唇部は広い面を持ち、2条の凹線を入れる。10は肩部に刺突による施文がある。10は口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ目、胴部内面へら削り調整、7は口縁部内外面ヨコナデ調整を施す。

器B(同8)口縁部は広い面を持ち、くり上げ状の口縁である。口縁部はあまり発達しない。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へら削り調整を施す。

器C(同9)複合口縁になり、口縁部は短く外反する。内面はわずかに段が付き屈曲する。肩部は張り、最大径は上部にあると思われる。口縁部外面にはケン状工具による9条の平行沈線、肩部にはケン状工具による「ノ」の字の斜行刺突文を施文する。口縁部はヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面はへら削り調整を施す。胴部内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。

器D₁(同11)「く」の字口縁で、口唇部は平頂面を持つが、丸味を帯びる。肩部はかなり張り最大径は上部にあると思われる。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目胴部内面はへら削り調整を施す。

底部(同12から14、16、17、20から24)底部は全て平底で大きさはまちまちであるが、底部と胴部の境を押し調整するための凹み底風のベタ高台状をするもの(22から24)と、押し調整をせず、底部から単純に胴部がたちあがるもの(2から14、16、17、20、21)とがある。どちらも形態はバラエティに富み、24などは脚を認識しているように思える。胴部が大きく開くものがほとんどであるが、20

に屈曲する。胴部はわずかに張る。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へら削り調整を施す。

器D₂(同3)周溝内より出土。口縁部は「く」の字口縁になり、口唇部は平頂面を持ち、軸が広く明瞭な稜がつく。やや肩が張り最大径は上部にある。口縁部内外面ヨコナデ胴部外面ハケ目、胴部内面斜方向にへら削り調整を施す。

器D₃(同1)床面直上より出土。口縁部は「く」の字口縁になり外反する。口頸部は丸味を帯び明瞭な面を持たない。肩部の張りはほとんどなく、最大径は胴部中程にあると思われる。口縁部内外面ヨコナデ、頸部内面、胴部外面ハケ目、胴部内面へら削り調整を施す。

器台器(同4)床面直上より出土。複合口

はたちあがりか急である。胴部は大部分外面ハケ目、内面へう削り調整を施すと思われる。

脚(同18) 輪状の高い高台状をなす。脚はヨコナデ、胴部外面はハケ目、胴部内面へう削り調整を施す。

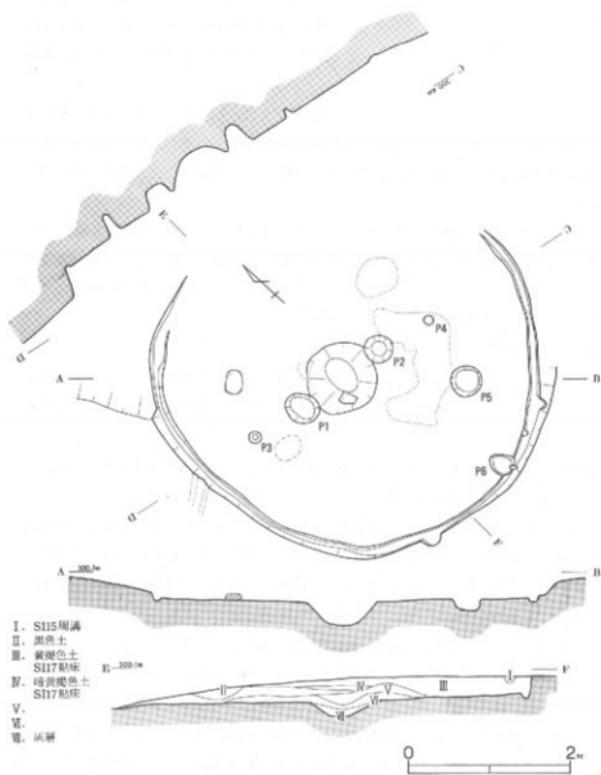
高環(同15, 19) 環部と筒部の破片が各1片出土している。環部(15)は中程で破をつけ、上部は大きく外反する。口唇部は平坦になり明瞭な面を持つ。外面はハケ目調整を施す。筒部(19)は、ほぼ円筒状になり、内面にしぼり目が残る。内面へう削り調整を施す。

石器・曲玉・(第17図1, 2), 曲玉(2)と棒状石製品(1)とがあり、棒状石製品は中央ピットから出土している。2は全面を非常にいいに磨き、三条の溝を入れる丁字頭の曲玉である。孔は両側から穿つ。1は用途不明の石製品である。基部と思われる部分はやや細く、先端は次第に太くなり丸く終わる。基部はわずかに欠損する。5面の面取りを行い、断面は五角形をする。

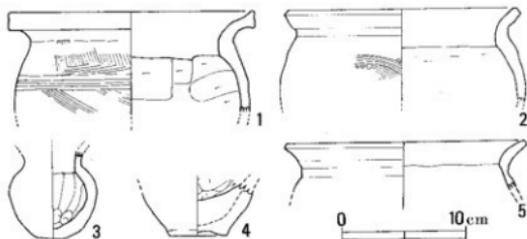
全体に調整は粗く未製品と思われる。鉄器(同3) 断面図が凹レンズ状になる細長いもので、欠損部分が多く全形は不明であるが、鉤と思われる。(柳浦俊一)

SI 18 (第18号住居跡, 第44図, 図版18)

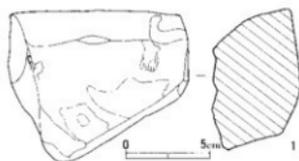
第17号住居跡の床下に検出された住居跡である。住居跡の北側の壁と側溝を一部失っているが、平面プランは円形を呈す。側溝は幅12cm、深さ5cmで全体に巡っている。壁高は32cmで、75°の傾きがある。柱穴と考えられるピットはP₁からP₄で、中央ピットの両サイドにあるP₁とP₂が支柱であり、さらにその外側にある小ピットP₃とP₄は規模の小さい補助的なものであろう。P₅とP₆は他の目的のピットと考えられる。特にP₆は側溝につながっていて、中に甕形土器の口縁部片が存在していた。(第45図) 第17号住居跡にも類似のピットが見られる。中央ピットは0.9×0.9m、深さ28cmのほぼ円形である。また、中央ピットの縁とP₂付近の床面に三ヶ所の焼土面が認められた。さらに、中央ピットの北西0.9mの



第44図 SI 18 実測図



第45図 S I 18 遺物実測図(1)



第46図 S I 18 遺物実測図(2)

小壺(同3)口縁部は短く外反し、胴部はほぼ球形である。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面は指で撫であげて調整する。

砥石(1)自然石を利用したもので、研磨面が4面あり、截頭四角錐形となる。(横浦俊一)

S I 19 (第19号住居跡, 第48図, 図版21)

発掘調査区域内では最北の傾斜面に位置する住居跡である。住居跡の北側は傾斜面のため削失しているが、一辺4.4mの隅丸形の平面プランである。側溝は幅28cm、深さ10cmで残存部においては全体に巡っている。柱穴と考えられるピットは、P₁、P₂、P₃、P₄で、それぞれの間隔は2.1m(7尺)の正方形となるP₅は、補助柱と考えられる。中央ピットは0.9×0.7m、深さ18cmの不整形なものである。壁高は住居跡の南側で、56cm、55°の傾きをもつ。住居跡の南側に約1m離れ、当住居跡を囲むように弧を描きながら幅30cm、深さ16cmの溝状遺構が存在する。(内田律雄)

遺物(第49.50.51図) 遺構に伴う遺物(同1~6)床面直上より出土している。

壺D₁(1~4)「く」の字口縁で口縁部に明瞭な面を持ち、わずかに凹線味に凹む。肩が張り最大径は、胴部上部にあると思われる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へラ削り調整を施す。1、4の胴部外面はハケ目がわずかに残る。

器台(同6)複合口縁状の受部で筒部、胴部は欠損する。内面は段がつき、口縁部は外反し長く、立ち上がりは急で口唇部はやや角張る。口縁部外面には、クシ状工具による22条の平行沈線を施す。風化が著しいため観察は困難だが、ヨコナデ調整によると思われる。

床面には自然を利用した石皿様石器が存在している。

(内田律雄)

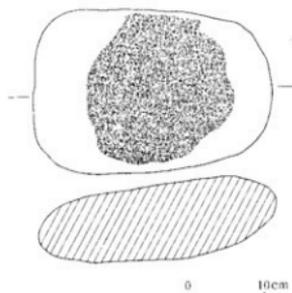
遺物(第18図)壺B(同1)くり上げ状の口縁で、口縁端部は広い面を持つ。肩部はわずかに張り、最大径は上部にあると思われる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へラ削り調整を施す。

壺D₁(同2)「く」の字口縁で、

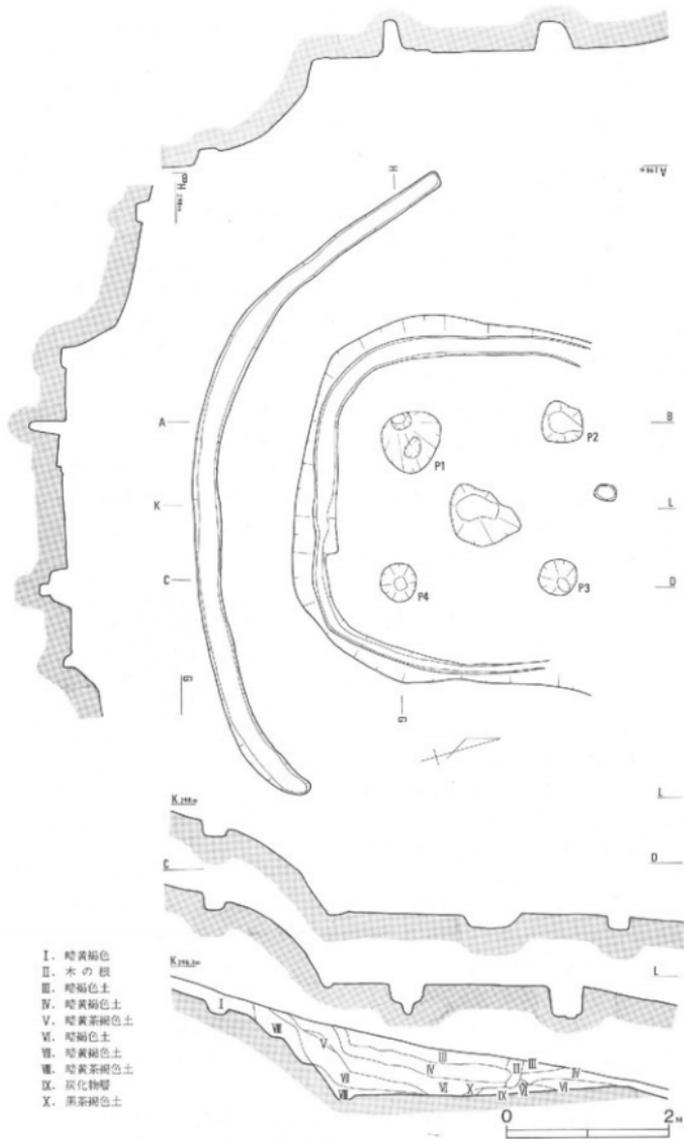
口唇部は平坦になり明瞭な面を持つ。胴部はわずかに張り、最大径は上部にあると思われる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へラ削り調整を施す。

壺D₂(同5)「く」の字口縁で、口唇部は面を持つが不明瞭である。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へラ削り調整を施す。

底部(同4)やや凹み底のしっかりした底部である。胴部は内湾気味に延びるが、立ち上がりは急である。内面はへラ削り調整を施す。



第47図 石皿様石器

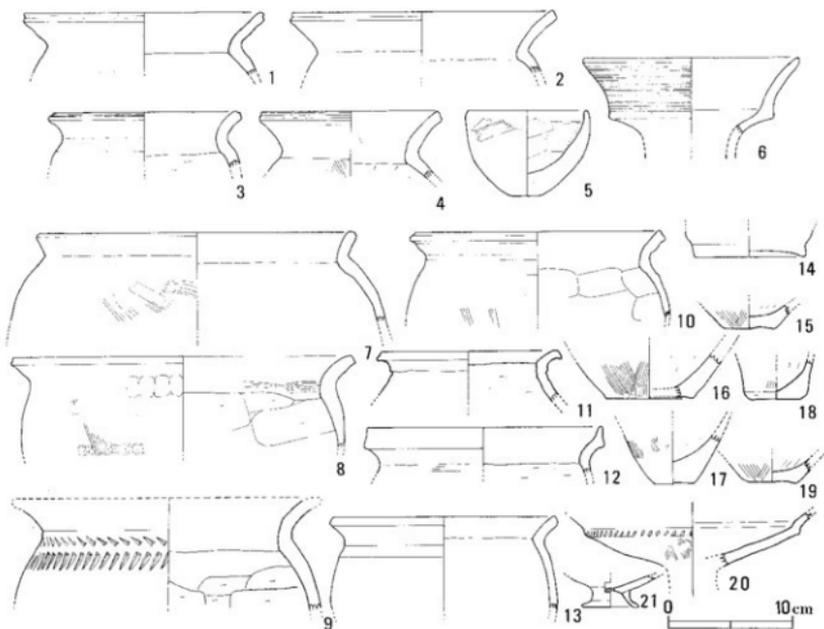


第48図 S I 実測図

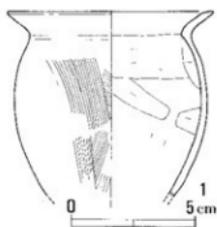
椀(同5)小さな平底から体部は内湾して縁にそのまま口縁に至る。口唇部は丸く終わる。調整は、内外面ハケ目調整である。
覆土内の遺物(同7~21) 甕 C₁ (12)

複合口縁。口縁部は短くわずかに内傾し、内面の段は不明瞭で、口唇部は丸く終わる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラ削り調整を施す。

甕D₁(同8, 10, 11)「く」の字口縁で口唇部は平坦になり、明瞭に面を持つ。11は胴が張り頸部がしまり、壺的な形態である。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラ削り調整を施す。8, 10は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面ヘラ削り調整を施す。8は口



第49図 S I 19 遺物実測図(1)

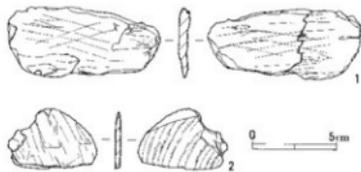


第50図 S I 19 遺物実測図(2)

縁部内面にハケ目がわずかに残る

壘D₂(同7, 9, 13)「く」の字口縁になり、口唇部は面を持つが丸縁を持ち不明瞭である。7は肩部がかなり張る。9は肩部にへら状工具による羽状の刺突文を施す。風化が著しいが、口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へら削り調整を施す。

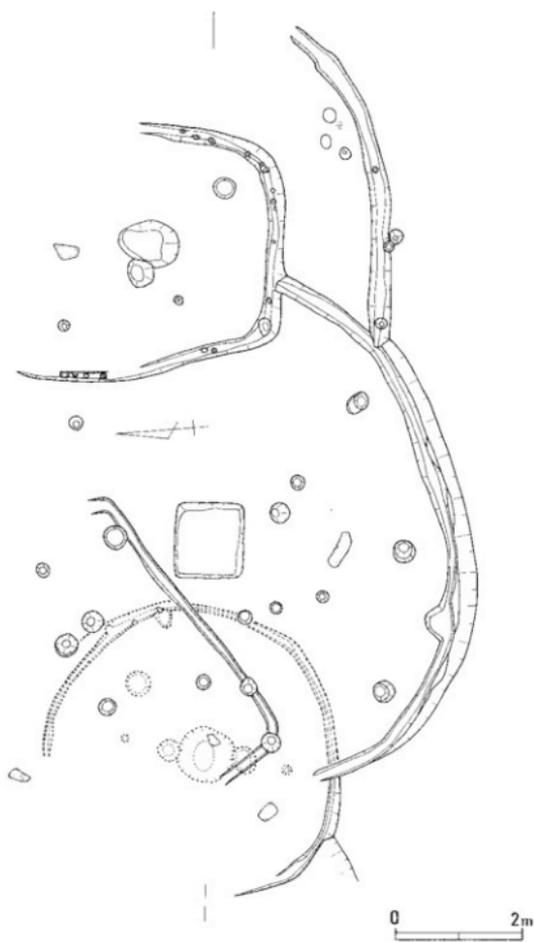
底部(同14~19)全て明瞭な平底をなすもので、胴部が大きく開くもの(14, 16, 19)、胴部の立ち上がりが急なもの(17)、胴部の立ち上がりがほぼ垂直に延びるもの(18)がある。10, 14, 16, 19は、胴部及び底部外面ハケ目、内面へら削り調整、18は底部をへら削り調整を施す。ほとんど壘又は壘の底部と思われるが、18は特異な形態をなし、壘、壺以外の器形ではなからうか。



第51図 S I 19 遺物実測図(3)

高坏(同20)坏部下半部のみ残存し、他は欠損する。中程で幅出し縁をつけ、上半は大きく外反すると思われる。縁の部分にクシ状工具による刺突文を施す。外面はハケ目の後ヨコナデ、内面はヨコナデ調整を施す。

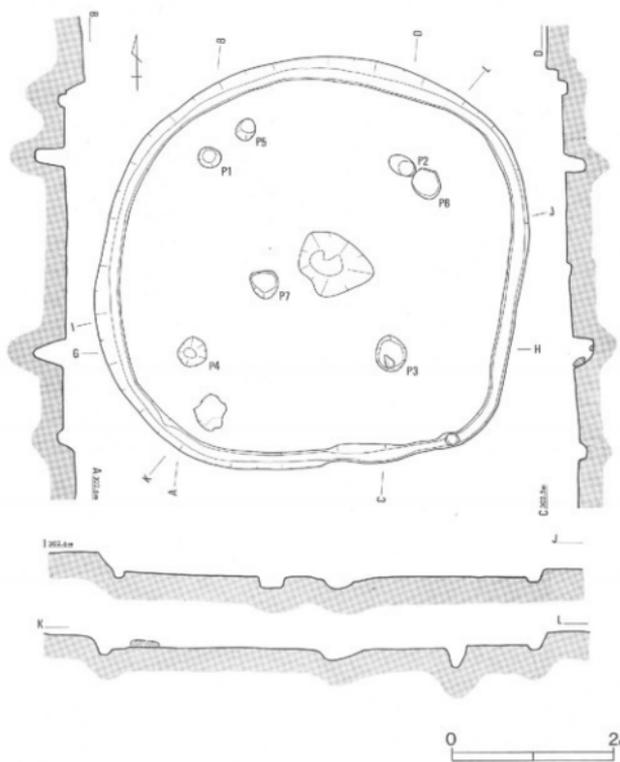
低脚(同21)やや高い輪状の脚で、口縁部は大きく開くと思われる。底部に小孔を穿つ。風化が著しく、調整は不明である。



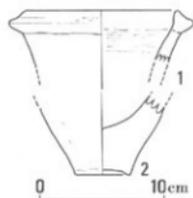
第 52 図 S I 15・16・17・18 関係図

石器類 (第21図)

1, 2とも石包丁未製品で, 周辺部にわずかに二次的な加工痕がある。2は欠損するが半月形をなし, 片面に研磨痕がある。背部に特に研磨痕が顕著である。1は短冊形に近い。両面とも粗く研磨しており, 研磨痕が交錯する。(柳浦俊一)



第53図 S I 20 実測図



第54図 S I 20 遺物実測図

S I 21 (第21号住居跡, 第55図 図版22)

第II調査区の平坦面のはほぼ中央に検出した住居跡。大きく胴の張った隅丸方形と言ふより、むしろ円形に近い平面プランを呈す。側溝は完周し、幅約15cm、深さ約5cmである。柱穴と考えられるピットはP₁、P₂、P₃、P₄、P₅で、このうちP₁からP₄の間隔はそれぞれ2.55m(8.5尺)で正方形を

S I 20 (第20号住居跡, 第53図, 図版21)

第II調査区平坦面の東よりに位置している住居跡である。平面プランは西側が円形, 東側が隅丸方形とも言うべき不整形である。側溝は幅22cm、深さ8cmで完周する。柱穴と考えられるピットはP₁、P₂、P₃、P₄でそれぞれの間隔は2.4cm(8尺)の正方形である。P₅、P₆は補助柱と考えられる。P₇は中央ピット付近にあり、深さ14cmと浅く、柱穴以外の機能と考えるべきであろう。中央ピットは、0.9m×0.8cm、深さ12cmの不整形である。壁高は西側が最も高く24cmを測り50°の傾きをもつ。床面はほぼ水平で、その面積は18.7㎡である。貼床が全面に施されているが、中

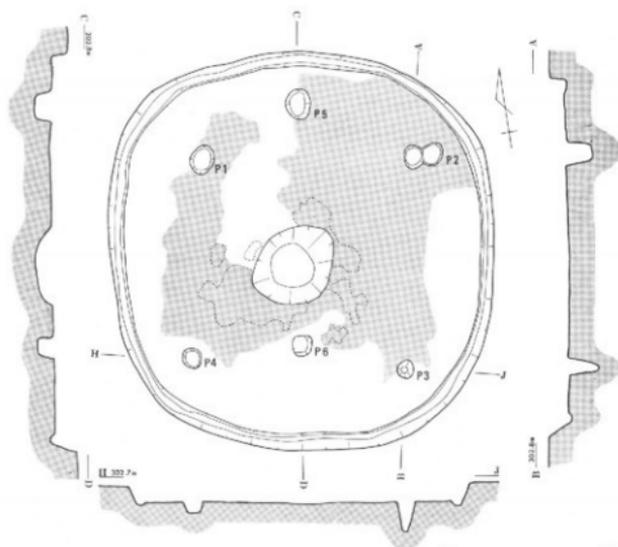
央ピットの周辺に一部地山がのぞいているところもあった。住居跡の西南隅に自然石を利用した石皿縁石器が存在する。(内田律雄)

遺物(第22図)とともに覆土内から出土しており、S I 20に伴うとは言えない。

壺C(1)直口する口縁部の上端近くに凸帯をめぐらし、口縁部は内傾する。端部内外面ヨコナデ、内面ハケ目調整を施す。

底部(2)凹み底で、胴部のたちあがりは急である。全体に器肉が厚い。胴部外面ハケ目、底部ナデ、内面へら割り調整を施す。

(柳浦俊一)



第55図 S I 21 実測図
のと考えられる。

壁C₁(同3) 口縁部は複合口縁になり、直立気味に短かく外反する。内面の段は不明瞭で緩やかに屈曲し、口唇部は単純に丸く終る。口縁部外縁には、クシ状工具による8条の平行線を施す。

壁D₁(同2) 口縁部は「く」の字口縁になり、口唇部は明瞭に平坦な面を持つ。肩部はかなり張り、最大径は胴部上半にあると思われる。肩部にクシ状工具による「く」の字の施文を施す。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面はへう削調整を施す。

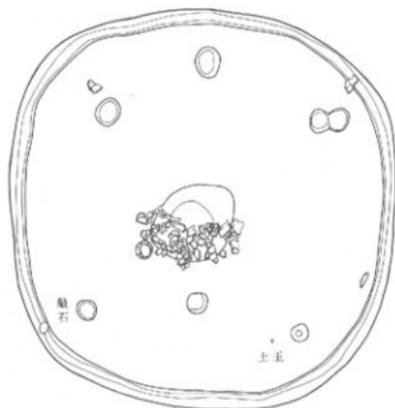
壁D₂(同1) 口縁部は「く」の字に外反するが、口唇部は2ほど明瞭に面を持たず丸味を帯びる。胴部はかなり張り。風化が著しいが、口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面はへう削調整を施す。

底部(同4) 明瞭な平底。風化が著しく、内外面とも調整は不明瞭である。

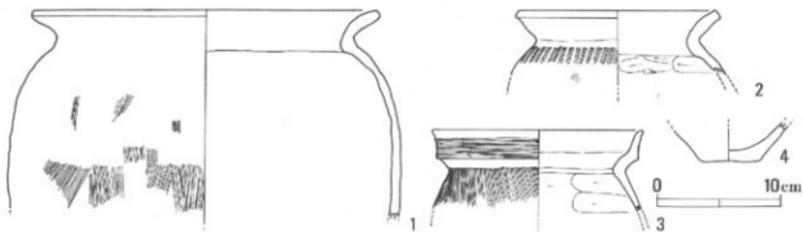
なす。P₅は補助柱と考えられるが、P₆は深さのない浅いもので別の機能が考えられる。中央ビツは1.1cm×0.9cm、深さ18cmの不整形のものである。壁高は約30cmで85°の傾きをもつ。貼り床がみられ、さらにその上に白色粘土による化粧が住居址の北側の一部を除くほぼ全面にみられた。また、中央ビツの周辺とP₅付近に粘土面が存在した。

(内田律雄)

遺物(第23図) 全て床面上より出土しており、S I 21に確実に伴うも



第56図 S I 21 遺物出土土情況



第57図 S I 21 遺物実測図(1)

土玉(第24図3)径2.7mm,厚2.4mm程のほぼ球形をする小形の土玉である。両面中央に小孔を穿つが、貫通していないと思われる。

石器類(同1, 2)ともに河原石の自然石を利用した磨製と思われる、片手で握るのに適当な大きさである。全面滑らかであるが、端部に使用した痕跡が残る。(柳浦俊一)

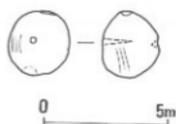
S I 22 (第22号住居跡, 第59図 図版23)

第20号住居跡の北東mの位置に存在する。住居跡の半分以上は消失している。残存部から推定すると方形の平面プランと考えられる壁高は約



第59図 S I 22 実測図

底部と胴部の境は指頭による押圧調整のため底部は高台状になる。胴部外面はハケ目底部面ヨコナデ、内面へう削り調整を施す。底部と胴部の境には指頭圧痕が残る。(柳浦俊一)



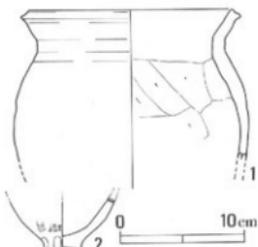
第58図 S I 21 実物実測図(2)

24cm, 65°の傾きである。割溝は検出出来なかった。ピットはP₁, P₂, P₃であるが柱穴と考えられるのはP₁で、P₂, P₃の機能は不明である。床面はほぼ水平で、その面積は14.2m²である。(内田律雄)

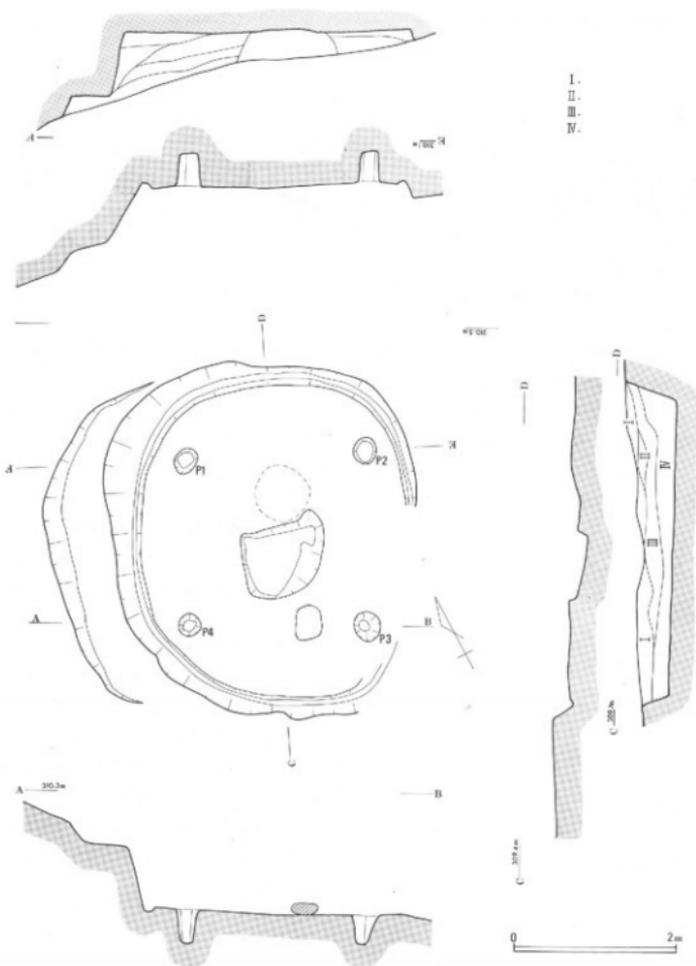
遺物(第25図) 全て覆土中より出土し、S I 22に確実に伴う遺物はない。

甕D₁(同1)「く」の字口縁をなし、口唇部は広い面を持ち、やや凹む。胴部はやや張り気味である。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面は斜め方面にへう削り調整を施す。外面は全面にスス状炭灰物が付着し、調整は不明である。

底部(同2) やや小型の凹み底の底部である。



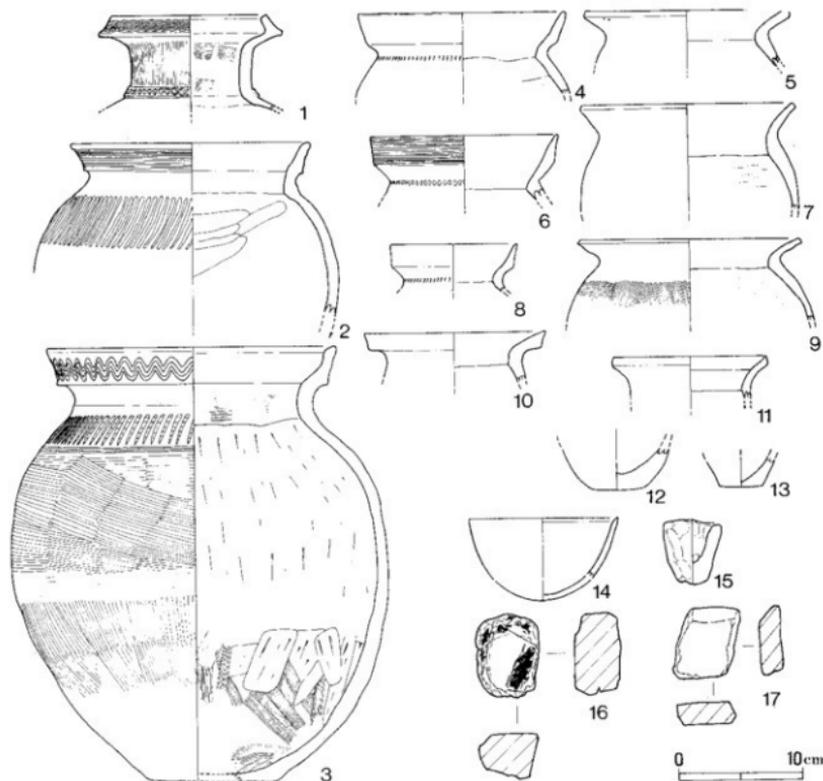
第60図 遺物実測図



第 61 図 S I 23 実測図

S I 23 (第23号住居跡, 第61図 図版23)

第Ⅲ調査区の東端の尾根上に検出された住居跡である。東側の一部は傾斜面のため、壁側溝が消失している。丘陵の高い方である西側はほぼ構築当時の状況に近いものと考えられ、壁高は74cmを測り、75°の傾きをもつ。側溝は消失した東側を除き全体に巡っている。その幅は12cm、深さ6cmである。ピットはP₁、P₂、P₃、P₄で柱穴と考えられ、柱痕を確認した。(図版24)。またP₁からP₄の間隔



第 62 図 S123 遺物実測図

はそれぞれ $2.1m$ (7尺) で正方形をなす。中央ピットは $1.3m \times 1m$ 、深さ $10cm$ の不整形なものである。床面はほぼ水平で、その面積は $10.3m^2$ である。また中央ピットの南側、 P_1 と P_4 の間に自然石による石皿様石器が据え置かれていた。さらに住居跡西側の外には幅約 $0.5m$ 、長さ $4m$ にわたり平地面が存在する。(内田律雄)

遺物 (第62図) 遺物は主として中央ピットの中とその付近及び住居跡東側壁下に集中して発見された。1は短頸の壺で胴部が胴部は高さ $7cm$ 、径約 $9.6cm$ を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は傘形に開き、外面にクシ状工具による波状文が観察される。口径は約 $12.5cm$ である。頸部の下、内面はヘラ削り。頸部の外面はハケによる縦方向の調整が全体にみられ、内面は横方向の調整が部分的にみられる。頸部と肩部の境に斜格子文を施した突帯が貼り付けられている。2~11は甕形土器である。いずれも頸部が「く」の字形を呈すが、単純に「く」の字形に折れるもの (5, 7, 9), 複合口縁に近いもの (2, 3, 4, 6, 8), そのどちらでもないもの (10, 11) がある。いずれも胴部内面はヘラ削りがみられる。2, 6は口縁外面に沈線が入るが、2は口唇部を除

き7条の沈線が観察される。6は細く流く口縁全体に施される。3は口縁にヘラによる4条の波状文がみられる。胴部は刺突列点文の入るもの(4, 6, 8), 二枚貝による刺突のもの(3), ヘラ状工具による刺突のもの(2)があり, 頸部が単純に「く」の字形を呈するものには, 外面に文様はない。胴部外面に明瞭に調整痕のあるものは3とぞで, 後者はハケによる縦方向, 前道は胴部下半をハケによる縦方向に, 上半を横あるいは斜めに施してある。また3は胴部内面下半はヘラ削りとハケ調整が交互に行われているのがみられる。3は出土遺物中で最大の甕で口径約23.5cm, 器高は35.5cmを測る。底部は尖われているが, 焼成後



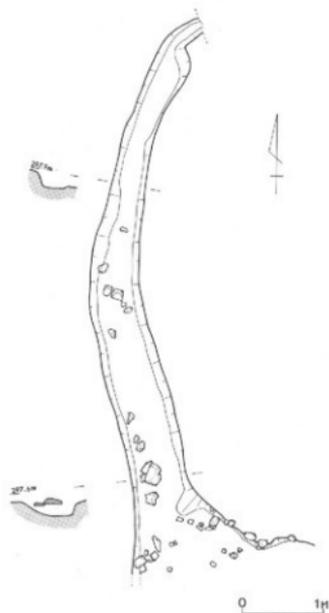
第63図

に故意に穿孔したものであるかどうかは不明である。12, 13は甕形土器の底部である14は口径12cm, 器高68cmの碗形土器で, 口縁部が鋭利に作られている。15は口径4.6cm, 器高5.2cmのコップ形を呈した手捏土器である。以上の他に7×5cmほどの白色の石を検出した。(内田律雄)

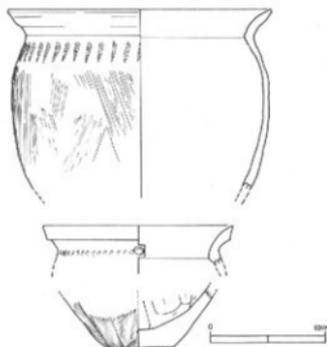
溝状遺構

SD01 発掘区のほぼ中央、第16号住居跡の西に検出された南北に約7mを測る溝状遺構で、溝の北端は第7号住居跡によって切られ消失している。その部分での幅は約20cmである。溝の北端から西へゆるやかに弧を描きながら広がり、南へ延び傾斜面となり自然に消滅している。溝の中ほどの幅は約40cm、深さは約10cm、南側での幅は70cm、深さ約15cmを測る。溝の中には主として10cmから30cmの自然石がまばらに存在し、溝の西側に土師器片が少量検出された。(図版25)

SD02 第12号住居跡と第20号住居跡との間に発見された溝状遺構である。SD01までは東へ約10mの距離がある。全長約7.8m、中ほどの幅1.3m、深さは約20cmを測る。溝はその西端で幅80cm、深さ40cmではじまり、東へ約10°の傾斜をしながら約6m延び、そこから南東へ折れ約2mのところで自然に削滅する。溝の西端と東端との高低差は約1.5mある。溝が東南へ折れる部分は幅40cmのネックとなっている。土器は主として、溝の中ほどのあたりに集中していた。また、溝のネックとなるあたりに、径約5cm、厚さ約5cmのソロバン玉状の有孔土製品が出土した。溝の状況はSD01と類似しているが、溝の中の遺物はSD01が主として自然石であるのに対し、SD02は土器であり、そこに一定の相違がみられる。(内田律雄)

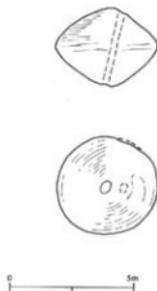


第65図 SD01 実測図

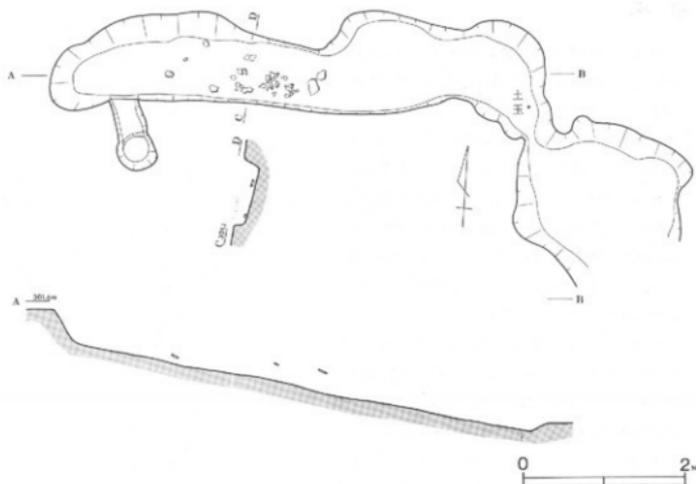


第66図 SD 02 遺物実測図(1)

遺物・壺1, くの字口縁で口唇部は明瞭に平坦な面を持つ。肩部がわずかに張るが、最大径は上部にある。肩部にクシ状工具による1の字の施文を施す。口縁内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面へら削り調整を施す。壺2, くの字口縁でくり上げ状をなし口縁端部は広い面を持つ。肩部には刺突文を施し、肩部に小孔を穿つ。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へら削り調整を施す。底部3, 明瞭な



第67図 SD02 遺物実測図(2)



第68図 SD02 実測図

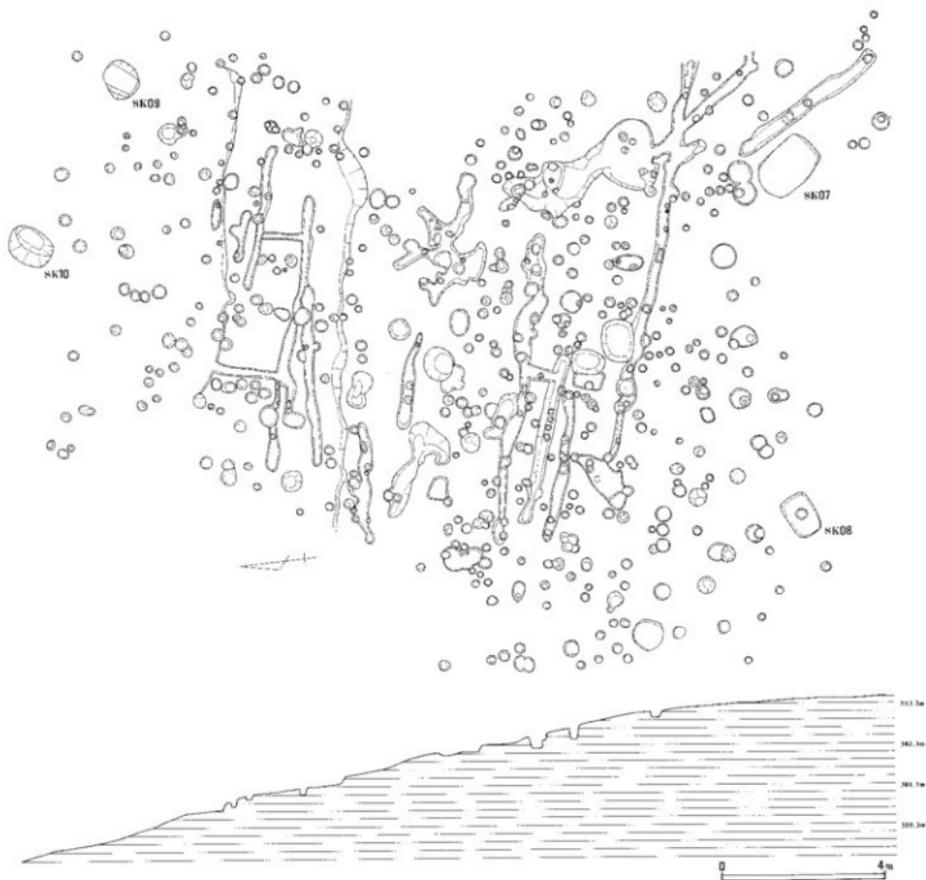
平底で、胴部は開き気味に延びる。外面ハケ目、内面ヘラ削り調整を施す。土玉51、そろばん玉状の土玉で、上下2方向から穿孔するが一方は中心からやはずれる。貫通していないと思われる。(柳浦俊一)

SD03 SD04

SD03及びSD04は、それぞれ第16号住居跡、第19号住居跡で説明した。

溝及びピット群

第Ⅱ発掘調査区のはほぼ中央、第13号住居跡と第16号住居跡の間に、東西約10m、南北約20mにわたり、人工的と考えられる溝、また、性格不明の小ピット群が集中的に存在する。遺構は南高北低の約15°の緩斜面上に穿たれている。溝は東西方向に11本並列し、南東—北西方向のものが2本並列してあり、その長さは、長いもので約10m、深さ約20cmから40cmを測る。ほとんどの溝の中からは弥生式土器片が出土したが、小片であるため、形式、時期は不明である。また、ピットは大小約490個存在する。ほとんど植物の根と考えられる。しかし、この小ピット群中のいくつかからは弥生式土器の小片が出土しているのもあるので、あるいは、人工的なピットがいくぶん存在するのかもしれない。発掘調査区全体をながめた時に、溝状遺構と小ピット群が特に集中しているのは、このあたりのみであり、この集落内において特別な意味を有していた場所とも考えられる。(内田律雄)

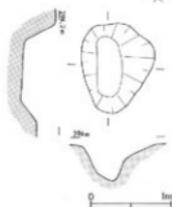


第69図 溝及びピット群

土 城

第1号土城 (SK01)

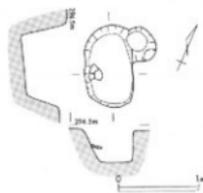
発掘調査区の東端に位置する主軸を北東—南西にむけた土城である。1.2m×0.9mの不整形な平面プランを呈す。深さは東側で40cm、西側で20cmを測る。底部は東側が厚く、その差は5cmである。遺物は発見されなかった。



第70図 SK01 実測図

第2号土城 (SK02)

第1号土城の西約4mの位置にある土城。長辺1m×短辺0.6mの楕円形の平面プランである。北側での深さ0.55m、南側で40cmを測る。床は平垣であるが、北側が7cm低くなっている。土城の中ほど西壁に接し20cm前後の自然石が床より約15cm浮いた状態で発見された。また土城の北壁に接し径44cm×36cm、深さ20cmのピットが存在するが、土城との関係は不明である。



第71図 SK02 実測図

第3号土城 (SK03)

第2号土城の西南約5mのところにある土城である。長辺1.3m、北側約幅0.7cm、南側で80cmの長方形の平面プランである。深さは北側で20cm、南側で30cmを測り底は北側が約5cm高い。土城底中央に22cm×15cm深さ12cmの楕円形のピットがあり、その中に三個の自然石が詰められていた。



第72図 SK03 実測図

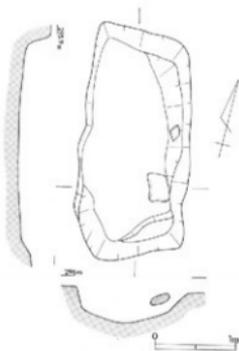
第4号土城 (SK04)

第3号土城の北西約6mの位置にあり主軸を北東上南西にむけた土城である。主軸方向の長さ1.25m、幅北東側で約66cm、南西側で約80cmを測る。深さは北東側で約40cm、南西側で約50cmある。底部は平垣であるが、東側と西側とでは東側が約5cm低くなっている。土城内部には10cmから20cmほどの自然石が底部より20mから30mほど浮いた状態で全体的に存在した。

第73図 SK04 実測図

第5号土城 (SK05)

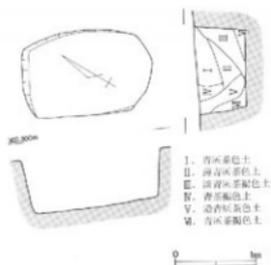
SB, 01の北西側に検出された土城である。南北に長いやや歪んだ長方形の平面プランを呈す。南北約2.8m、東西約1.3mを測る北側での壁の高さ0.3m、南側で0.1mである。低部は舟低形を呈し北と西は約80°立でち上がり、南と東はゆるく立ち上がる。土城の東壁付近に二つの自然石が検出された。その南側の30×25×15cmの扁平な自然石で床は約20cm浮いた状態で出ている。使用痕は認められない。北側のものは約20×10cmである。深さは浅いが、発掘区内では比較的大形の土城である。



第74図 SK05 実測図

第6号土坑 (SK06)

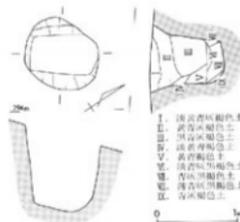
第13, 14号住居跡の南に位置する土坑である。長辺2.0m, 短辺約1.0mの不正形なプランである。北側での深さ約15cm, 南側で約50cmを測る。底は中でやや凹んでいる。南高北低の傾面に穿たれているため, 南側壁縁と北側壁縁との高低差は約30cmある。



第76図 SK07 実測図



第78図 SK08 石鉄



第79図 SK09 実測図

第21号住居跡の北東約5cmのところに位置する土坑である。長軸をほぼ北東—南西におき, その長さ約1.1m, 幅は北東側で0.7m, 南西側で0.65mを測り北東側が広い。底部はほぼ平坦, 水平で検出面よりの深さは約40cmを測る。土坑底部中央には径28cm, 深さ約10cmの小ピットが穿たれている。遺物は土器の小片とサマカイトの小剥片が覆土中からそれぞれ一点ずつ検出された。

SK01 (第32図)

石鉄基部に挟りを入れた凹基式三角鏃である。両面を調整するが, 特に周辺部はいいいに調整する。

第9号土坑 (SK09)

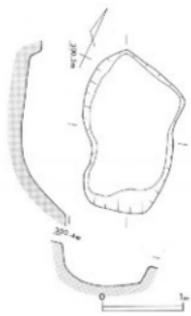
調査区の中央, 南高北低の傾面に穿たれた土坑がある。長径90cm×短径80cmで楕円形に近いプランである。深さは南側で1.0m北側で0.4mを測る。底部は長さ0.65m, 北側での幅0.5m, 南側で0.4mの長方形を呈す。底も南高北低でその差は約10cmである。土層は9層認められる。褐色を基調とした土層である。

第10号土坑 (SK10)

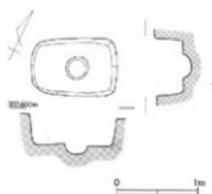
第9号土坑の北西約4mに位置する。南高北低の傾面に主軸を北東—南西に置いて穿たれた土坑である。主軸方向の長さ1.3m幅約0.9mの楕円形の平面プランである。底部は平坦で0.7m×0.3mの長楕円を呈す。土坑の東側の壁はほぼ垂直に立ち上り, その高さは約1.1mある。西側は約80°の傾きで約50cm立ち上り, そこからさらに約25°のゆるい傾きで土坑の縁に達する。土層は5層あり自然の流れこみと考えられる。遺物は発見されなかった。

第7号土坑 (SK07)

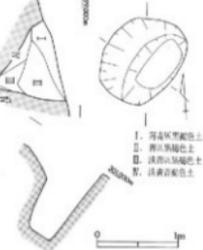
第20号住居跡の北約4mに位置する土坑。北西—南東に主軸を置き, その長さは1.6mである。幅は北西側で0.9m, 中ほどで1.05m, 南東側で0.9mを測る。深さは約70cmある。南東に軸先を向けた船形状の平面プランである。底部は水平である。壁は95°の傾きですとどく立ち上がる。土層であり自然の流れこみと考えられる。第1, 第2調査区の中では規模も大きく深さもあるしっかりとした土坑である。遺物は発見されなかった。



第75図 SK06 実測図



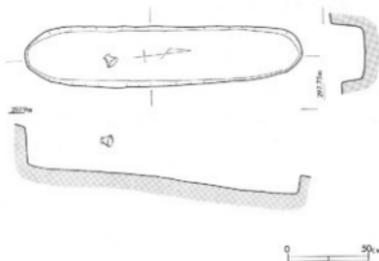
第77図 SK 実測図



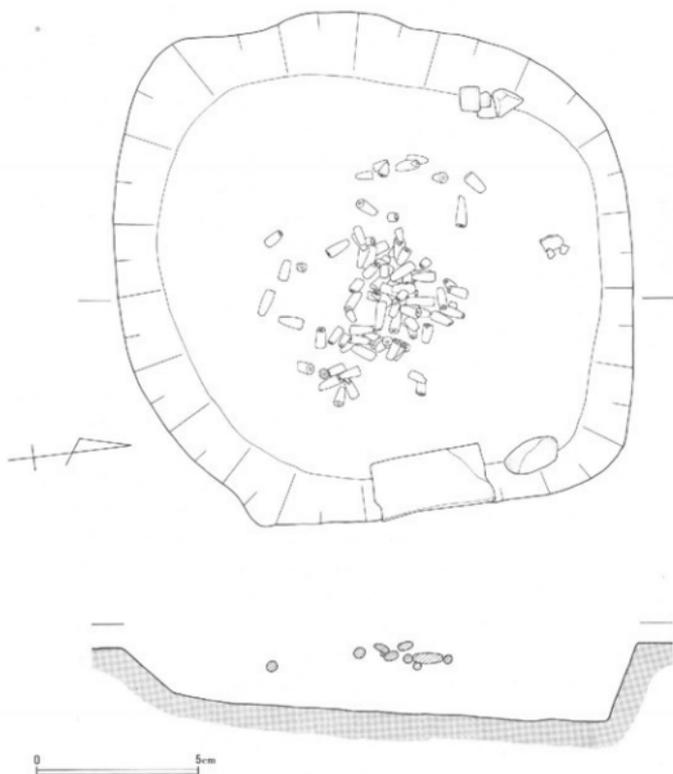
第80図 SK10 実測図

第11号土壇 (SK11)

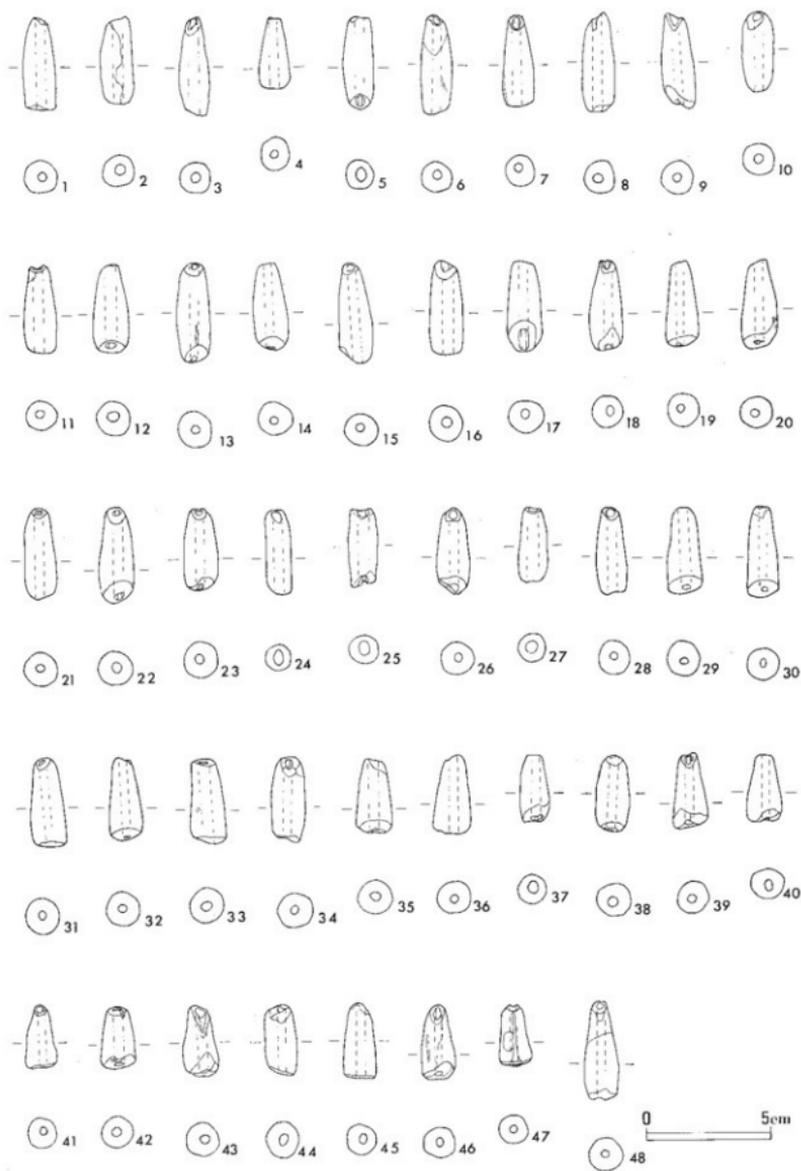
第4号住居跡の北に検出された土壇である。南北に長さ1.7m、の長楕円形の平面プランを呈す。南側での深さ24cm、北で12cmを測る。幅は南側で37cm、中ほどで38cm、北側で28cmで北側に広がっている。床は平壇で北側で南側より20cm低い。土層は赤褐色土で黄褐色の小ブロックを含む層が全体に充填されていた。遺物は南側壁より北へ50cmの位置に床より約15cm浮いた状態で小形手投土器が出土した。



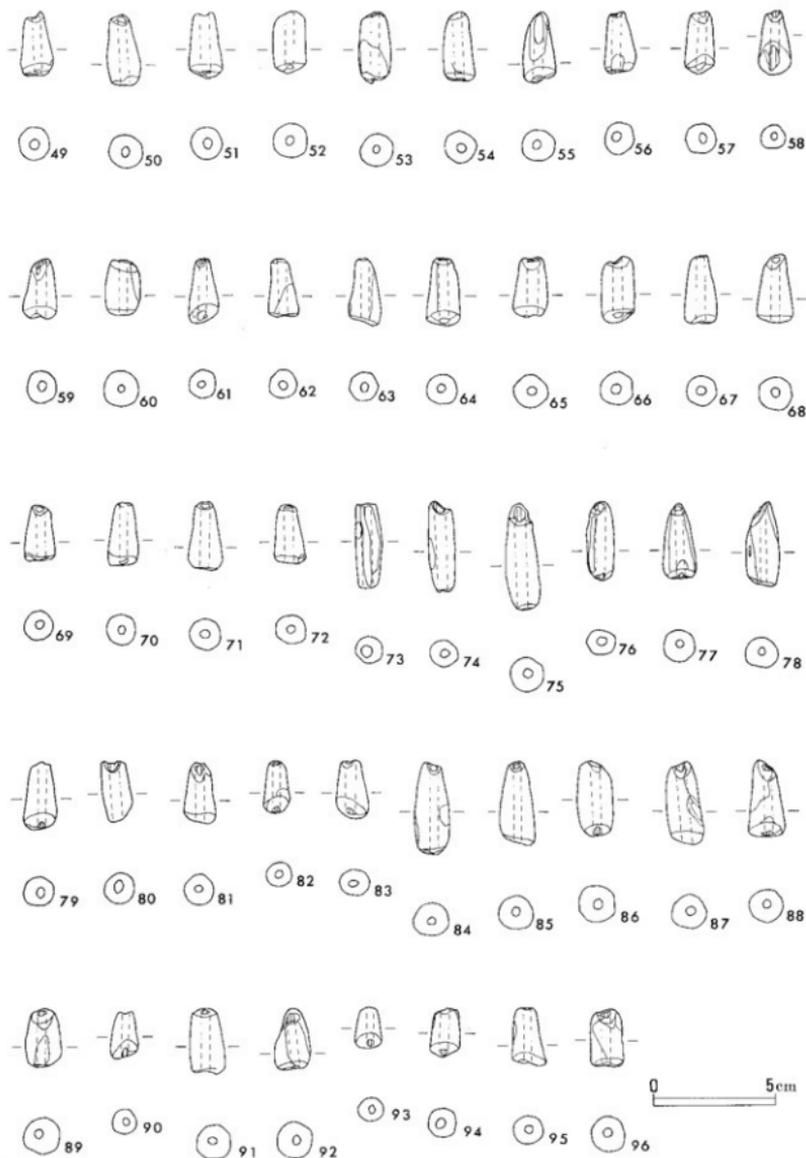
第81図 SK 11 実測図



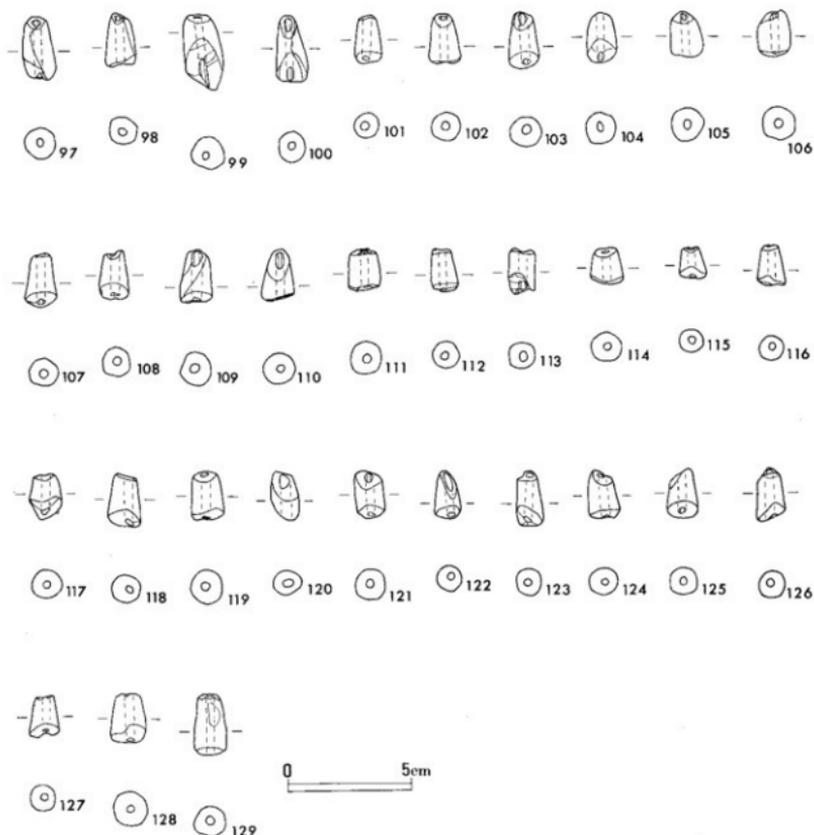
第82図 SK 12 実測図



第83图 SK12 遗物实图(1)



第84图 SK12 遗物实例图(2)



第85図 SK12 遺物実測図(3)

第12号土塚 (SK12 第82図 図版27, 28)

S B, 01のP₇とP₈の間に位置する土塚で径約64×62cm深さ約10cm不整形なプランである。この土塚の中央に合計129個の土鍾が検出された。これらの土鍾は土塚の床より約5cmから10cmの間に特に集中して出土した。土鍾の他に土師器の小片と、7×14cmの割石と数個の小石が存在する。この土塚に最も近いS B01や、発掘調査区域内の住居跡等との関係は不明である。(吉岡七江)

土 鍾

土鍾の種類からいうと管状土鍾である。沈子つまり漁網具であり、高津川水系の河川において漁撈用道具として用いられていたと考えられる。完形品に近いと思われるもの (No. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 48, 73, 74, 75, 76, 84, 85, 87) の平均重量は約5.6gであり、比較的軽い。

土 錘 計 測 値 表

No.	最大径		重量	色 調	備 考	No.	最大径		重量	色 調	備 考	
	cm	cm					cm	cm				g
1	3.8	1.4	6.9	黄	色	66	2.7	1.3	4.4	黒	色	なめらか
2	3.6	1.3	5.8	黄	色	67	2.2	1.4	4.4	黄	色	表面なめらか
3	4.1	1.2	5.7	黒	色	68	2.8	1.5	4.3	黄	色	表面なめらか
4	3.0	1.4	4.0	黒	色	69	2.3	1.3	2.9	黒	色	表面なめらか
5	3.8	1.2	6.8	黄	色	70	2.6	1.3	3.6	黄	色	
6	4.0	1.3	6.0	黄	色	71	2.7	1.4	3.9	黄	色	
7	3.7	1.3	5.5	黒	色	72	2.5	1.3	2.8	黒	色	
8	4.0	1.3	5.8	黒	色	73	3.4	1.1	3.3	黒	色	
9	4.0	1.4	6.3	黒	色	74	3.7	1.1	3.4	黒	色	
10	3.3	1.3	5.1	黄	色	75	4.3	1.3	6.9	黄	色	表面なめらか
11	3.6	1.3	5.6	黄	色	76	3.2	1.1	2.9	黄	色	
12	3.6	1.5	6.5	黒	色	77	3.0	1.3	4.3	黄	色	
13	4.0	1.4	7.6	黄	色	78	3.5	1.2	4.5	黄	色	なめらか
14	3.5	1.4	6.1	黄	色	79	2.8	1.4	3.4	黒	色	
15	4.1	1.4	5.9	黄	色	80	2.5	1.2	2.8	黒	色	表面なめらか
16	3.9	1.5	6.6	黄	色	81	2.5	1.3	3.0	黄	色	
17	3.7	1.4	5.9	黒	色	82	2.2	1.1	2.0	黒	色	
18	3.7	1.3	6.2	黄	色	83	2.4	1.3	2.4	黄	色	表面なめらか
19	3.5	1.4	5.5	黄	色	84	3.8	1.4	6.5	黄	色	
20	3.7	1.5	5.8	黄	色	85	3.4	1.4	5.7	黄	色	
21	3.8	1.4	6.5	黒	色	86	3.0	1.5	6.0	黒	色	
22	3.9	1.4	6.4	黒	色	87	3.4	1.4	5.7	黒	色	なめらか
23	3.3	1.5	6.2	黒	色	88	3.1	1.5	4.6	黒	色	表面なめらか
24	3.5	1.1	3.1	黒	色	89	2.4	1.4	4.6	黒	色	
25	3.2	1.2	3.8	黒	色	90	1.9	1.1	1.8	黒	色	
26	3.6	1.3	5.0	黄	色	91	2.8	1.4	5.4	黄	色	
27	3.1	1.1	3.3	黄	色	92	2.5	1.5	4.0	黄	色	
28	3.6	1.4	5.9	黄	色	93	1.6	1.1	1.3	黄	色	
29	3.6	1.4	4.9	黄	色	94	2.0	1.2	2.5	黄	色	表面なめらか
30	3.7	1.3	5.6	黄	色	95	2.4	1.2	2.9	黄	色	
31	3.6	1.5	7.4	黄	色	96	2.3	1.4	4.3	黄	色	
32	3.4	1.4	5.5	黄	色	97	1.5	1.3	3.5	黄	色	
33	3.5	1.4	6.1	黄	色	98	2.2	1.2	2.5	黒	色	表面なめらか
34	3.5	1.4	6.6	黄	色	99	3.1	1.5	4.4	黄	色	
35	3.1	1.4	5.2	黒	色	100	2.7	1.3	3.8	黒	色	
36	3.2	1.5	5.1	黄	色	101	2.0	1.1	1.8	黄	色	
37	3.2	1.2	3.1	黄	色	102	2.1	1.2	2.3	黄	色	
38	3.1	1.4	5.6	黄	色	103	2.3	1.2	2.3	黄	色	表面なめらか
39	3.0	1.3	4.1	黄	色	104	2.1	1.2	2.7	黄	色	
40	2.8	1.4	4.2	黄	色	105	1.9	1.3	2.7	黄	色	
41	2.5	1.3	3.6	黄	色	106	1.9	1.4	2.9	黄	色	
42	2.5	1.4	3.8	黄	色	107	2.2	1.3	2.3	黄	色	表面なめらか
43	3.0	1.4	5.0	黄	色	108	2.0	1.2	2.3	黄	色	
44	2.9	1.4	5.1	黄	色	109	2.2	1.4	3.0	黄	色	表面なめらか
45	3.1	1.3	4.8	黄	色	110	2.1	1.3	2.3	黄	色	
46	3.0	1.3	3.8	黄	色	111	1.7	1.3	2.7	黄	色	
47	2.4	1.4	3.2	黄	色	112	1.8	1.1	1.6	黄	色	
48	4.0	1.4	5.9	黄	色	113	1.9	1.1	1.5	黄	色	
49	2.6	1.3	4.0	黄	色	114	1.5	1.3	1.9	黄	色	
50	2.9	1.4	4.3	黄	色	115	1.3	1.1	1.1	黄	色	
51	2.7	1.4	4.2	黄	色	116	1.6	1.1	1.6	黒	色	表面なめらか
52	2.5	1.3	2.5	黄	色	117	1.9	1.3	2.1	黒	色	
53	2.9	1.4	4.4	黄	色	118	2.2	1.3	2.6	黒	色	表面なめらか
54	2.7	1.3	4.3	黄	色	119	1.0	1.4	3.5	黄	色	
55	3.9	1.4	3.5	黒	色	120	2.0	1.1	1.4	黄	色	
56	2.5	1.3	3.4	黄	色	121	2.0	1.3	2.3	黄	色	
57	2.6	1.2	2.7	黄	色	122	1.5	1.1	1.4	黄	色	
58	2.6	1.3	2.5	黄	色	123	2.2	1.1	2.3	黒	色	表面なめらか
59	2.5	1.3	3.5	黄	色	124	2.0	1.2	2.3	黒	色	
60	2.3	1.4	4.9	黄	色	125	2.0	1.2	2.1	黒	色	表面なめらか
61	2.6	1.2	2.9	黄	色	126	2.2	1.2	2.1	黄	色	
62	2.4	1.2	2.8	黄	色	127	1.7	1.3	1.6	黄	色	
63	2.7	1.3	3.2	黄	色	128	2.0	1.4	3.3	黄	色	
64	2.2	1.3	3.7	黄	色	129	2.5	1.3	4.4	黒	色	表面なめらか
65	2.4	1.4	3.9	黄	色							

つくりはかなり粗雑でもろく、胎土の中に細かな砂つぶが混じりこんでいるものが多い。(吉岡七江)

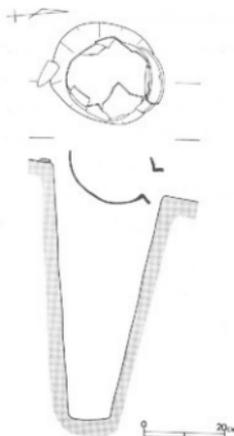
第13号土坑 (SK13 第86図)

発掘調査区域の北端、南高北低の傾斜面に検出した、径約26cm×24cm、深さ60cm、底部の径約10cmの円形プランの土坑である。土坑の北側縁に7cm×3cmの自然石が存在した。また、土坑上には弥生式土器の壺形土器が口縁部を北に向け横転していた(第86図)。



第87図 SK13遺物実測図

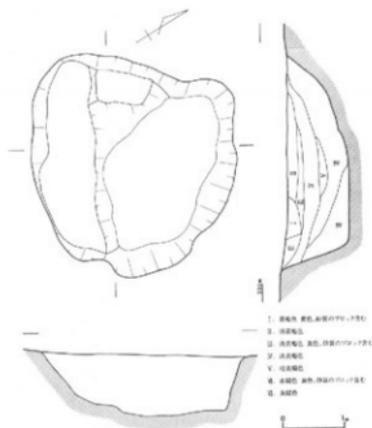
遺物 壺D「く」の字口縁で、口唇部は平坦で広い面になる。肩は張り最大径は胴の上部にある。肩部にクシ状工具による「ノ」の字状の施文を施す。口縁部内外面ヨコナデ、口唇部ハケ目、頸部内面ハケ目、胴部外面ハケ目、胴部内面へう削り(上半横方向、下半縦方向)調整を施す。



第86図 SK13実測図

第14号土坑 (SK14 第88図)

第III調査区の最高所に位置する土坑で、最西にあたる。不整形な平面プランで、約3.5m×3.3m、深さ1.0mを測る。土坑の東側は約70°の傾きで立ち上がるが、西側はゆるい傾斜で縁に達する。底は水平でなく、東側と西側とでは高低差があり、約10cm東側が低い。さらに土坑の西側壁に接し90cm×50cmの平坦部があり、遺構検出面より約70cmの深さである。土層は全部で8層あり、I層以外は自然の流れこみと考えられる。遺物は発見されなかった。III層に人頭大の自然石が一個検出された。土層は全体に炭化物を呑むが、特にIV層、VI層に特に多く含まれている。

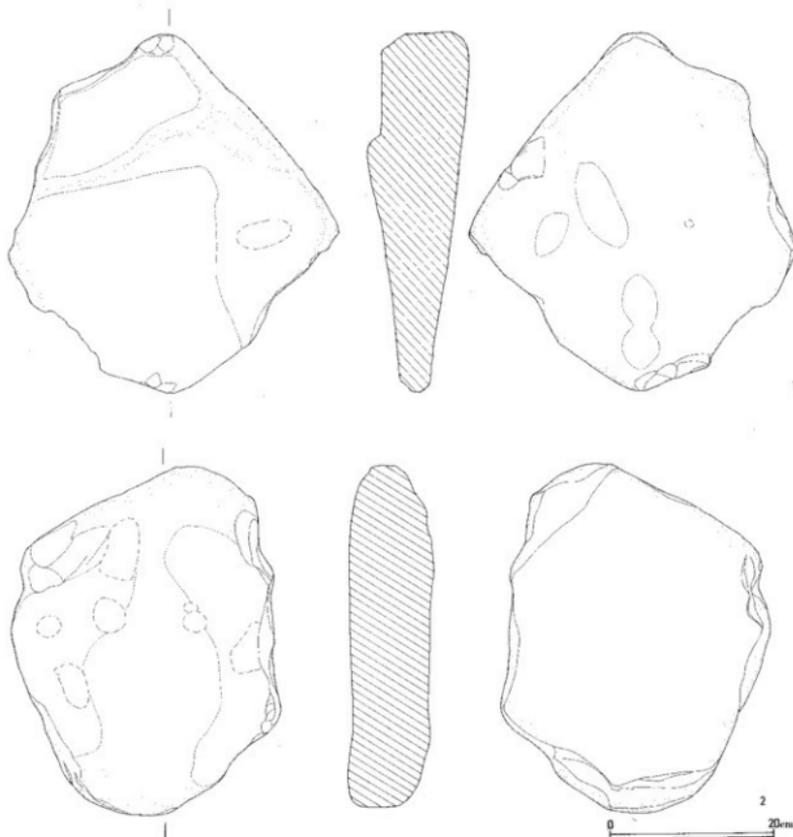


第88図 SK14 実測図

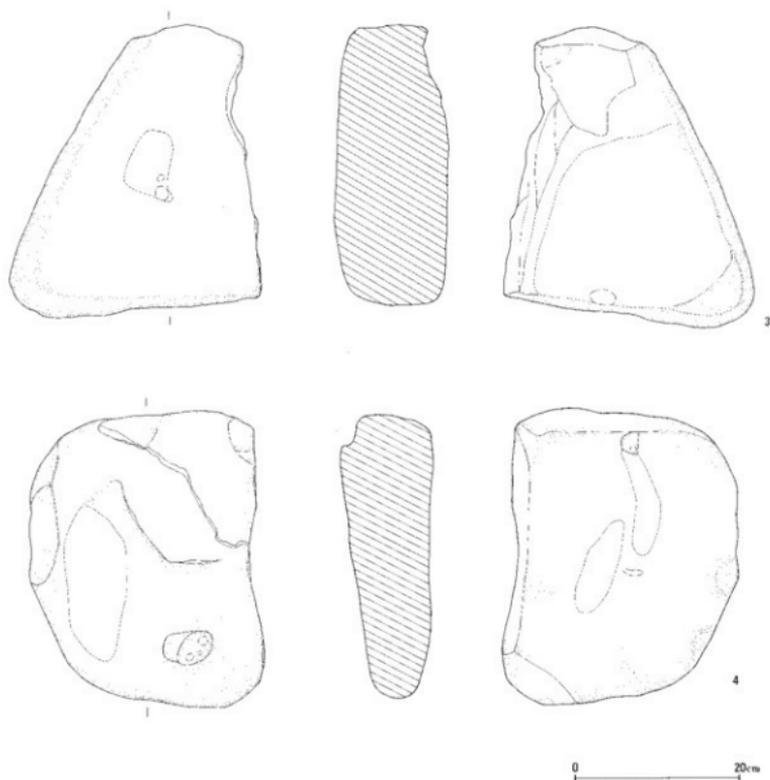
石皿様石器

前立山遺跡の住居跡23軒中、磨滅痕の観察される扁平な自然石の出土例が10例みられた。それは、S I 02, 04, 10, 11, 13, 14, 16, 18, 20, 23の各住居跡からである。いずれも扁平な自然石を利用したもので、そのサイズは、小さなもので、例えば第11号, 18号住居跡例の様に30cm×20cm, 大きなもので第20号住居跡の例の如く40cm×40cmほどである。厚さは10cm前後で、15cmを越えるものはない。石材は花崗岩のものが多く、S I 04, 10, 11, 13, 14, 16, 18, 20, 23で、砂岩質のものにS I 02例がある。いずれも多孔質である。使用痕は実測箇中破線で表わした範囲に観察された。皆、磨滅した痕が明瞭で鈍い光沢を放っている。

S I 02は角のとれた自然石で使用痕は一面のみである。ほぼ中央に15cm×14cmの狭い範囲が磨滅し

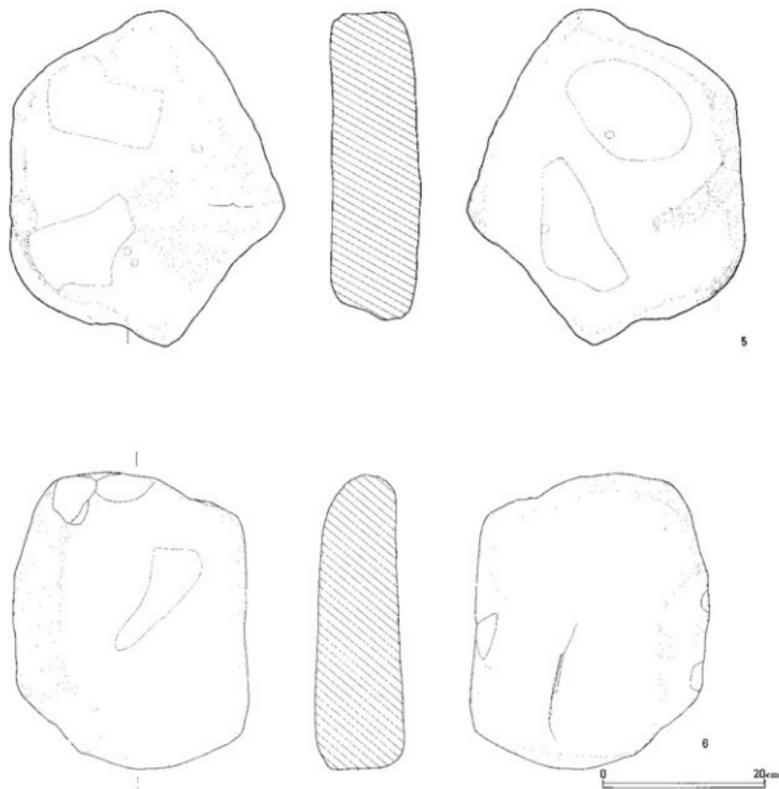


第89図 石皿群石器 (I)



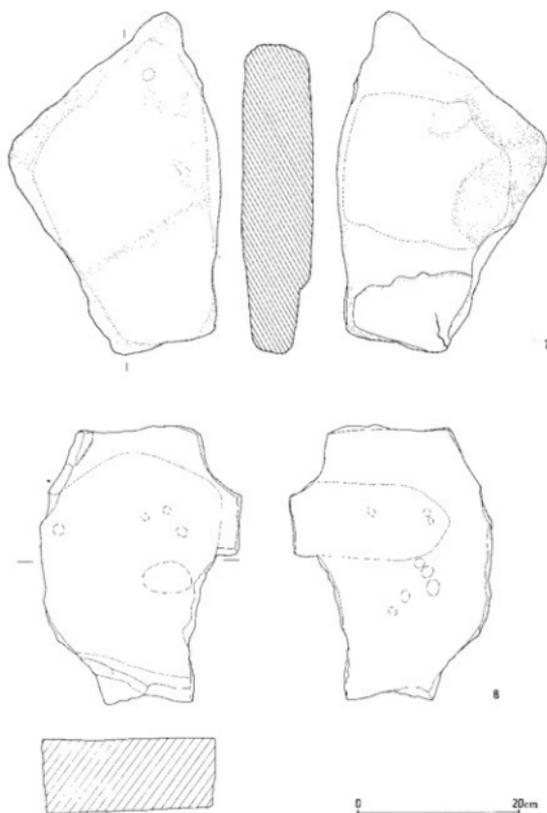
第90図 石皿様石器(2)

ている。S I 04は、自然石の一方を打ちかいて適当な大きさにしたものと考えられる。両面に使用痕がみられる。一面はほぼ中央に $8\text{ cm} \times 5\text{ cm}$ のほぼ中央に $8\text{ cm} \times 5\text{ cm}$ の小さな範囲に認められる。また、この使用痕の範囲内に二つの打撃痕(実測図中一点鎖線で示した)と思われる小さな凹みがある。もう一面は約 $\frac{1}{2}$ の広い範囲に使用痕がみられる。縁に一つ打撃痕がある。さらに加熱された痕跡が認められる。S I 11は、自然石ではなく厚さ 9 cm ほどの花崗岩を適当な大きさに全体を打ちかいて作られている。 $30\text{ cm} \times 20\text{ cm}$ の小型のサイズに属する。使用痕は両面にあり、一方はほぼ全体が使用され、その範囲内に五ヶ所の打撃痕がある。もう一面は $20\text{ cm} \times 9\text{ cm}$ のやや狭い範囲に認められる。使用痕の範囲内三ヶ所、外側に五ヶ所の打撃痕がある。使用痕の広い面に薄く炭化物が付着しているのが観察される。また、火を受けた痕跡もある。S I 13は $41\text{ cm} \times 33\text{ cm}$ と大型サイズに属する。使用痕は両面にそれぞれ二ヶ所ずつ、中央をさけた両側に、合計四ヶ所認められる。一面は $13\text{ cm} \times 9\text{ cm}$ 、 $15\text{ cm} \times 8\text{ cm}$ の使用痕で、その外側に二ヶ所の打撃痕がある。もう一面は $18\text{ cm} \times 8\text{ cm}$ 、 $17\text{ cm} \times 11\text{ cm}$ で、それぞれ、使



第91図 石皿様石器(3)

用痕の範囲内に打撃痕が一ヶ所ずつある。S I 14は両面に使用痕がみられる。一方は縁によったところに $19\text{cm} \times 7.5\text{cm}$ の範囲である。その外側の凹んだところに三ヶ所の打撃痕がある。もう一面はほぼ中央に二ヶ所の使用痕がある。ほぼ中央のものは $13\text{cm} \times 4\text{cm}$ で中央から縁に向けてあるものは $14 \times 3\text{cm}$ を測る。いずれも細長い形状をしており、前後に使用された方向を知ることが出来る。使用痕の付近に二ヶ所の打撃痕がある。S I 16は角の磨減した自然石で、 $40\text{cm} \times 26\text{cm}$ 、厚さ 9cm を測り、中型サイズのものである。使用痕は両面にあり、一面はほぼ全体に認められる。他の一面はほぼ中央に径約 20cm のかなり広範囲に認められる。S I 18は $30\text{cm} \times 20\text{cm}$ で角のよくとれた自然石である。使用痕は両面にあり、どちらも中央を中心として、ほぼ全面に認められる。注目されるのは床に接していなかった面に、使用痕の範囲内にかなり厚く炭化物が付着していたことである(第47図)。これは第18号住居跡内の床面が三ヶ所にわたり焼土化していることも関係するのであろうかこの類の石器の途を考えるに、このS I 18例は重要である。S I 20は $44\text{cm} \times 40\text{cm}$ 、厚さ 11cm を測り、大形である。使用痕は



第92図 石皿様石器(4)

111, S I 18, S I 23), 中央ピット上にあつたものが一例(S I 10)である。このうち, S I 10例を除くと他の九例の石皿様石器はほぼ原位置を保っていたものと思われる。

以上の観察から石皿様石器は, その機能に適した石材を選び, 自然石の中で適当なサイズのものがあればそれをそのまま利用し, 移動するのに困難なものの場合には, 適当なサイズに打ちかいて使用したものと考えられる。また, 使用痕をみると, 両面のもの, 一面のみのもの, 全面が使用されたもの, 一部のみのもの, 前面にそれぞれ二ヶ所ずつあるものなどがある。これは使用頻度による違いなのかも知れない。さらに, S I 11やS I 18例にみられるように使用痕の範囲に炭化物の付着がみられることは, この種の石器が, 例えば縄文時代にみうけられる堅果植物の種子を磨りつぶした石皿の機能を想像させる。特に, S I 04, S I 11等では磨石を共存していることは興味深いことである。

以上の例の他に, 第3号住居跡東側外に同様な石皿様石器があつた。また, 第21号住居跡からは磨石が出土している。(内田律雄)

両面にある。一面は中からほぼ半分にわたり認められ, この使用痕の範囲外に $6\text{cm} \times 3\text{cm}$ の少し大きな打撃痕がある。他の一面は $11\text{cm} \times 5\text{cm} \times 4\text{cm}$, $6\text{cm} \times 4\text{cm}$ の小さな使用痕が三ヶ所認められ, 他に打撃痕が一ヶ所ある。S I 23は 43cm , 厚さ 10cm と比較的大型に属する。角のとれた自然石を利用して, 使用痕は一面のみで中央を除いて二ヶ所ある。その範囲は $32\text{cm} \times 6\text{cm}$ と $30\text{cm} \times 10\text{cm}$ で長い。使用痕の範囲内に合計七ヶ所の打撃痕がある。

次に, 石皿様石器の出土状態をみると, 皆例外なく住居跡床面に密着して, あたかもその場所に掘え置かれていたかの様である。それも水平な床面に置いた場合にどちらか一方が高くなるものが選ばれているようである。住居跡内に於ける石皿様石器が置かれた場所は壁際, あるいは壁際と推定されるものが六例(S I 02, S I 04, S I 13, S I 14, S I 16, S I 20), 中央ピットと壁との中間が, 三例(S

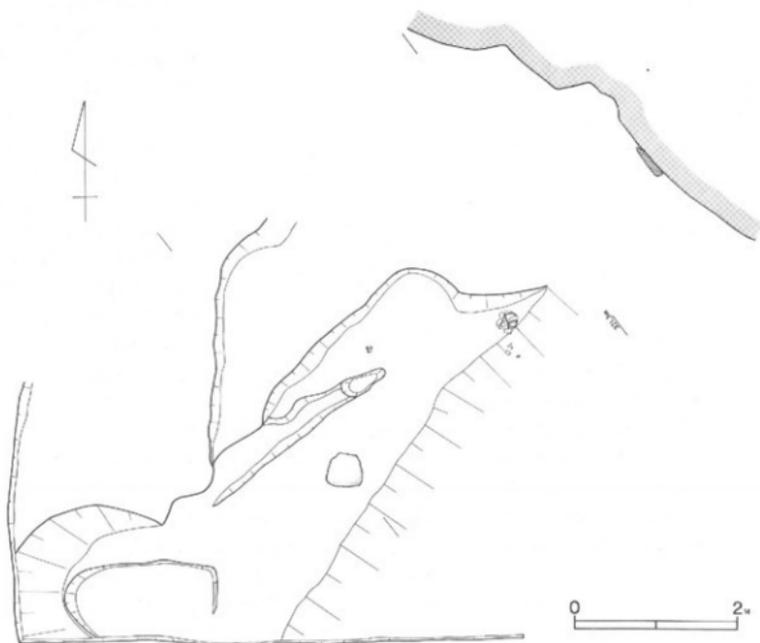
第Ⅲ 調査区

SX01 (第93図, 図版32) 第Ⅲ調査区

第14号土城の北東約20mの位置にある。南北約2.2m, 東西3.8mの方形の平面プランで、竪穴住居跡を思わせる遺構である。南側の比較的存在状態の良い壁高は約20cmを測る。遺構の南壁に南北1.2m, 東西0.9m深さ約0.2mの不整形な張り出した遺構が存在する。遺構の北側は傾面のため消失している。床は水平でなく約12°の傾斜で北側が低



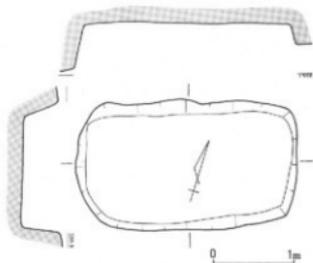
第93図 SX01 実測図



第94図 SX02 実測図

い。遺物は10cm前の自然石が南側壁付近に集中し、その中に弥生式土器が2、3片泥んでいた。また、この遺構の南高付付近にサスカイトのツブが集中しているのがみられたが、その多くは床面より10から20cm浮いた状態であった。住居跡にみられるような柱穴のピットは検出出来なかったが、また、この遺構の外にも発見できなかった。この第Ⅲ調査区中はもとより、前立山遺跡全体で、最もサスカイト片の集中して出土した遺構である。後に述べるように、サスカイト製石鏝の工屑跡であった可能性がある。(内田律雄)

SX02 (第104図 図版34) 第Ⅲ調査区はほぼ中央に大きな溝状遺構に囲まれたいくつかの土城状の遺構がある。SX02はそのうち最南に位置している、住居跡地の遺構である。遺構は層の高い方を北から西へかけ、長さ約3m、幅0.6mにわたりカットし、平坦面を削り出している。遺物は遺構の中央に径約20cm、深さ約10cmほどの扁平な自然石が床に据え置かれていた。住居跡から出土する石皿椀石器にみられる使用痕は観察出来なかった。また、遺構の北東端に甕は形土器が、中ほどには杯形の小平手土器が発見された。(内田律雄)

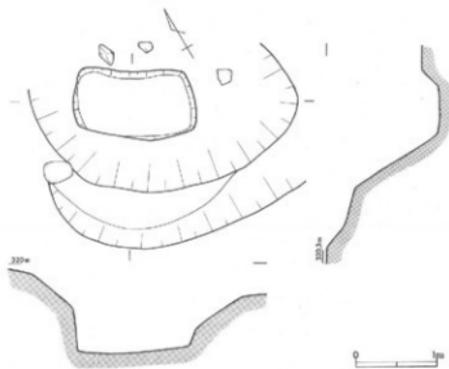


第95図 SX03 実測図

SX03 (第95図 図版33) 大きな溝状遺構(SX10)にかこまれた土城。溝状遺構内のほぼ中央に南北約3m、東西約2.2mの平坦面を地山を削り出して作りSX03は、その中央に主軸をほぼ東西にひけ穿たれた土城である。長辺2.7m短辺2.0m、隅丸長方形の平面プランである。深さは東側で約0.4m西側で1.0mある。床面はほぼ水平である。土城の中には遺物は発見されなかったが土城上及び平坦面上に弥生式土器と考えられる土器の小片を数点検出した。(内田律雄)

SX04 (第104図 図版33) SX03の西約2.5mの位置にある平面プランが不整形の土城である。SX03と同じ平坦面上にあり、径は約50×40cm、最も深いところで80cmを測る。遺物は発見できなかったが土城の西側縁に人頭大の自然石が存在した。(内田律雄)

SX05 (第96図 図版34) SX04の北約10mの傾斜面に穿たれている。長軸をほぼ東西において、その長さは約1.5m、短辺0.8mを測る長方形の土城である。深さは南側で約1m、北側で約0.2m、約60度の傾きで立ち上がる。西側の深さは0.5mで、約83°の傾きで、東側は約0.2mの深さである。南高北低の約30°の斜面に穿たれているために検出面からの深さは様々だが土城床面はほぼ水平である。土城は南側に長さ約2m、幅約0.5mにわたり小規模な平坦な加工段があり、その西端に35cm×25cm

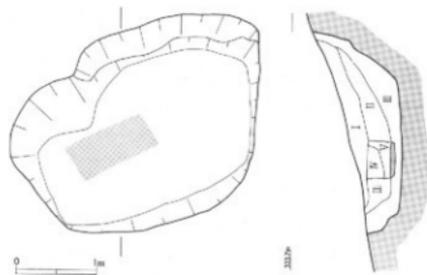


第96図 SX04 実測図

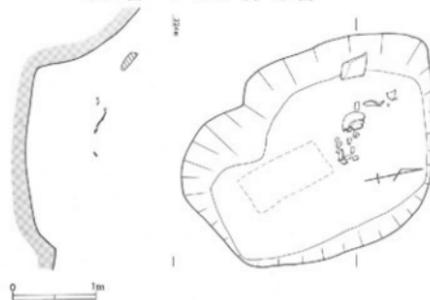
厚さ約10cmの扁平な自然石が置いてあった。使用痕はみとめられない。墓標の可能性はある。遺物は土城上面より大形の壺形土器片(第101図1, 2)が出土した。その他土城の北側に人頭大の自然石が3個あった。(内田律雄)

SX06 (第97, 98図, 図版35) SX03, S

X04の西側, 西高東低で約30°の傾斜面に築かれた土城である。主軸方向をほぼ南北にむけている。主軸方向に長辺が約3m, 短辺が2.5mの不整形な平面プランである。土城の深さは高い西側で約1m, 東側で0.4mを測る。土城群の中では大きな土城に属する。土城の南側に長径1m, 幅0.46mの長方形の炭化物層が検出され, この範囲の木棺が埋納されていたことが考えられる。炭化物層の厚みは約6cmある。土層はI層からVI層まで確認した。(第97図) I層は黄褐色土層で赤色ブロックを含む。II層は暗黄褐色土層。III層は黄褐色土層。IV層は淡赤褐色土層。V層は黄褐色土層である。VI層は炭化物の層である。このうち木棺に関する土層は, IV層, V層, VI層と考えられる。木棺の深さは復原すれば約35cmほどになる可能



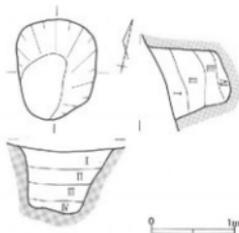
第97図 SX06 実測図



第98図 SX06 遺物実測図

性がある。また, 土城の北側, I層中に, 大形壺形土器が見えられた。鬮山文で飾られ, 丹を塗った痕跡が認められる弥生式土器である。恐らく, この土城上に供献されたものであろう。(第101図3) さらに, これらの土器の西側に径約28cm×22cm, 厚さ8cmの扁平な自然石が置いてあった。住居跡にみられるような使用痕はみられず, この墓標の墓標であったと思われる。以上, この土城内に検出された木棺の跡, 供献された土器, 墓標等は, この土城が墓塚であると考えさせる。(内田律雄)

SX07 (第99図, 図版33) SX06の北側, 壁に接して穿たれた土城。SX08にも隣接している。南北1.2m, 東西0.9mの楕円形の平面プランである。検出面からの深さは, 東側で0.75m, 西側で0.7mを測る。床面は水平でなく不整形に穿たれている。壁はほとんど垂直にたち上がるが, 東側の壁は約30°の角度でゆるく土城上面に連する。第III調査区の土城群中ではSX08とともに比

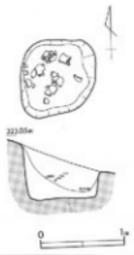


第99図 SX07 実測図

較的小規模なものである。土層は4層からなり、上よりI層暗赤褐色土層、II層赤褐色土層、III層黄褐色土層、IV層暗黄褐色土層である。遺物は土塚の中、及びその周辺にも発見することは出来なかった。(内田律雄)

SX08 (第100図, 図版36)

SX06, SX07の北側に隣接して穿たれた土塚。径約0.9m×0.9mの不整形平面プランを呈す。西高東低の斜面に穿たれているため、深さは西側で約0.7m、東側で0.3mを測る。床面はほぼ水平である。壁はほとんど垂直に立ち上って遺構検出面に達する。第III調査区の土塚群の中では比較的規模の小さなものである。土層は2層から成り、I層赤褐色土層、II層は暗赤褐色土層である。I層は大きく落ちこんでいる様子がうかがわれる。この土塚の中からは弥生式土器が出土した。土器は破片となっているが、比較的大きな破片が残存していたために、そのほぼ全様を知ることが出来る。後述する様に陽出文のある大形壺形土器で丹を塗った痕跡が観察される(第101図5, 図版74)。土器は床面より約8cmから30cmの間、主として第I層から出土している。遺構検出面がかなり急な斜面であることを考えると、もとは、もう少し浅い土塚であったと思われる。出土した弥生式土器は弥生時代中期末の様相を示し、供献されたものか、あるいは土器棺として用いられたものであろう。出土状態からすると壺棺としての可能性が高い。したがってこの土塚は墓塚であったと考えられる。土塚の内部より遺物が発見されたのは、このSX08のみである。(内田律雄)



第100図 SX08 実測図

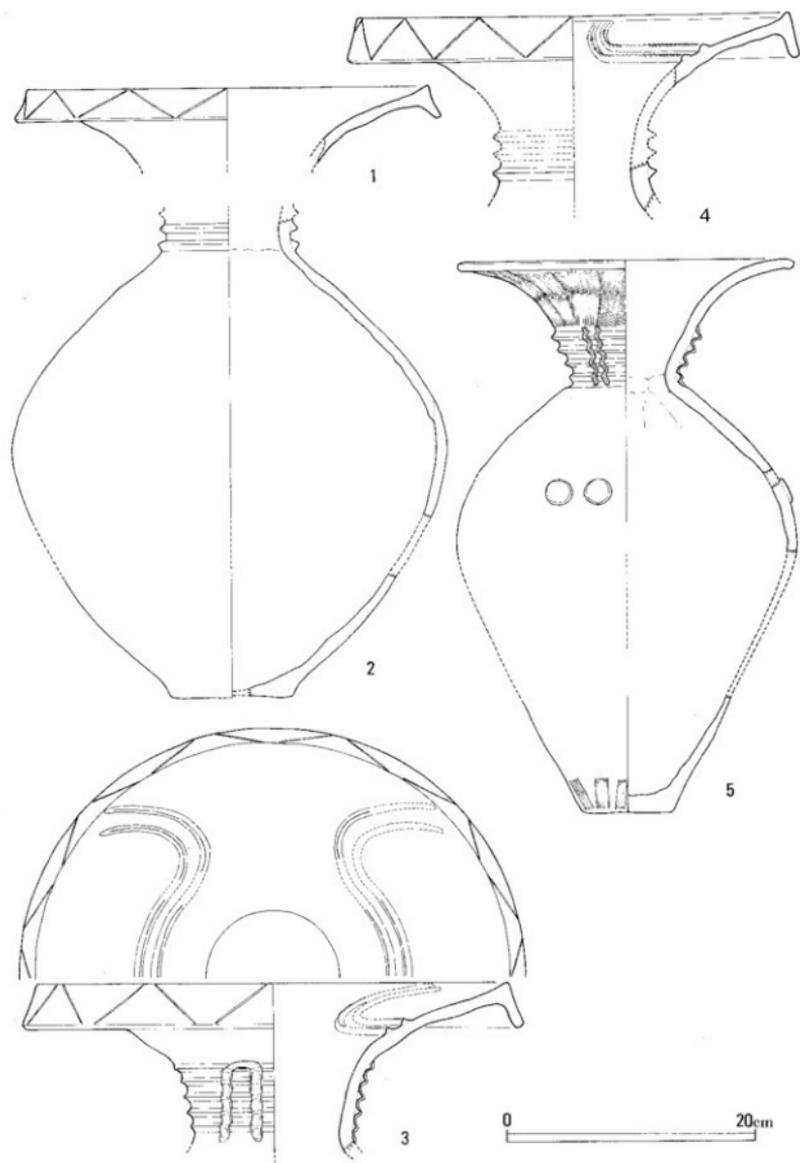
SX09 (第64図)

SX06, SX07, SX08の土塚群の西、丘陵の高い方に約5m離れて穿たれていた土塚である。土塚の穿たれているところは、やはり西高東低の急斜面である。南北1m東西約1.5m、深さ約0.2mの最も小規模な土塚である。遺物は発見されなかった。またSX10の溝状遺構とも大きく離れている。(内田律雄)

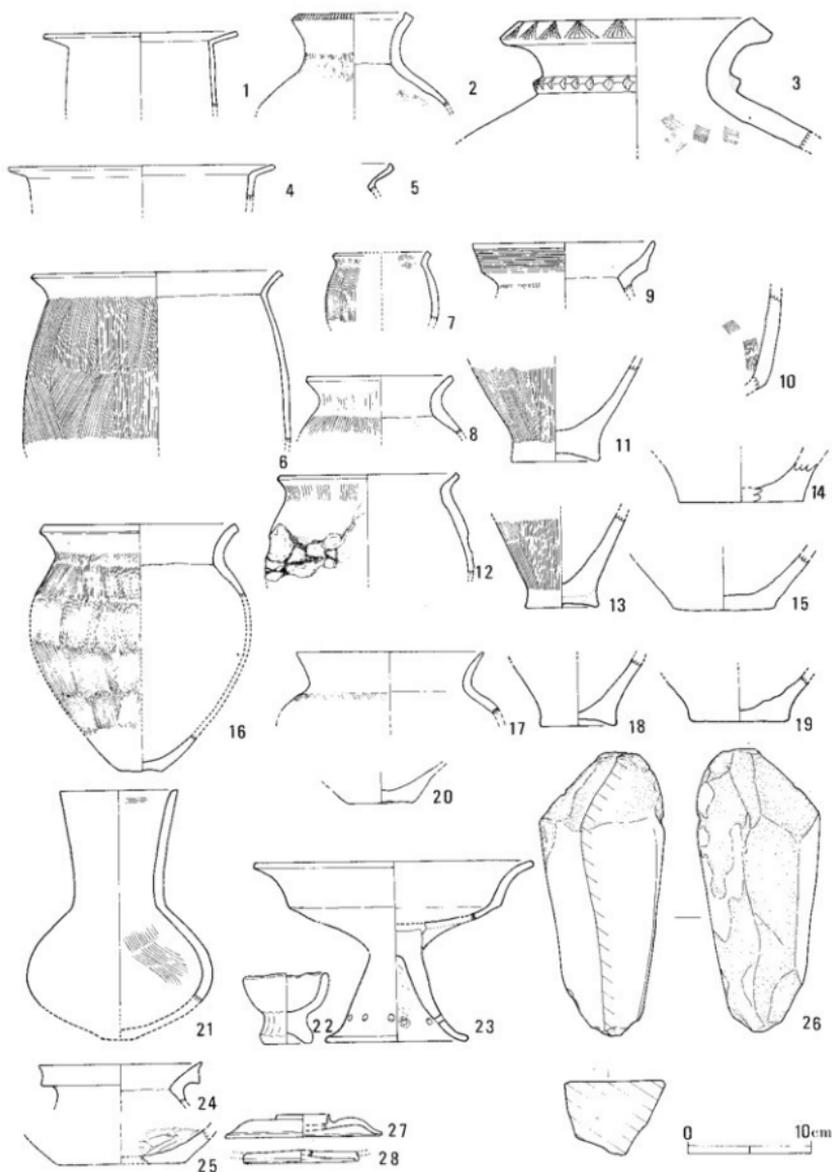
SX10 (第104図, 図版33)

SX02からSX08を取りかこみ、他の場所と区画するかのごとく穿たれている。このSX10の溝状遺構は、前立山遺跡の中で、土塚群の占める場所をより墳墓としての性格を強めるものである。溝状遺構は西高東低の丘陵の東側、つまり、低い方から北と南に端を置く、「U」字形を呈している。溝の端の間は約1.2mを測る。深さは東側で約1m、その幅2.0mである。溝の幅が広くなることが、北側と南側に一ヶ所ずつあり、その幅はそれぞれ1.8mと2mを測る。北側と南側の溝の端は、先細りしながら浅くなり自然に消滅する。この墳墓出土の遺物の多くは、この溝状遺構の中から検出されたものである。また、溝状遺構の中には径約20cmから30cmほどの柱穴状の小ピットが19穴構状遺構とともにめぐっていた。溝状遺構の内側のほぼ中央に穿たれたSX03の存在する平坦面から、溝状遺構の東側床面までの高さは約3.6mを測る。さらにその上部にあるSX06までは、6.5mの高さである。この溝状遺構に囲まれた墓域は、あたかも尾根上に築かれた、周溝内に複数の墓塚を穿った一つの台状墓の様相を呈しているとも云える。さらに、今一つ特筆すべきことはこの墓域全体から、径15から20cmほどの自然石が多数検出されたことである。多くは浮いた状態であった。これらの自然石は、SX06の墓標と考えられる扁平な自然石とともに、火を受けている。その為に灰白色と赤色に変じているものが多い。(図版70) これらがどのような意味をもつかは明らかでないが、墳墓からの焼石の出土例は、そう多くないもの時折みうけられる。(内田律雄)

遺物(第101図, 第102図) 第101図1はS X06の上面から出土した蓋形土器である。口縁から頸部にかけて残存する。口径は約38cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、さらにへの字形に外に垂れ下がる。口縁部側面に沈線による鋸歯文が描かれる。頸部は5条の突帯の上に逆U字形の突帯を3ヶ所貼り付けている。全体的に赤褐色の胎土で、漏斗状に口縁部が大きく開く、大形の蓋形土器である。さらに口縁部内面を一方を抜き口とした2条の突帯をめぐらす。5はS X08内より検出した大形蓋形土器である。復原した器高は約45cm、胴部の最大径は約27cm、口縁部径約27cmを測る。口縁部は漏斗状に大きく外反、胴部は中程よりやや上方にその最大径があり、直線的に底部にむかいます。径約7.0cmの平底で、全体的にスマートな形状である。ハケ目による調整が底部と口唇部約4.5cmの間に縦方向にあるのが観察される。文様は頸部の下方、胴部最大径のやや上方に径2.0cm、厚さ0.4cm程度の円形浮文が対になったものが合計3組みられる。また、頸部には4条の突帯文の上に縦方向に2条の突帯を貼り付けている。胴部内面に削りはみられない。出土状態から盗掘の可能性が強い。1はS X05及びS X10から出土した大形蓋形土器の口縁部である。その形状は口面に突帯がないところを除けば、前述したS X06出土の4の蓋形土器の口縁部とはほぼ同様である。口縁部径は約32cmを測る。2は大形蓋形土器の頸部から底部にかけてのものである。口縁部を失っているが復原すれば頸部までの器高は約39cm程になる。胴部の最大径は約35cmを測り、底部径9.8cmの平底で、胴部最大径がほぼ中央にある球形に近い形を呈す。4はS X10より分散して検出された大形蓋形土器の口縁及び頸部である。口縁部の径約35cmを測る。頸部から口縁部にかけて大きく外反する漏斗状を呈し、口縁部の鋸歯文、その内面の2条の突帯文、頸部の突帯文等は、S X06出土の蓋形土器(3)に類似する。第102図3はS X05及びS X10から出土した大形の蓋形土器である。口縁部はゆるやかに外反し、外側にサルボウの様な二枚貝による鋸歯文をめぐらしている。口径は約20cmある。頸部は短く、刺突文をつけた断面が三角形の突帯1条をめぐらしている。頸部の下方内面にハケ目による調整痕が観察される。器壁約2cmと厚いのが特徴的である。2はS X10出土で口径約8.6cmの蓋形土器である。口縁部にサルボウの様な二枚貝の刃による縦方向の刺突文をつけている。頸部から口唇部にかけてはゆるやかに外反し、くの字形に近い。頸部外面及び胴部内面にハケ目による縦方向の調整痕がみられる。1, 4~9, 12, 16, 17, 24は蓋形土器である。このうちS X出土の16以外は皆S X10及びこの墓域内から出土したものである。いずれも頸部がくの字形を呈すが、1は特に鋭く屈折する。複合口縁に近いものは9, 24であるが、前者は口縁外側にクシ横書きの浅い沈線が幾条にも入り、後者は無文である。6~9, 12, 16, 17は、外面に口唇部下、あるいは頸部下よりはじまる縦方向のハケ目状の調整がみられる。6~9, 16, 24は内面にへら削りがみられる。6は口径が最大で約20cmあり、最小のものは7の7.5cmである。胴部下、底部がはっきりしないものが多いなかで、S X02出土の16は復原した器高20cm、口縁径約15.5cm、腹径約18cm、底径約3.5cmとほぼ原形を知ることが出来る。底部径が小さく内側に少し凹んでいる。13~15, 18~20, 25は蓋形土器や壺形土器の底部であり、10は底部に近い部分であろう。内面に削りやハケ目の調整のみられるもの(25, 10)は大形蓋形土器の底部と思われる。21は小形の長頸壺で底部を欠いているが、復原すれば器高約20cmの小さな平底を呈するものになるであろう。頸部に比し、口縁がラッパ状に開き、その径は約9.5cmである。内部にハケ目状の調整痕がみられる。23は高杯で器高約14.5cm、口縁部径22.5cmを測る。杯部断面は歪んだS字にカーブを描く。胴部の最大径は11.5cmで、径約0.5cmの小孔がめぐっている。22は小形手捏土器で高環形を呈す。器高は5.5cm。以上の土器の他に長さ22cm、径約10cmのよく使い込んだ砥石がS X10より出土した(26)。また表土から須恵器片(27, 28)が検出された。(内田律雄)



第101図 墳墓出土の遺物(1)



第102図 墳墓出土の遺物(2)

墳墓と出土土器

次に、以上墓域内から出土した遺物と、墳墓との関係をながめてみることにしたい(第103図)。墳墓に關係する遺物は、SX03, SX04, SX05, SX06, SX07, SX08が土塚墓、SX02は祭壇状遺構、及びこれらを州むようにめぐるSX10は周溝と考えられる。

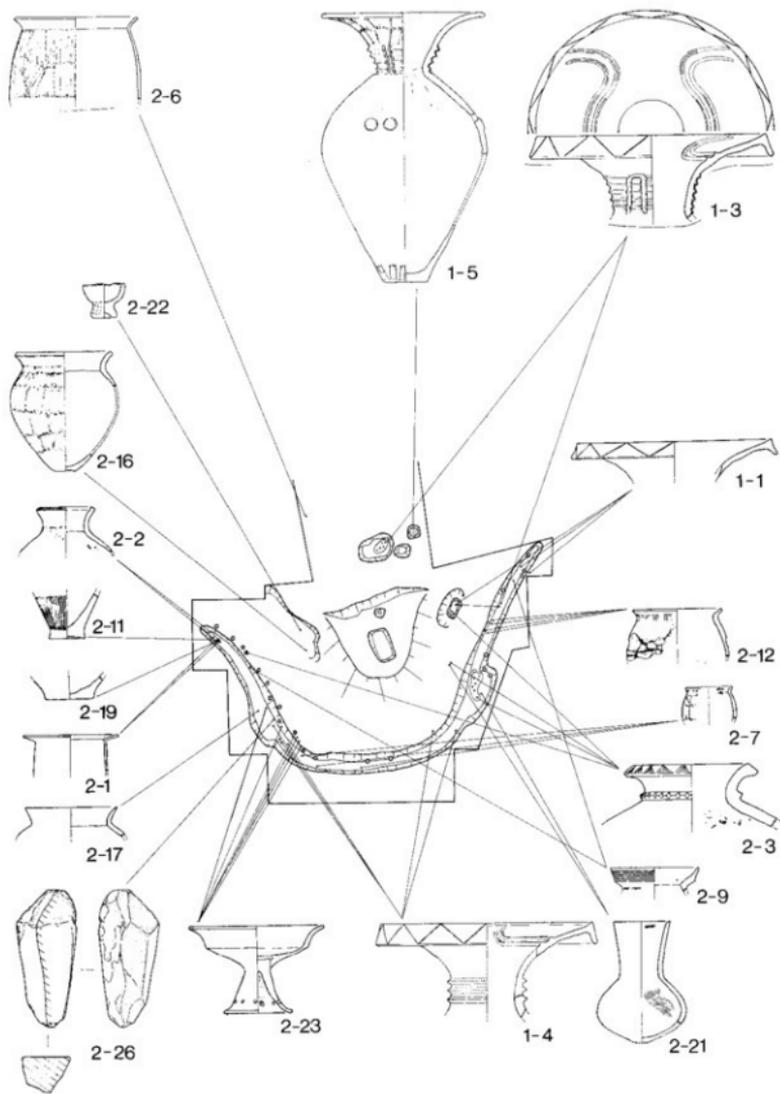
このうち、SX08出土の大形盃形土器は頸部と胴部上半に隔出文をもち、出土状態を考えるとほぼ壺棺として間違ひなかろう。また、SX06は墓坑の底近くに木棺と思われる痕跡が残り、土坑上面からやはり隔出文で飾られた大形盃形土器が供献された状態で検出されている。墓坑上に供献されていたと考えられるのは他にSX05と1-1があり、SX03でも弥生式土器の破片が遺構上面で検出されている。

6基の竈跡をとりまく溝(SX10)は舌状尾根の底の方に穿たれている。その形状はU字形を呈す。一般に弥生時代や古墳時代の墓域群は溝によって区画されることが多いが、その場合、溝は丘陵の高い方に穿たれるのが普通である。前立山遺跡の場合はこれまであまり類例のみられないものである。

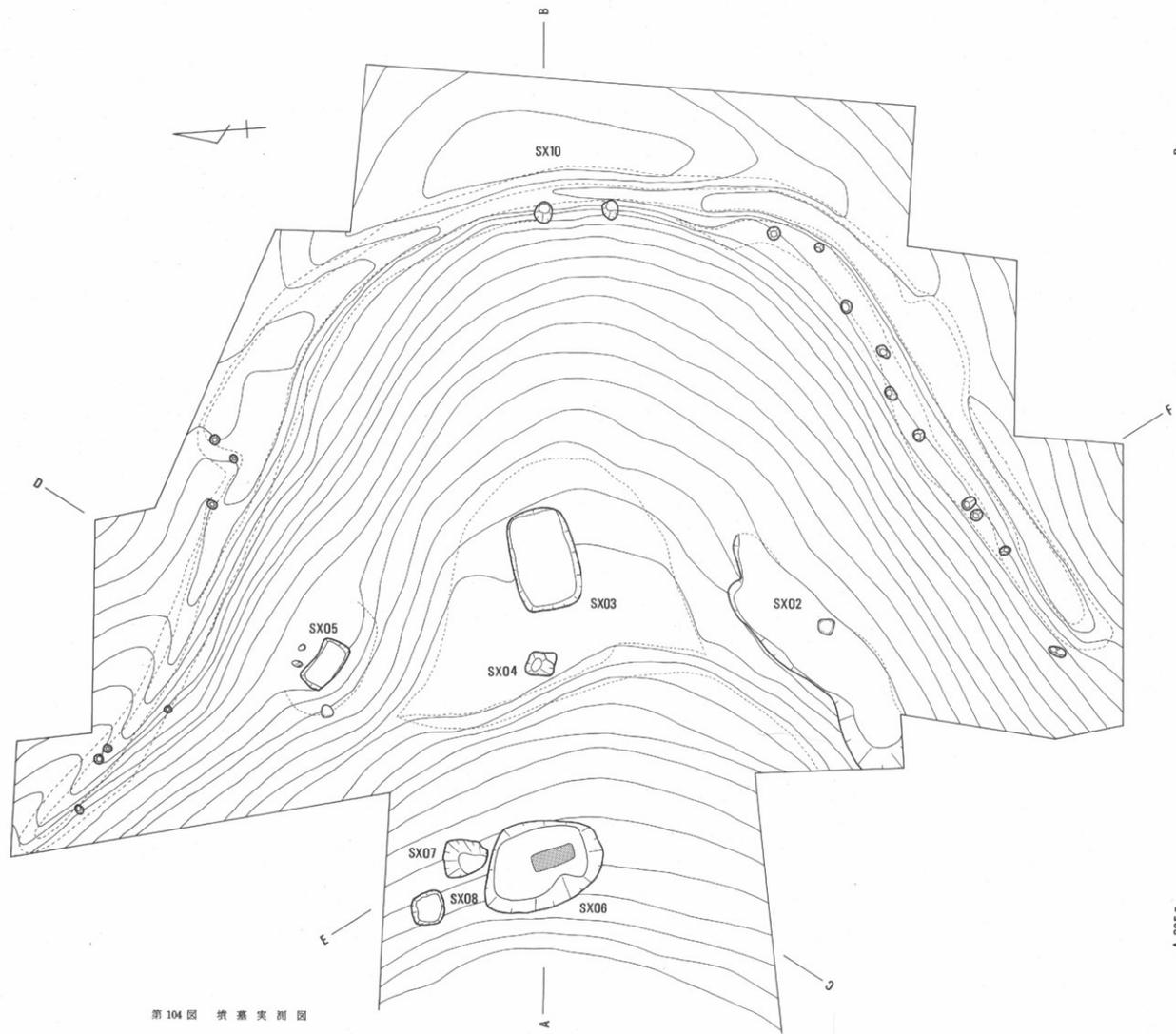
溝やその周辺の土器は、今一つ興味深い出土状態を示している。例えば1-1の大形盃形土器はSX05と溝(SX10)出土のものと同一体のものであり、2-3もSX05、及び墳墓の斜面、及び溝の中でもはるかに離れた場所にも同一体の破片が散在している。1-4の大型盃形土器も溝の中でかなりの距離をもって散在していた。この様な遺物の出土状態は、墓坑上に供献された土器が溝の中に破片となって流れ込んだものもあったかも知れないが、それよりも、この墓域内の土器は故意に破砕された後、主として溝(SX10)内にばらまかれたと考えるほうがより理解しやすいであろう。こうした考え方が許されるとするならば、この墓域内で葬送に關する祭祀が執り行われたことが考えられるのである。とすれば、SX02は、こうした意味に於いて重要な役割を有していた祭壇状遺構として注目されよう。SX02出土の環形の小形手捏土器(2-22)や、実用的な甕形土器(2-16)、使用痕があまりみられなかった石皿様自然石等は、ここに祭祀を司る人が、短期間居住したこともあったと想像出来る。

さて、この墳墓出土の遺物の特徴の一つは1-1, 1-3, 1-4, 1-5等の隔出文を施し、丹で染め、美しく飾られた大形盃形土器であろう。これらは、今のところ山陰地方にはほとんど見出せず、それは、山口県玖珂町柳井田遺跡、あるいはニツ池遺跡、坂手沖尻遺跡等、山口県でも周防を中心とする地方に酷似の資料を多く見ることが出来る。このことは、墳墓のみならず、前立山遺跡の性格を考えるうえで極めて重要なことのように思われる。この飾られた盃形土器は弥生時代中期でも新しい時期にその年代が位置づけられている。また、2-9の様に、山陰地方にもみられる弥生時代後期後半の襟相をみると、かなりの時期差を認めざるを得ない。こうした土器の時期差や、あるいは器種のバラエティは、周溝の内側の6基の墓坑の穿たれた時期や性格と対応することも考えられるし、また、墳墓という特殊性を重くみれば、とりわけ美しく飾られた大形盃形土器は前時代からの伝統を強く残しているとも受け取れる。

そこで、この墳墓の眼下にある集落(I, II区)出土の土器の時期をみると、弥生時代後期後葉から古墳時代前半期にかけてのものであることが、墳墓との関係に於いて問題として浮かび上がってくる。23軒の住居跡の覆土、及びその他の土坑、あるいは表採品の中にも、第III区の墳墓がこの集落を営んだ人々の墓域であったことは疑う余地のないにもかかわらず、墳墓でみられたような弥生時代中期末の襟相を示す土器は一片すら見出せなかった。両者の土器が時代的に重複するのは弥生時代後期後半である。付近の地形からして、この前立山遺跡の他にこのIII区の墳墓を墓域とした集落が別に存在するとは考えられない。墓制の伝統は意外に強いものがあつたかも知れない。(内田律雄)

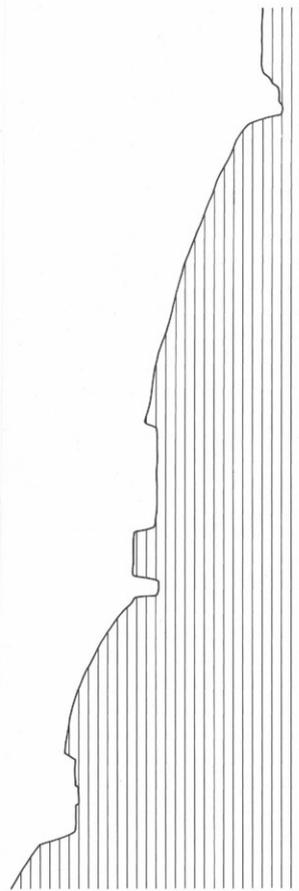


第103圖 墳墓出土土器關係圖

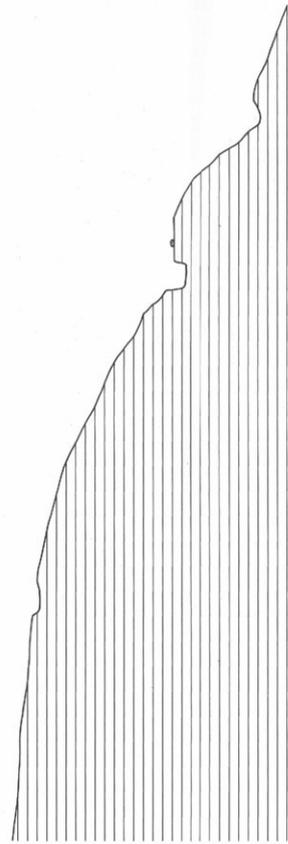


第104图 拱墓实测图

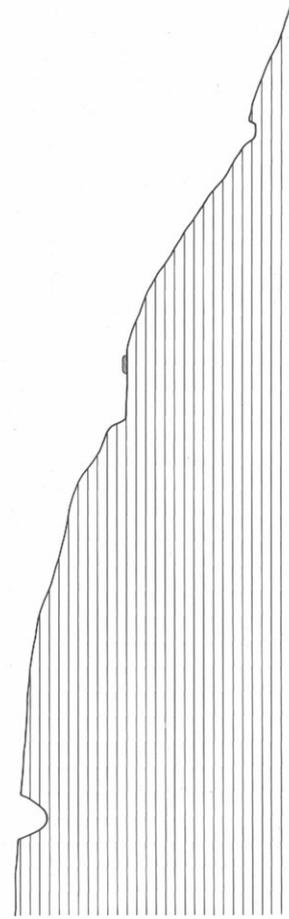
A 325.5



C 325.5



E 323.5



0 10M

第Ⅲ調査区の石器 (第105図106図, 図版61)

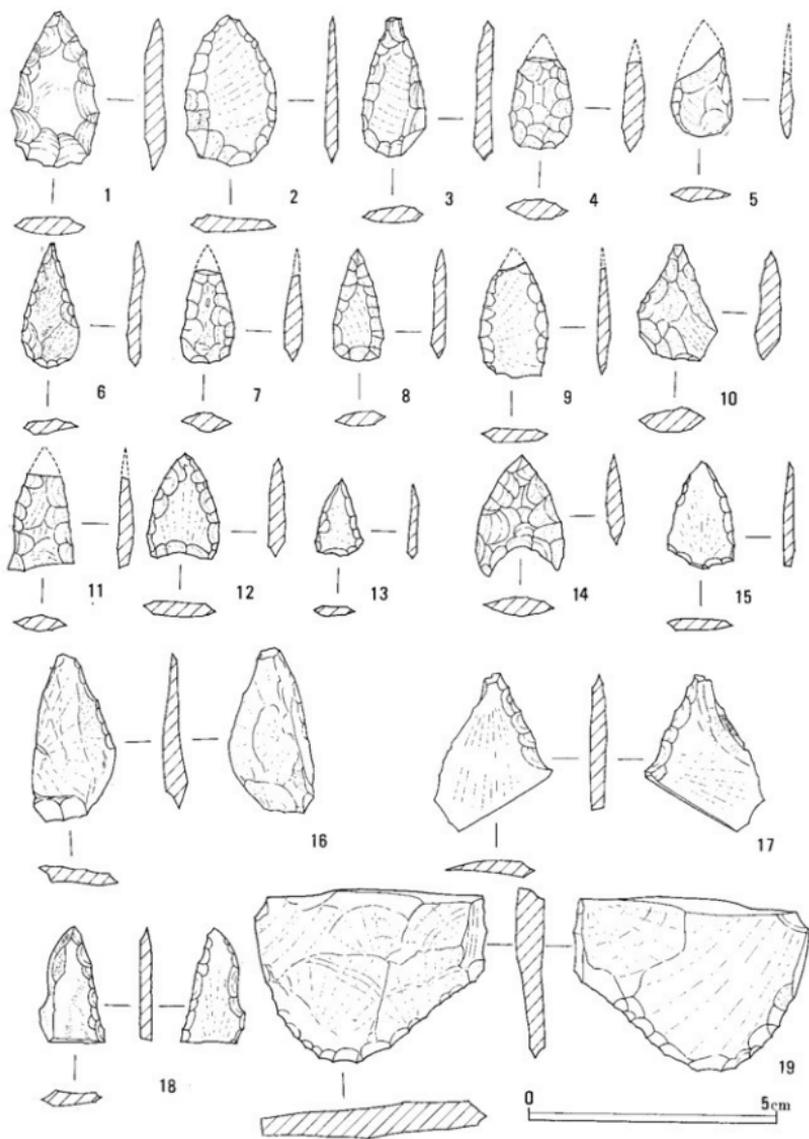
第105図, 106図, 及び図版80は第Ⅲ調査区出土の石器である。第Ⅲ調査区にはS K14の土坑, S X 01, S X 09, S X 02~10の墳墓, S 123の住居跡等の遺構が存在するが, この調査区のほぼ全体にわたり, 原石, チップ, 未成品, 成品が発見された。原石は, S X10出土の砥石 (第102図26)を除き, 全て, いわゆるサヌカイトと称されるものがある。そのサイズは概ね奉大前後のものである。色調は灰黒色で堅緻である。扁平に剥離されていて, 爪で弾いたり, 互いに軽くだいたりすると高い金属音を発する。このサヌカイトの原石は, 前立山遺跡の南東約20kmにある, 島根, 広島, 山口三県の境にある冠山にその産地を求められよう。原石, チップ, 未成品, 成品が一緒に出土することは, この第Ⅲ調査区で原石を加工していたことを示している。特に, この調査区の西側に検出されたS X 01は, 特に多くチップの発見されたところである (第93図)。このS X 01は石器の工房跡の可能性が考えられる。

発見された石器は, 完成品と明らかに判るものは全て打製石鏃で合計16本ある。最大器長のものは第105図1で3.1cmを測る。器幅は約2.2cmで厚さ0.4cmである。最小のものは第105図13で器長1.6cm, 器幅1.0cm, 厚さ0.17cmを測る。石鏃16本のうち折損品は7本あり, 先端部を欠失するものが多い。基部の形状で形式分類すると, 凸基型と凹基型がある。凸基型は第105図1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 13, 15, 第106図3の合計12本ある。凹基型は第105図11, 14の2本である。第105図9, 11は基部が欠失して不明である。いずれも, 薄い扁平なサヌカイトの薄片を用い, 石器の刃辺のみを加工して成結に仕上げているものが多く, 全面に加工を加えているものは第105図4, 14のみである。凸基型石鏃は, ほとんどが無茎のもので基部が半円形に外彎する。第105図15は有茎のものであった可能性がある。凹基型は僅かに内彎するもの (第105図12) と深く内彎するもの (第105図14) があり, 後者の方が成形は丁寧である。石鏃の器幅と器長との比率は, 大別して1:1.3~1:1.6のグループと, 1:2.0以上のものがある。1:1.13のもの (第105図2, 4), 1:1.4のもの (第105図1, 5, 9, 14), 1:1.5のもの (第105図10, 12), 1:1.6のもの (第105図3, 13, 15) は前者のグループに属し, 器幅が広い。1:2.0のもの (第105図11), 1:2.4のもの (第106図3), 1:2.2のもの (第106図6, 7), 1:2.6 (第105図8) は後者に属し, 器長が長く縦長の二等辺三角形を呈す。

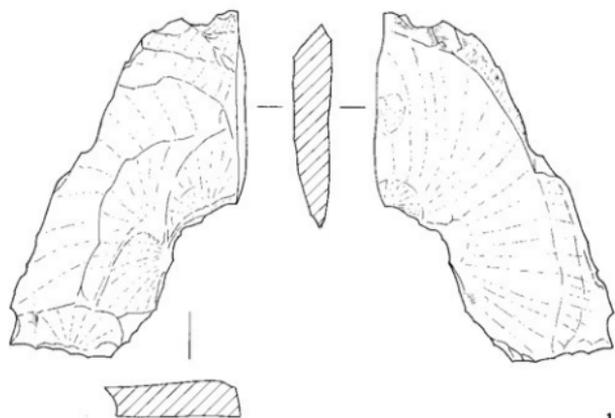
第105図16, 17, 18は石鏃の未成品と考えられる。切片の両側に加工が施されつつあるところのものぞ大割離面を多く残している。第105図19も石鏃の未成品と思われるが, やや大きな切片である。第106図はサヌカイトの原石で扁平である。

さて, この前立山遺跡出土の石器は, サヌカイト製のものは石鏃のみである。その石鏃は, 原石, チップとともに集落 (第I・II調査区) からみ出しているが極めて少量である。それに比して第Ⅲ区出土のそれは発掘面積が狭いにもかかわらず集落よりも数量的に多い。この第Ⅲ調査区では, 墳墓のみならず, 主としてサヌカイトを原石とした石鏃作りが行われていたこともあったらしい。また, 石鏃は第105図14の様に丁寧な作りのものもあるが, ほとんどは大割離面を多く残した比較的粗雑な作りのものである。第Ⅲ調査区が, 集落を営むのにあまり適さない立地をしていることや, 墳墓という神聖な場所があること, S X 01の存在や, 石鏃, その技法, あるいは出土状態等を考えあわせると, そこには, サヌカイト製の石鏃をこの第Ⅲ調査区で作らねばならなくなった緊急性が浮び上がってくる。

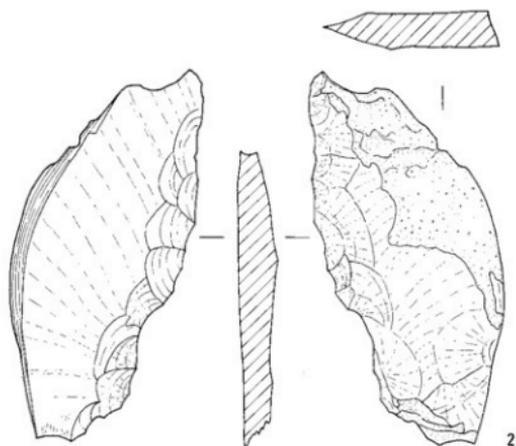
以上のサヌカイト製石鏃は, はっきりと年代を示すものがない。ここでは, この遺跡の土器の様相が示す時期である弥生時代中期末から, 古墳時代前半期の中でも, 弥生時代に入るものとしておくことにとどめたい。(内口律雄)



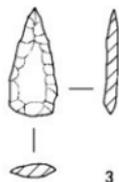
第105图 第三調査区の石器(1)



1



2



3



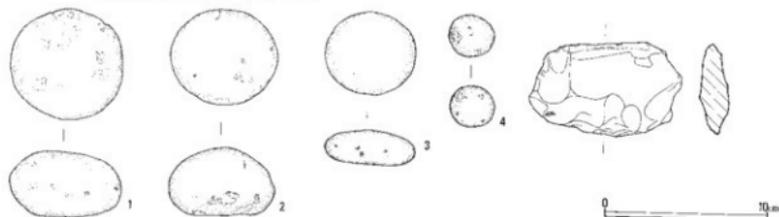
第106図 第三調査区の石器(2)

4 河内遺跡

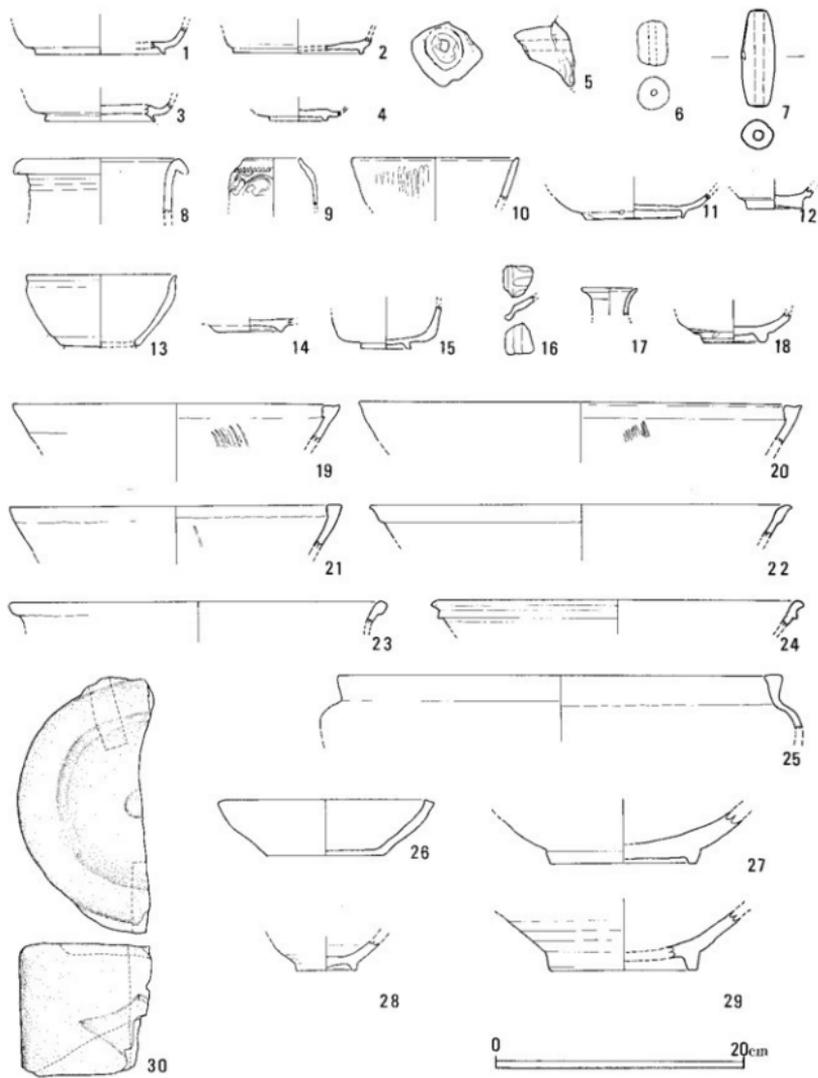
河内遺跡は、前立山遺跡のちょうど東側約200mに位置する。それは高津川が河内川に合流する沖場の南約4kmのところを東西約30m、南北約500mのかなり広範囲にわたる遺跡で、発掘前は水田であった。

遺構は調査区内全域にわたり精査したが検出することはできなかった。土層は、約15～20cmの耕作土を除くと、暗茶褐色土の遺物包含層が約20cmありその下は人頭土、あるいはそれ以上の河原石の層である。遺物は主に中世陶磁器を中心として、それに若干の須恵器、土師器、近世陶磁器、石器が混在して発見された。須恵器は破片が4点あり、いずれも碗形と考えられる。(1-1~4)、土師器は注口の一部である。(5)土師は円柱状のもの(6)と菱形のもの(6)があり両方とも断面は円形である。中国製は青磁、白磁、青白磁、染付がある。第127図8は青白磁の蓋の口縁で約4.6cmあり腹部に唐草文、背部に小さな蓮弁がめぐっている。口唇部には釉がかかっていない。10は青磁の碗で復原した口径は約13.6cmある。腹部に蓮弁文がめぐっている。11は白磁の皿である。高台の径は8cmを測る。18は天目碗で、高台は径が約5cmあり、削り出されている。この他に染付片が多数出土した。(図版)。このうち8,9は11~12世紀のものであり、10,11,及び他の青磁片、白磁片、染付片はいずれも15~16世紀ごろである。13,14,15,16,12の産地は美濃地方であろう。13は天目茶碗で口縁は約12cmある。高台付を復原すれば、器高は約7cmほどになる。14は緑色の釉が厚くかかった皿の底部である。高台の径は5.2cm測る。15の碗は、内部は黒釉で、外部を黄褐色の地に列点を施している。16は口縁がくの字に外反する小皿の破片で黄釉がかかる。口縁部に鉄が施される。胎土は白色で柔らかい。12は天目茶碗である。胎土は白色で柔らかい。高台径は約4.5cmある。17は蓋の11緑で摺痕は薄く、備前焼と思われる。19,20,2は搨鉢である。19は復原した口径が約2.6cmある。口縁部は内側に貼りつけ、上部に浅い凹みがはしる。青灰色の胎土で焼成は良好。内部に7~8本単位のスジが観察される。20は口径約35.5cmある。青灰色を呈し焼成は良好。口縁部に浅い凹みがはしり内部は貼りつけている。内部に7本のスジがある。21も搨鉢で口径は約26.6cmある。淡黄褐色を呈し瓦質である。22は口径約34cmで、青灰色を呈し焼成は良好。口縁は肥厚しながら外反する。23は口径約30cmで瓦質である。24は口径約30cmある。11緑外側に一条の凸帯が施されている。25は瓦質の短頸壺で、26は皿で口径は約17cmの平底である。27,28,29は近世以後の遺、あるいは碗の底部である。30は石製の茶臼の上白で半壊している。下口と接する面は中央部で著しく磨り減り、あらい溝が観察される。側面には菱形の陽影が二ヶ所みられる。

石器1は径6.9cm、厚さ4cm。2は5.9cm×6.6cm、厚さ4.2cmの円形で一方が平頭をなす。3は5.1cm×5.5cm、厚さ2.1cmの扁平な円形を呈す。4はストーンボールである。5は9.3cm×5.5cm、厚さ2.7cmの打製石斧である。(内田律雄)



第107図 河内遺跡出土遺物実測図(1)



第108图 河内遗址出土器物实例图(2)

5 九郎原 I 遺跡

九郎原 I 遺跡は六日市町蔵木九郎原に所在する。遺跡は六日市町から同町田野原、深谷大橋にぬける旧高津川の形成した谷あい立地している。三宮神社の裏側にあたる付近は急峻な山鬼が連なり、本谷と直交する形で谷川が流れ込んで小さな扇状地を形成している。現在は水田である。調査は約 2,500㎡ にわたって実施した。扇位の状況は基本的には上から水田耕作土、客土（以前に区画整理が行なわれている）黒ボク、黄褐色礫まじり土となっている。

検出された遺構は近世掘立柱建物 1 棟、近世墓 9 基であった。出土遺物は縄文式土器、石器、弥生式土器、土師器、煙管、古銭、鉄釘、人骨等であった。以下順を追って記述するが、近世墓出土人骨については高槻医科大学中村和成教授にその所見をいただいた。（卜部吉博）



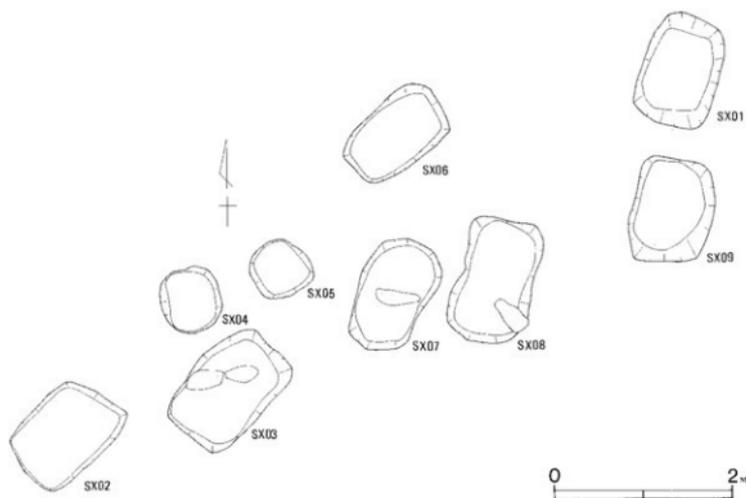
第109図 九郎原 I 遺跡発掘調査区

近世墓 (第110図)

調査区の中央北側に検出した。墓塚は全部で9基確認した。この内、人骨の遺存するものはS X01～03, 06～09の7基であった。墓塚の掘り込み面は客土の下面であった。このことから、区画整理が行なわれた時に、忘れさられた墓ということができよう。

墓塚の上面には川原石の屑であるものも存在し、墓石としての機能を持つものであったと考えられる。また墓塚は比較的整然と配置されており、切りあいもなかったことから、三世代の墓であったと考えられる。

次に遺体の埋葬について述べておきたい。遺体は確認されたものはすべて鉄釘が出土しており、箱形の木棺に埋葬されていたものと考えられる。遺体は頭を北方向に置いて足をおろす屈葬である。ここで特に注目すべきことは、顔の向きがすべて西側を向き、体の左側面が上面に向いていたという注目すべき事実である。こうしたあり方は「西方浄土」に関連する葬送儀礼なのか、あるいはこの地域における普遍的なあり方であるのか今後研究の余地があると思われる。



第110図 九郎原I遺跡近世墓実測

墓域からの出土遺物は、鉄釘の他、冥土銭と考えられる古銭（銘の為、銘体不明）、煙管が確認された。（宮本徳昭）

金属製品（第111図）

鍛造製鉄釘を主体とし、銅銭・煙管がある。以下、そのいずれもが近世墓に推定されるものに、付随するものである為に、遺物別に説明していく。

SX01では、銅銭5枚と鉄釘5本が検出された。このうち、銅銭は錆化が激しい為に、その名称は不明である。5枚は表裏の別なく重なり、検出した時の下側には、わらが錆化により、形跡を残していた。また鉄釘は、いずれも、釘頭の折り曲げ部以下に、頭と平行する木目痕が付着していた。頭部上面は、楕円形のほぼ平頭を呈して、どちらか一方に折り曲げている。胴部表面は、正方形のものと、長方形のものがある。1点、胴部が中央より、屈曲しているが、最初からか、木棺製作時のものか不明である。

SX02では、煙管1本が竹が付着したまま検出され、煙導部と吹口間には、脂も検出され、物の長さも21.3cmと確認された。煙導部と吹口部には、明瞭なるつき目が確認された。

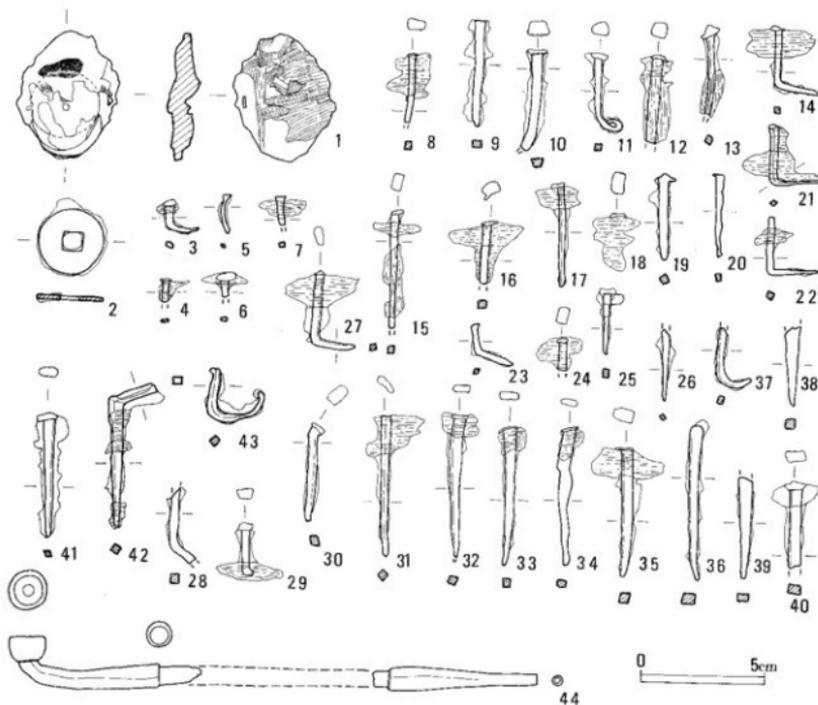
煙導部と吹口部には、明瞭なるつき目が確認された。雁首の火皿は、あまり開いてなく、首も短かく鈍角にカーブする。

SX03では、鉄釘が、数本検出された。釘頭は、いずれも一方に折り曲げ、長方形上面を呈し、ほぼ平頭である。釘に付着する木目痕は、釘頭以下にみられ、一方方向のものと二方向のものがある。二方向のものは、釘頭部は横方向で、胴部は縦方向となっているようである。従って横方向の厚さからして、板材厚さは、1cm前後と推定される。また、胴部がほぼ中央よりやや下方で、直角に屈曲しているもの、やや鈍角のもの、先端のみ著しく湾曲したものが検出された。前者、後者について

は、最初からのものとも推定可能であるが、不明である。後者は、明らかに木棺製作時に用いたものである。胴身部は、方形ないし、やや方形に近い長方形を呈している。

S X07からも、鉄釘が検出され、鉄釘本であった。他の墓塚のものよりも、残存率が良く、ほぼ完全なものである。釘頭は一方に折り曲げ、やや長めの長方形を呈した平頭である。木目痕は、一方のもののみ確認された。胴身部は、S X03同様に屈曲したものが少数みられたが、最初からのものか、木棺製作時のものか、判断できる資料とはならなかった。断面は、方形のものと同長方形のものがある。

S X08も鉄釘が検出され、若干本あった。他のものと同一であるが、胴身部断面、方形のものが多い。また、胴身部のやや上方で屈曲したものがあるが、これについても不明である。(宮本徳昭)



第111図 九郎原I遺物 (S X01-1~7, 02-44, 03-8~26, 07-27~40, 08-41~43)

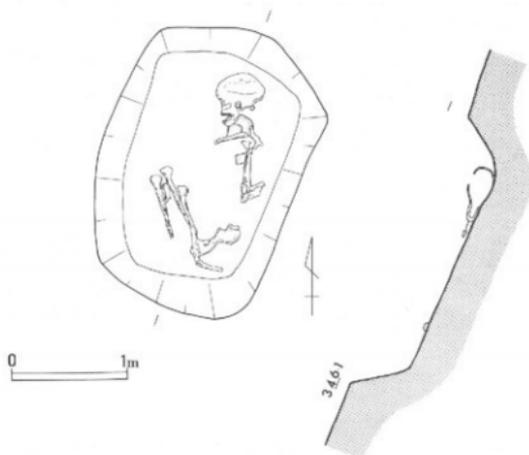
近世墓出土人骨

九郎原I遺跡において、9基の近世のものと推定される、墓塚を検出したが、その内S X01~03, 06~09より、人骨の出土をみた。その為、全部を検出した後に、鹿足郡六日市町内藤医師に依頼し、現場での簡単な同定及び状況を把握した。

実測後、取上げを行ったが、不備な点が多く、ほぼ完全な形を呈していた骨も、くずれてしまった

近世墓出土人骨観察表

	脊柱	胸部	頭蓋冠	顔面骨	上肢骨	下肢骨	備考
SX01		肋骨	頭頂骨(一部) 側頭骨(岩様部、椎体、その他部) 前頭骨(一部) 後頭骨 (一部)側頭骨と付随	上頰骨 (左・一部) ◇(右) 下顎骨(左右) 下顎体はほぼ完全 下顎枝(一部) 大白歯(2本) 頰骨弓 顎骨(一部)	上腕骨 (骨体部、その他部)	寛骨(一部) 大腿骨 (2骨体、体上部) 脛骨(2、骨頭) 腓骨 (2骨片、うち1について湾曲)	同定不可能な長管状骨片及び小骨片多数。 頭蓋骨・下肢骨は検出時形状の判断は可能であったが、取上げ不備等により、計測可能にはいならなかった。 釘、銅銭出土
SX02				頰骨(一部)	上腕骨 (左・下部) 橈骨(2) (骨体部・一部) 尺骨 (1、下部部) 手根骨 (骨名不明) 手の指骨(2)	寛骨(一部) 大腿骨(2) 脛骨(2)	同定不可能な長管状骨片及び小骨片多数。 下肢骨は検出時は完全に近いものであったが、計測可能にはいならなかった。
SX03			頭頂骨 側頭骨 (左右一部) 前頭骨	下顎骨 (骨体部) 大白歯(2)	大腿骨(2、うち1不確定) 脛骨? (1、骨頭含む) 腓骨(1)		同定不可能な長管状骨片及び小骨片多数。 下肢骨は検出時、形状の判断可能であったが、計測可能にはいならなかった。 釘多数出土。
SX06				大白歯 (完全1、不完全3)			同定不可能な小骨片少数。 頭蓋骨の部分のみ検出。
SX07			側頭骨 (右、臑部) その他、頭蓋冠(一部)	下顎骨片? 頰骨? 大白歯(2) 小白歯(1)		寛骨(一部) 大腿骨(一部) 足根骨 (一部、骨名不明)	同定不可能な長管状骨片及び小骨片多数。 他の骨の状態があまりよく、足根骨はかなり良好であった。 釘多数出土。
SX08			頭頂骨(一部) 側頭骨(一部) 後頭骨(一部) その他頭蓋冠(一部)	下顎骨(左・? 右骨体部) 大白歯(1) 頰骨弓	上腕骨 (左右一部)	寛骨(一部) 大腿骨(左・右) 脛骨(左・右) 腓骨 足根骨 (1、骨名不明) 足の指骨(1、基節骨?1、末節骨)	同定不可能な小骨片多数。 下肢骨は状態のよいものだが、計測可能にはいならなかった。 釘多数出土。
SX09	椎骨(1)	肋骨 (7、一部)	頭頂骨を含む頭蓋冠 後頭骨(一部)	下顎骨 (右・一部)	頭骨(一部) 肩甲骨(一部) 長管骨(一部、骨名不明) 尺骨または橈骨 上腕骨 (骨名不明・骨頭)	寛骨 大腿骨(左・右) 脛骨(2、一部) 腓骨(2、一部)	同定不可能な長管状骨片及び小骨片多数。 かなり骨の状態は良いものであったが、計測にまではいならなかった。



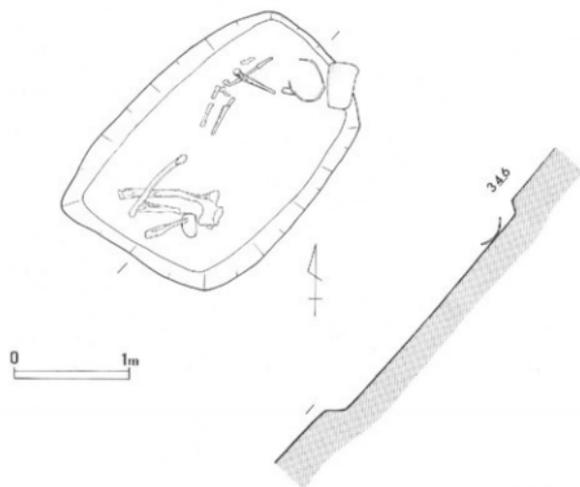
第112図 SX01 実測図

異なる点もあることを、おことわりしたい。

SX01 顔面西向き，右側面を下にして，下肢を腹部に接したように，屈位させて，木棺に入れて，埋葬している。銅銭5枚が後頭骨より少し離れ，わらの上に乗った状態で検出された。釘は，下肢の周囲より検出。

SX02 顔面西向きと推定され，右側を下にし，上肢は交叉させ，下肢は脊椎とはほぼ直角くらいにし，下腿を大腿に接するようになっている。煙管を手握らせて，口元にあてている状態で埋葬している。

SX03 顔面西向き，右側面を下向きと推定され，下肢はやや脊椎との角度を鈍角にし



第113図 SX02 実測図

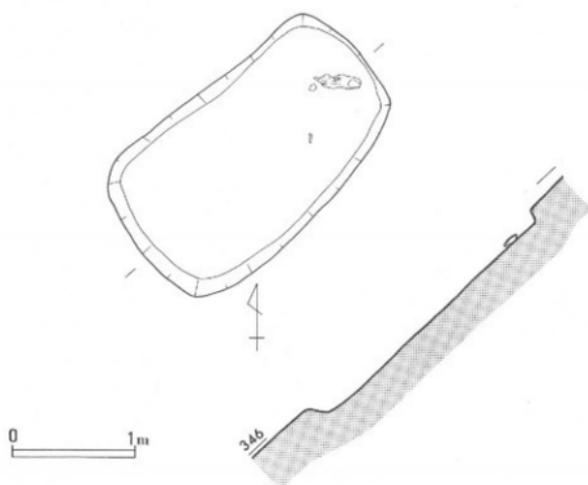
事は残念である。

その後，島根医科大学において，同大学解剖学講座教授中村和成氏，同解剖学講座技官堀江幹氏立会いのもと，骨名を主とした同定を御願ひし，島根県教育委員会文化課主事ト部吉博，同補助調査員宮本徳昭が筆記した。

出土人骨の部位的同定

島根県において，出土人骨に関する人類学的報告書は，今のところ『^(註2) 十王免横穴群出土人骨について』などである。

出土人骨については，それなりの表現があると考え，ここでは(1)を参考とし表にした。尚，表は(1)を基礎とし，現場での状況を加味して作成した。従って，(1)と若干



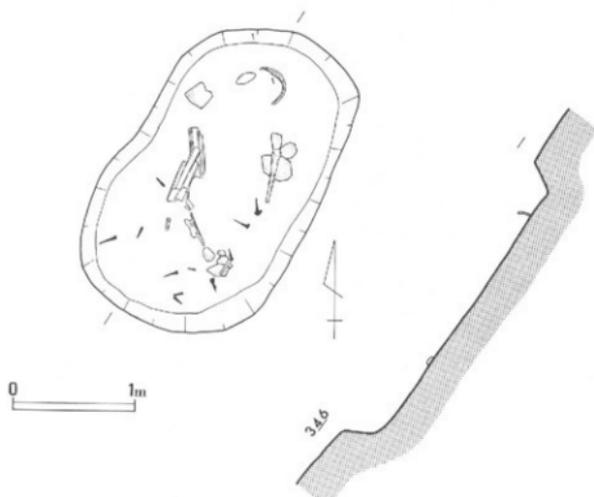
第114図 SX06 実測図

している。骨格周囲全体より釘が検出され、木棺として誤りない。

SX08 顔面西向き，右側面下向きと推定され，上肢を体前面（西）にし，下肢は膝蓋骨付近は不揃いで，脊椎と鈍角をなし，下腿は生体時にかかる大腿と接していたと考えられる状態である。釘が骨格周囲全体から検出され，木棺として誤りない。

SX09 顔面西向き，右側面下向き，下腿は腹部に接する状態で，下腿もかなり強く大腿に接している。

各人骨に共通している事は，顔面西向き，右側面下向き，下肢屈曲という事である。

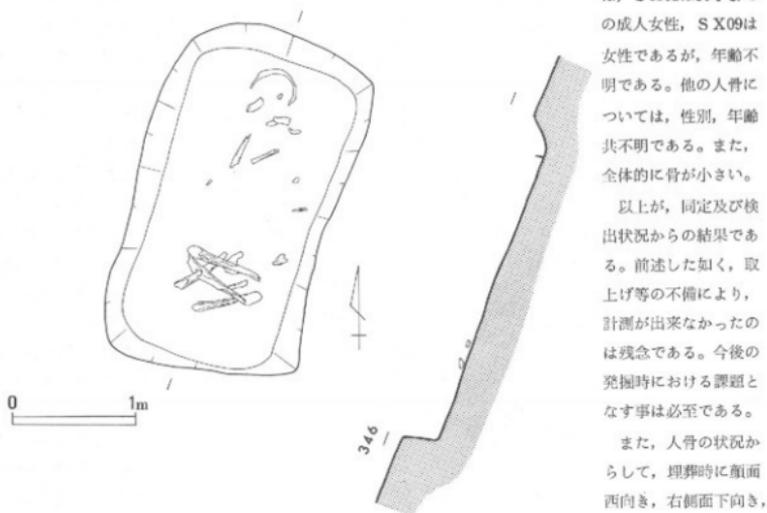


第115図 SX07 実測図

特に右下肢は，大腿をやや脊柱と直線的であり，下腿は共に余裕をもたせて，屈位している。釘が骨格周囲全体より出土しており，木棺と推定して誤りない。

SX06 頭蓋骨の部分の一部しか検出されなかったが，他のものから推して顔面西向き，右側面下向き，下肢屈位としてよからう。

SX07 顔面西向き，右側面下向き，上腕骨方向と脊椎方向が同方向を向き，下肢を復部に接し，下腿を大腿に完全に屈曲させ，足根骨は翼骨に接



第116図 SX08 実測図

のであるが、中世の方形土塚の形式を踏したものとしか推定できないのが現状である。

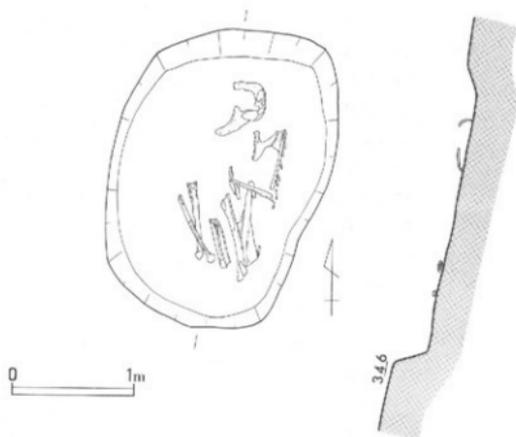
尚、六日市町付近では、一般に、200年位前の土葬の場合、座棺の場合も、顔面西向きで、副葬品も煙管・寛永通宝であったようである。(注3)

(宮本徳昭)

注(1) 宮本徳昭が筆記したものを、中村和成教授に確認していただき、作成したものを、「九郎原I遺跡出土人骨に関する人類学的鑑定の概報」として、文章に残した。

注(2) 島根県医師会、「島根医学別冊第6巻第1号」(昭和54年7月)

注(3) 鹿足群六日市町蔵木、坂田トミ子氏に依る。



第117図 SX09 実測図

各人骨の性別、年齢は、SX01は30才までの成人女性、SX09は女性であるが、年齢不明である。他の人骨については、性別、年齢共不明である。また、全体的に骨が小さい。

以上が、同定及び検出状況からの結果である。前述した如く、取上げ等の不備により、計測が出来なかったのは残念である。今後の発掘時における課題となす事は必至である。

また、人骨の状況からして、埋葬時に顔面西向き、右側面下向き、屈位がほぼ共通したも

遺構に伴わない遺物

調査区の中央部から東部にかけて主に出土した。耕土、客土、黒ボクから出土していて層位的にはいま一つ明確性を欠く。

縄文式土器（第118図，第119図1～17）

早期（第118図1～4）押型文土器が4点出土している。第1図～3は山形の押型文，第4図は横溝押型文である。1，2は内外面ともに押型文を施しており，内面の口縁部には縦に沈線が施されている。押型文の原体はいずれも細かく整っている。

後期（第118図5～11）深鉢，浅鉢が存在する。5は口縁部外面に左下りの斜線文を施す。6は縄文式の土器片である。8は内外面ともに横方向の高さが認められる。7，9～11は沈線を施す土器である。10は波状口縁をなす。

晩期（第118図12～23，第118図1～17）浅鉢と深鉢が存在する。この遺跡の主流を占める土器群である。第118図14，15は精製土器で浅鉢をなす。14は15に比して深くて，口縁内面には二条の沈線が廻る。

第118図16～23，第119図1～8，11，15～17は刻目凸帯沈線文土器である。器形は深鉢形をとりゆるく外反する。口縁部から胴上半部外面は丁寧に研磨され，縦，横，斜めに幾何学的なやや反転して内湾する。沈線を施し，胴下半から底部外面は荒い削りが施されている。内面と中凹みする底の内側はよく研磨されている。11は底部外面に縦走する凸帯を貼付して口縁端部の処理は，刻目を施す第118図16～19，棒状工具によって押圧する第118図20，21平縁をなす第119図22～24がある。胎土には例外は砂粒と雲母を含み，色調の暗茶褐色を呈するものが多い。焼成は概ね良好で，器厚は0.3cm内外に納まるものが多い。山陽の中山B式に類似する。

第2図9，10は粗製の刻目凸帯文土器である。ともに深鉢形を呈す。9の刻目は比較的すどく刻まれているが10のそれは刻目というより，指頭圧による押し付けといった方が正確であろう。

弥生式土器（第119図18～28）

壺形土器と甕形土器が出土している。第2図18は復原口径18.3cmを計る壺形土器である。段が一段認められる。口縁部は短く「く」字に外反し，頭部と胴部の境あたりの肩部は頭部から「ハ」字に広がり，残存復原最大径は35cmを計る。調整は口唇部外面は横ナデ，その他の外面は横方向に研磨を施す。内面は口縁部が横方向の研磨，頸部以下胴部には指頭圧痕が残る。色調は赤褐色で胎土には砂粒と雲母を含んでいる。焼成は良好である。第119図19～22はヘラ横沈線を施す土器である。19と22は「L」字におれ曲る口縁部には刻目が施されている。21は黄灰色を呈し，胎土は良好である。底部（第119図25～28）は比較的鋭角に立ち上がる土器が多く，28を除いて外面にはハケ目調整を施す。

土師器（第120図3，4）「く」字口縁を有する甕形土器である。4は復原口径22cmを計る。口縁から頸部にかけての内面と，頸部外面にはハケ目が認められる。

須恵器（5，6）

いずれも，胴部破片である。平行線を外面に残している。

土師質土器（第120図1，2，7～9）

1，2は筒形の本体に籠状の凸帯を貼付する土器である。1は口径19.2cm，2はD径25cmを計る。凸帯の部分は指頭圧痕と横ナデ，その下部にはハケ目調整を施す。7～9は皿である。いずれも，回転糸切りを施す。7と8は薄手で，黄灰色を呈し，焼成は良好である。近世的な土器である。

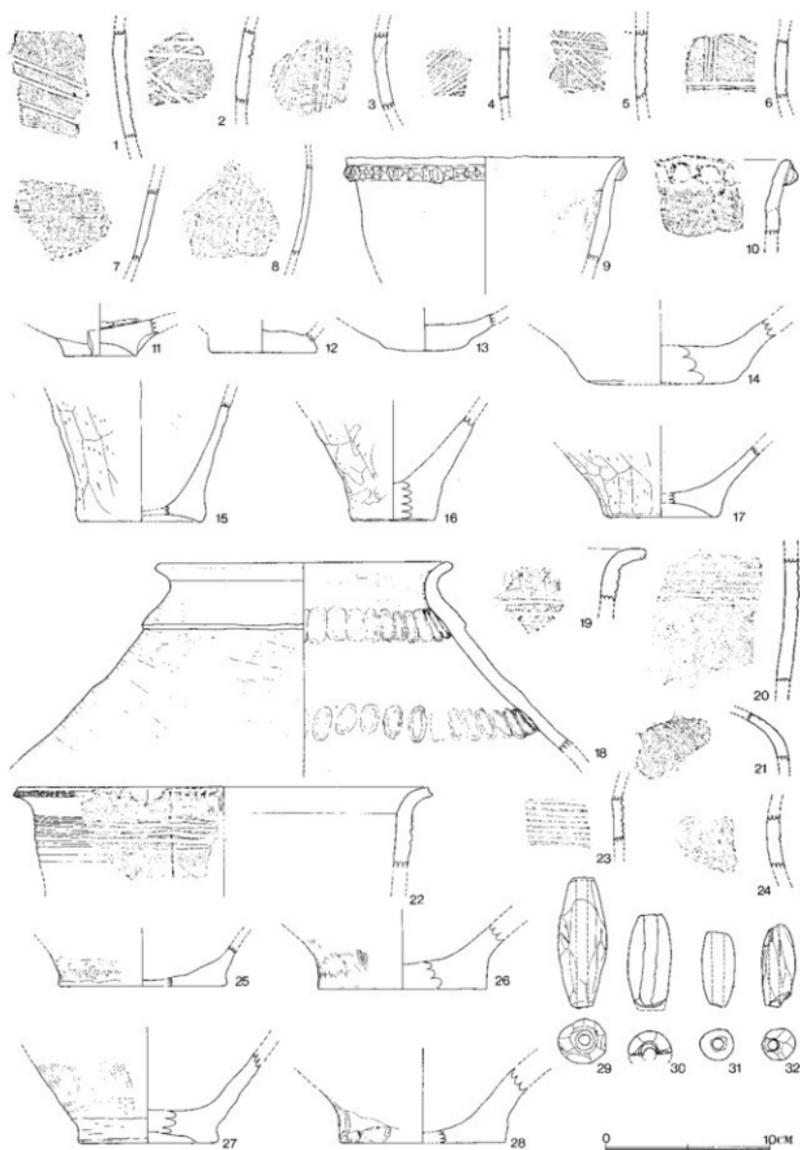
土壺（第120図29～32）

4点出土している。最も大きい29は長さ8cm，最大径3cmで最も小さい31は長さ4.7cm，最大径は2cmである。29は中央部に最大径があって両端ですぼむ形をとり，形態的にも他のものと区別される。

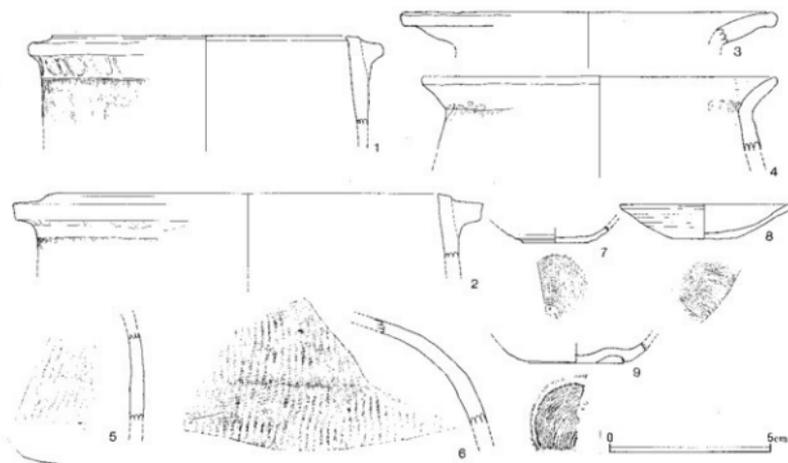
（卜部吉博）



第 118 回 九郎原 I 遺跡・通橋に伴わない遺物 (1)



第 119 図 九郎原 I 遺跡・遺構に伴わない遺物 (2)



第120図 九郎原I遺跡・遺構に伴わない遺物(3)

石器 九郎原I遺跡出土の石器は石鏃、石錘、スクレイパー、石斧、磨石、敲石、磨製石剣、石剣状石製品が検出された。出土層位は土器と同様で層かな状況とはいえない。

石鏃(第121図1~10)

全部で10個体検出した。1・2・4は黒曜石で、他はサスカイトである。2は石材の色調が乳白色であることから姫島産の黒曜石である可能性が高い。1~6は円錐式三角形鏃である。1は深い抉りを入れ古式の様相を呈す。7・9・10は平基式三角形鏃である。

石斧(第122図11~14)

県下で初めて確認された器種である。基部は機能部に比して大きく調整は粗い。機能部は表裏両面から押圧剝離を行なっている。いずれもサスカイト製である。

スクレイパー(第121図15~26第2図1~2)

第1図15~26、第2図1はサスカイト製、第2図2は変成岩製である。いずれも、顕著な加工痕の認められない剥片を利用しているが、一部に使用痕と考えられる痕跡を残している。

石斧(第121図3~6)

4~6は縦長の石斧である。3は縦、横の比率があまり変わらず、小型であることから、あるいは楕円状のものの可能性がある。5はバチ形を呈す。

磨石、敲石(第122図7~9、前3図1、2)

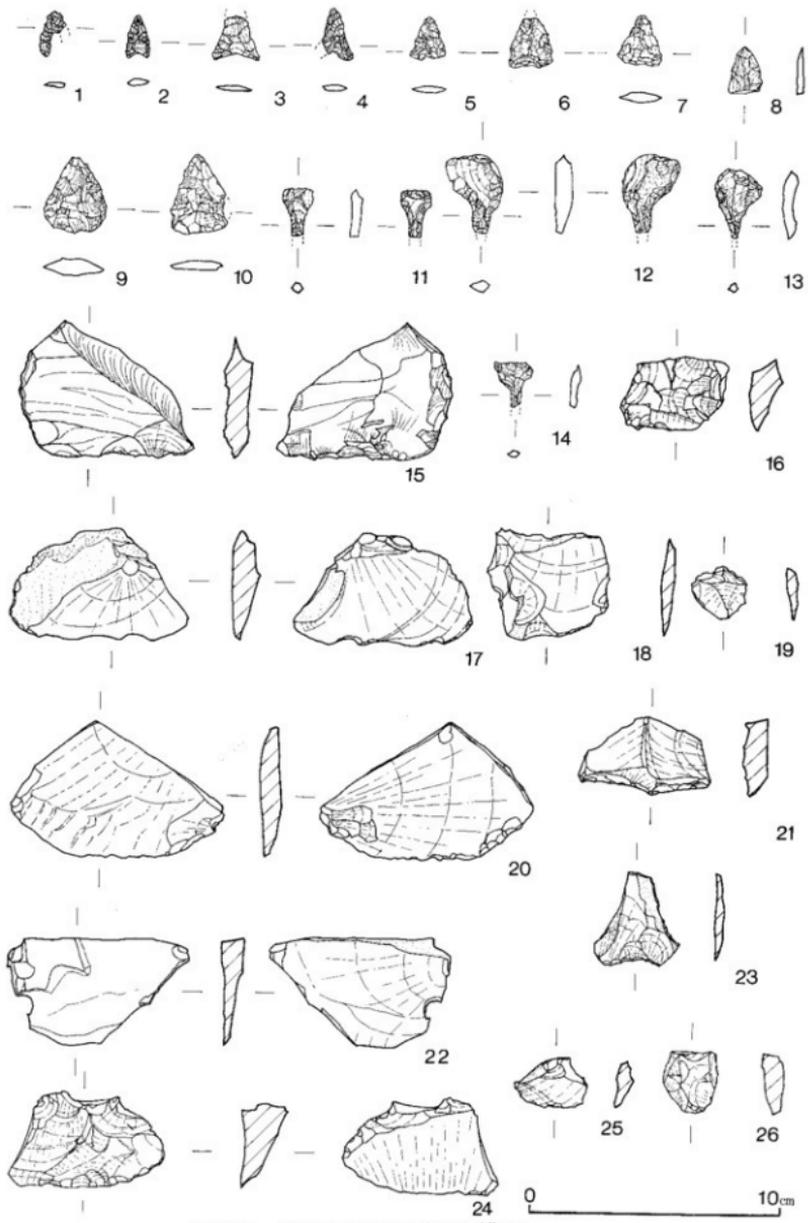
7は円柱状を呈する石器である。先端に使用痕が認められる。第2図8は平面形が円形を呈し、中央に幅2cmの凹を設けている。

磨製石剣(第123図3)

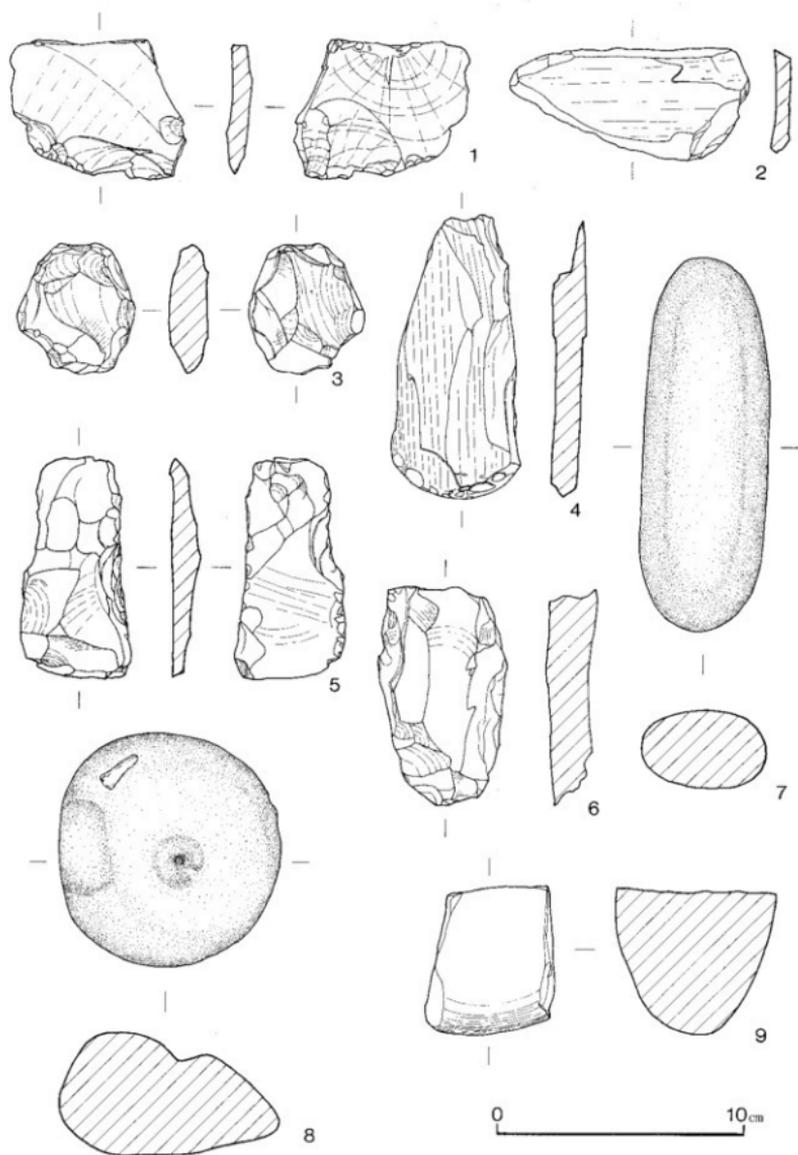
スレート状の石材を使用している。破片であり、大きさ、形状については明らかでない。剣身の最大残存長は2.3cmである。残存部での幅は3.4cmを測る。鋒部は鋭く、研ぎ出されている。断面は扁平な菱形を呈し、鏃は明確さを欠くも、一応の区別がつく。鉄剣を呈するものであろうか。

石剣状石製品(第123図4)

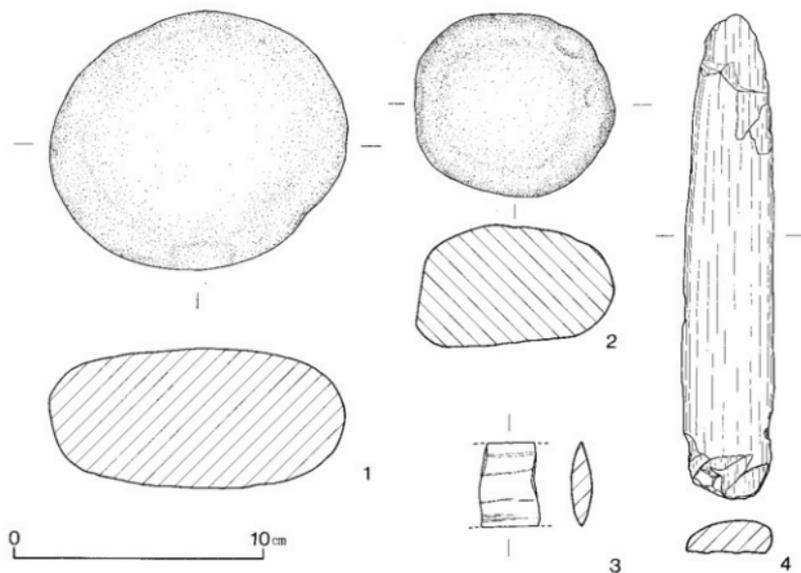
4は長さ20cm、幅3.6cmの細長形状を呈している。裏側は剝離しているが、残存部の面は磨きがかけられている。先端はやや丸味を帯び、下部には両方から抉りが施されている。



第 121 図 九郎原 1 遺跡・遺構に伴わない遺物 (4)



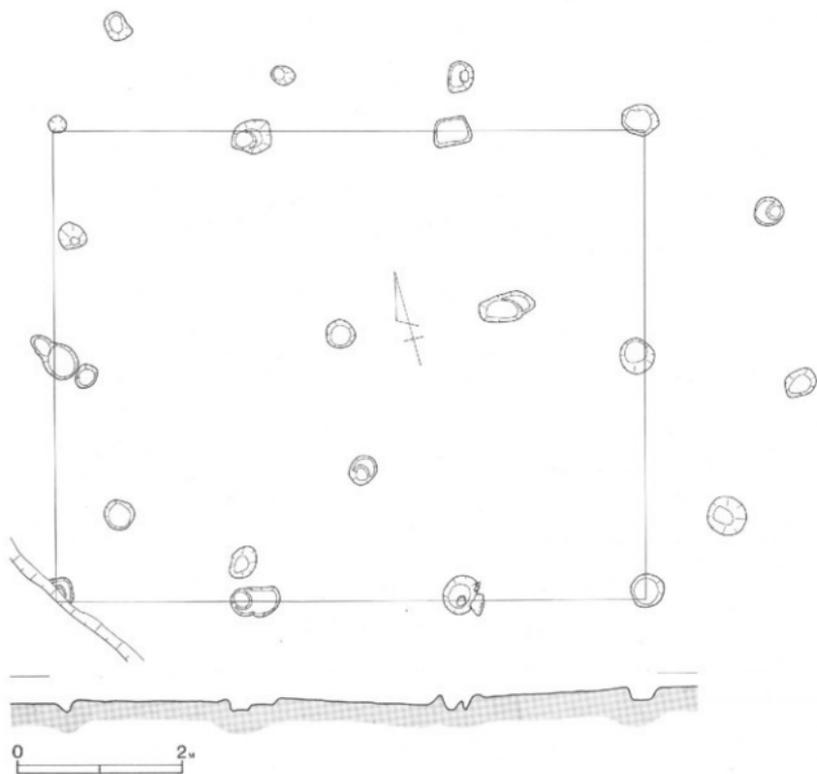
第 122 図 九郎原 I 遺跡・遺構に伴わない遺物 (5)



第 123 図 九郎原 I 遺跡・遺構に伴わない遺物 (6)

石器計測表

番号	型式	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	出土地点	出土層以下	備考
第 1 図	凹基式三角形	黒曜石	1.9cm		N32・E56・57 No137	表土下	
◆ 2	◆	◆	1.8cm	基部 1cm	N36・E57 No219	黒色土	姫島産か
◆ 3	◆	サヌカイト	1.8cm以上	◆ 2cm	N30・E57 No37	表土	
◆ 4	◆	黒曜石	2.2cm		N33・E59 No193	表土下	
◆ 5	◆	サヌカイト	1.8cm	◆ 1.5cm	N38・E57 No249	黒色土	
◆ 6	◆	◆	2.2cm以上	◆ 1.8cm	N25・E43 No91	一括	
◆ 7	平基式三角形	◆	2cm	◆ 1.7cm	N22・E44 No264	表土下	
◆ 8	不明	◆	2.9cm以上	残存 最大 1.4cm	表	採	
◆ 9	平基式三角形	◆	3cm	最大 2.5cm	S B01・P 5 付近		
◆ 10	◆	◆	3.2cm	基部 2.3cm	N23・E54 No66	表土下	

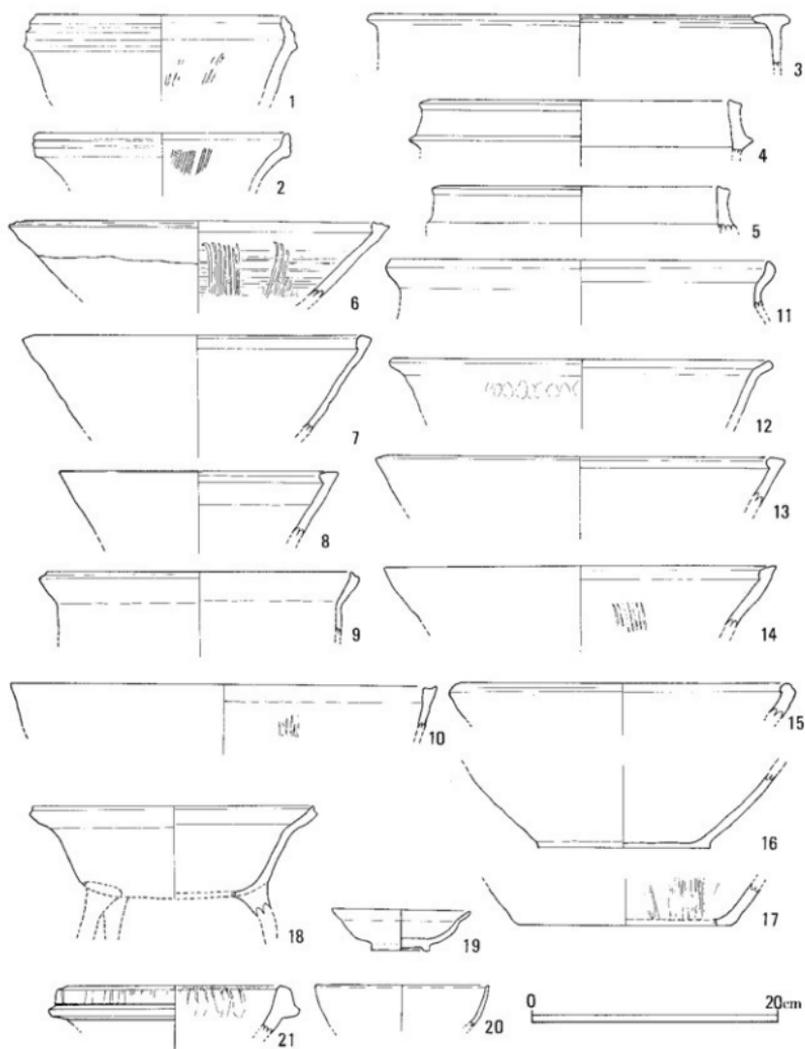


第124図 SB01(掘立柱建物跡)

掘立柱建物 (SB01)

調査区の東側で検出した東西に細長い建物で黒ボクの上面から掘り込んでいる。規模は2間×3間で柱間寸法は染行で2 m90cm、桁行で2 m40cmを計る。一部の柱穴の底には小さな石の置いてあるものも存在した。この建物跡からは遺物は一点も出土しておらず、時期を判定することは容易ではない。しかし、黒ボクの上面から掘り込んでいることからここでは一応中世の建物としておきたい。

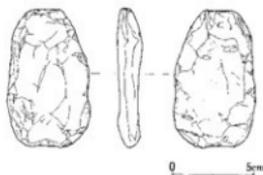
(卜部吉博)



第127图 九郎原Ⅱ遺跡出土遺物実測図

多数出土している。

21は石鍋である。雲母を含んだ滑石製品である。外面は黒い光沢を放つ。口径は19cmを測る。石鍋は長崎県西彼杵郡にその材料と製品の産地が求められ、産地の長崎県をはじめ西日本に、これまで20ヶ所近い遺跡から出土例が報告されている。島根県下ではこの九部原Ⅱ遺跡がはじめての出土例である。山陰地方では鳥取県岩美郡同府町因幡國府遺跡にこれまで出土例があるのみで少ない。(内田律雄)



第128図 物実測図(3)

7 その他の遺跡

(1) 沢田遺跡

六日市町大字沢田に存在する。大きく2ヶ所に分かれて存在するので、沢田Ⅰ遺跡、沢田Ⅱ遺跡と称した。今回の調査では、それぞれの遺跡について遺構の残存状況及び範囲確認の調査を実施した。以下その概略を記すことにする。

<沢田Ⅰ遺跡>

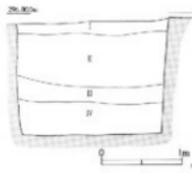
下沢田部落の山裾に存在する。旧山本ヒサノ家畑地内に一辺3mの調査坑(Aグリッド)と一辺2mの調査坑(Bグリッド)を設定して調査を実施した。

Aグリッド様相

表土下1.4mまで掘り下げたところ、土層は8層に分けることができた。ⅠからⅥには若干の土師器、須恵器細片が検出されたが、Ⅶ・Ⅷ層は無遺物層である。

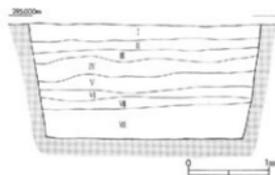
グリッドの壁面にあらわれた層序から、土がほぼ水平に堆積していることが判明した。遺物を包含しているⅠからⅥ層をみると、Ⅰ層は暗褐色の現耕作土、ⅡからⅤ層は砂礫土、粘砂土が中心となり、Ⅵ層は灰色粘砂土で旧表土と考えられた。ⅡからⅤ層についてはその堆積状からみて、高津川の氾濫によるものと推定できる。Ⅶ・Ⅷ層には旧表土層と考えられたⅥ層からの落ち込み等も認められず明確な遺構は存在しなかった。

かつては土地の安定した時期もあったが、度々高津川の氾濫により当時の生活面上に土が堆積して現地形になったものと考えられる。



第129図 Bグリッド土層図

Bグリッドの様相



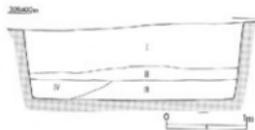
第130図 Aグリッド土層図
られなかった。

<沢田Ⅱ遺跡>

上沢田部落の近傍上の平ら面に一辺3mの調査坑を設定して調査を実施した。それぞれの調査坑をAグリッド、Bグリッドと呼んだ。

Aグリッドの様相

標高315mの地点でグリッドを設定した。表土下1mまで掘り下げたところ、土層は2層に分けることができた。Ⅰ層は褐色粘砂礫の表土、Ⅱ層は暗茶褐色粘砂礫土である。Ⅱ層から近世陶磁器片を若干検出した。またⅡ層下部では山石2個を検出したが、明確な遺構を確認するには至らなかった。



第131図 Bグリッド土層図

B グリッドの様相

Aグリッドから西方向約60m離れた標高309m地点でグリッドを設定した。表土下0.8mまで掘り下げたところ、土層は4層に分けることができた。I層は褐色粘砂礫土、II層は暗褐色粘砂礫土、III層は灰化物を含む黒色土、IV層は黄褐色粘砂礫土である。I・II層からは近世陶磁器細片が若干検出された。III層はVI圈内に落ち込む形で堆積しているが人工的なものが自然堆積によるものか判断がつかなかった。

(2) 指月遺跡

月神社後背地にあたる標高約330mの丘陵上に存在する。これまで墓地として取り扱われていたらしく、自動車道敷設のため上部施設を取り除いた痕跡が認められ、多量の礫が散乱していた。

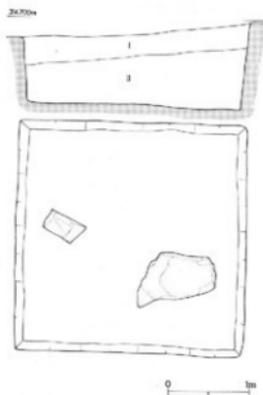
経塚の下部構造は口の字状を呈する石組遺構が認められた。この石組みは2.6m×2.6mのもので人頭大の自然石、割石、切石を組みあわせたものである。石組み遺構の周囲及び内部には、前述のように多量の礫が散乱していた。礫を取り除くと、石組みのほぼ中央に径30cm、深さ20cmのピットが検出されたがその性格は不明である。

礫を詳細に観察すると、文字の記入されたものが認められ、「一字一石経」であることが判明した。判読できる文字は次のとおりである。(島根県立図書館管理課長藤沢秀晴氏による)

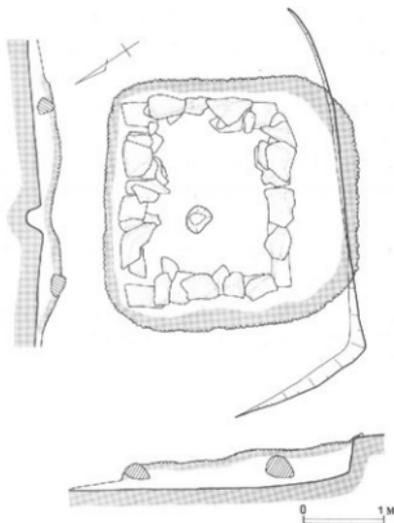
「恒、級、出、界、至、大(4)、用、喜、我(4)、為、
菩(4)、十(4)、現、而、提、処、可、不、部、貧、沙、
奴、千、恃、子、諸、智、乘(4)、者、藏、刀、諸(4)、
聽、仏、余、語、悉、羅、丘、常、山、合、令、衆
(4)、樹、弗、過、達、德、正、奕、及、度(4)、空、
導、筋、天、則、伝、地、怒、声、罰、功、无、誦、
冥、寿、知、更、淨、丁(以上順不同)」

以上の判読できた文字からは、記された年代等は不明であるが、法華経の一部かと考えられる。

(石井 悠)



第132図 Aグリッド土層図



第133図 指月遺跡経塚実測図

(3) 田野原遺跡

田野原は遺跡目録に掲載されておらず、遺物の出土も伝えられてはいなかった。しかし、現在耕地として利用されるほどの平頂な土地であり、近くに早坂遺跡、遺添遺跡など周知の遺跡が存在することから遺跡の可能性もあると思われたため、調査を行った。

現在は標高約400m、ほぼ中国山地の分水嶺に当り、近くには高津川の源流とも言うべき泉がある。南北に延びる2つの丘陵に挟まれ、高津川沿いにできる細長い平頂地の基部に当る。この平頂地は高津川の氾濫によってできたもので、砂質の上壤である。礫が非常に多く耕作はしづらく、決して肥沃な土地とはいえない。

周辺には遺跡が点在する。遺添遺跡(弥生～古墳時代)、千人塚(経塚)、中山城跡(室町時代)、早坂遺跡(縄文～古墳時代)、早坂関所跡(江戸時代)などがあるが、未調査のものが多く実態は知られていない。しかし、このうち早坂遺跡は古くから知られている遺跡で、縄文土器、石器など縄文時代の遺物を中心に弥生土器、土師器、黒曜石剥片など多数表面採集されている。

調査は中国縦貫道工事用の杭を利用し、磁北を基準として位置に応じて4m×4m、又は2m×2mの方眼を組みグリッドとした。試掘用グリッドは中国縦貫道田野原Ⅰ区内に適宜求め発掘順に第1、第2……第9グリッドと名付けた。また、各グリッドは必要に応じて拡張した。合計9箇のグリッドを試掘したが、いずれのグリッドからも遺構、遺物は検出されなかった。土層は上から、Ⅰ層(暗茶褐色土耕作土)、Ⅱ層(砂質黒褐色土)、地山(黄褐色土)の3層に分層できる。どの層も礫を非常に多く含んでおり、高津川の氾濫に堆積を如実に示す。表土下40～70cmで各グリッドとも地上の黄褐色土層に達する。

第1グリッド、グリッドは4m×4m。地表面から約40cm下で地上に達する。Ⅱ層上面から土坯及びビット状の落ち込みがみられたが、攪乱によるものであった。

第2グリッド、4m×4mのグリッドを設定して発掘したが、ビット状の落ち込みを検出したためさらに東部に4m拡張した。地表面から約65cmで地山に達する。Ⅱ層上面より落ち込みがあるが、攪乱によるものである。

第3・4・6グリッド、グリッドは2m×2m。第3グリッドは地表面から約40cm、第4グリッドは約70cm、第6グリッドは約55cm下で地山に達する。

第5グリッド第5グリッドは2m×2mのグリッドを組んだが、土坯状の落ち込みを検出したため北側にさらに2m拡張した。約300mで地上に上達するが、ここではⅡ層はない。落ち込みと思われたものは攪乱によるものであった。

第7・8・9グリッド、ドグリッドは2m×2m。いずれも地表面は40～50cmで地山に達し、Ⅱ層は消えている。北側になるほどⅠ層が厚くなるようである。

以上、小規模な試掘調査を行ったが、中国縦貫道田野原Ⅰ区内では遺構、遺物とも全く検出できなかった。しかし、隣接地から数片の土器片が採集されていることから、Ⅰ区内の極めて近くに遺跡が存在することが推察される(柳浦俊一)

8 ま と め

調査の意義 中国縦貫自動車道に伴い実施した各遺跡の発掘調査は、石見西部の山間地としては初の大規模な発掘調査であり、中国山地分水嶺付近の盆地内における縄文時代から中世にいたる各時代の資料が得られ、山陰海岸側、あるいは山陽方面との比較がある程度可能となったことは、調査資料の乏しかったこの地域にとっては、意義の深いものであった。

以下、その成果の中で、特記すべきいくつかの点について触れ結びとしたい。

九郎原 I 遺跡 まず、九郎原 I 遺跡における押型文土器の検出があげられる。この押型文土器は、施文原体が細く、かつ整っていること、特に山形文の例については内外面に押形が認められ、内面の口縁部にある沈線が細く口縁に直交している点など県下出土の押型文土器の中では最古の部類に入ると考えられる。

また、刻目凸帯沈線文土器は、山陰ではいままで検出されたことのない土器として注目される。従来、刻目凸帯の土器は晩期後半の粗製土器としてよく知られている。今回検出した土器は、縦、横、斜めに幾何学的にへう状工具による沈線が施され、内面と胴部上半と中凹みする底面外面に研磨が認められ、いわゆる晩期後半の土器と区別して考えることができる。これに類似した沈線文土器は、広島県では「中山B式」として晩期中葉に位置づけられている。

弥生時代の遺物 九郎原 I 遺跡における弥生時代の遺物は、前期前半に位置づけられている大形の壺形土器と磨製石剣が出土している。大形の壺形土器はその一部であるが、壺棺とも考えられ、磨製石剣と相俟って付近にこの時代の遺構の存在を示唆するものである。中国山地の屋根にあたる地域でこうした弥生時代前期前半の遺物が検出されたことは注目される。

九郎原 I 遺跡の以上の遺物は、いずれも、遺構に伴うものでなく、原位置を失っていたことを付記しておきたい。

前立山遺跡 次に、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡の実態を知る上に貴重な資料を提供することとなった前立山遺跡について触れることとする。

集落跡 住居跡と考えられる遺構は、全部で23棟検出されている。これらの遺構の重複関係や土器形式から、住居跡の形態は、円形から隅丸方形へ、さらに方形へ変遷が連れる。住居跡はほとんど例外なく側溝が走り、四柱を原則とした柱穴があり、中央ピットを備えている。

中央ピットの性格については、これまで二、三の考え方がある。例えば、鳥取県米子市青木遺跡の場合には貯蔵穴と考えられている^{註1}。その変遷も、弥生中期に床面中央に不整形に穿たれた穴が後期末から古墳時代前期にかけては二段掘りにされたり、外周に土や粘土で土手状の高まりを作って整備され、古墳時代中期には壁際に移動するという。また、高根県松江市平所遺跡では中央ピットが玉作工房跡の工作用ピットとして使用されていた^{註2}。前立山遺跡では中央ピットの中に炭化物や灰が詰まっている例があり、炉として使用された可能性が強い。

遺物 住居跡出土の土器は、住居跡の重複関係を考慮すると、概ね四時期に分類できる。I期はS I 18を標式とするもので、壺形土器はくり上げ状の口縁を呈する。II期はS I 17・S I 19を標式とし、「く」の字口縁を呈し、口縁端部に稜を有することを特徴とする。このII期の土器は九重式（高根県安来市九重遺跡・弥生時代後期末^{註3}）に類似する複合口縁を持つ甗台が共存する。III期は「く」の字口縁を呈し、口縁部はつまみナデを施す。この期の土器は、S I 04では平所 I 号住居跡（古墳時代前期）と類似の壺形土器を共存する。IV期はS I 13を標式とし、複合口縁を有する土器に代表される。器種も壺形土器、壺形土器、甗、鼓形甗台等豊富である。なお、この期の土器の口縁端部はつまみナデをするS I 13と口縁端部を平たくするS I 01があって、後者は新しい要素を示している。前立山遺跡IV

期の住居跡出土土器は前述のごとく、器形、セット関係等共に山陰中央平野部のそれと共通しており注目される。

住居跡の中には前述した形態の変遷にそぐわない S I 11, S I 17 の 2 種の住居跡が存在する。この 2 種の住居跡は、規模が大きく、平面プランが楕円形を呈するのが特徴で、支柱穴の数も多いようである。遺物においても、S I 11 では全長約 30cm の大形の鉄製鎌、S I 17 では施、銅製の舌を思わせる棒状石製品、丁字頭の勾玉等、他の住居跡の遺物に照らして考えると特異なありかたを示している。棒状石製品や勾玉は祭器であろうし、特に鉄製品を所有しているのがこの 2 種のみであることは、何か特別な意味のあることのように思われる。住居跡の形態や出土遺物からすると、この 2 種は、この集落における特殊な性格を有していたと考えられ、この地域のこの時期における集落のありかたを考えるのに重要な位置を占めるものであろう。おそらく、集落を営んでいく場合に中心的役割を果たしていたことは間違いないであろうと思われる。

墳 墓 次に、この集落の南側に位置する、東に尾根の突出した丘陵上に発見された墳墓は、これまであまり例をみない特異なものである。それは、丘陵の低い方に平面プランが「U」字形をした幅約 1m の溝をめぐらし、その内側に複数の墓穴を穿ち、祭壇状の遺構を備えるものであった。土器は墓穴内、墓穴上、溝から主に出土した。S X 06 内出土の円筒形刻文で飾られた大形壺形土器は蓋棺と考えられ、S X 05 上に検出された土器は供獻土器と考えられる。溝内のものは故意に打ち割られた可能性が強く、祭壇状遺構 (S X 02) 出土土器は、供獻土器や溝内出土土器と関係してこの墳墓にまつわる祭儀に使用されたものであろう。この墳墓出土の飾られた大形壺形土器は、周防地方のものと同様なものであり、墓制において、この墳墓が同地方の強い影響下にあったことを物語っている。周防地方ではこの種の土器は弥生時代中期末に位置づけられている。墳墓出土の土器の中には弥生時代後期後半のものもあり、この墳墓の時期に、一応の幅をもたせておきたい。

ところで、近年、山陰地方では弥生時代から古墳時代にかけての墓制にバラエティがあることが確認されはじめている。例えば安来市仲仙寺・宮山、松江市来美、邑智郡瑞穂町順庵原 1 号に代表される四脚突出型方形墓^{註 7}、島根県安来市九重土塚墓、同鏡尾土塚墓、墓域を石で囲む同江津市波来浜遺跡^{註 10}、米子市青木遺跡における方形円溝墓等、これらの墓制は、それぞれ異った特徴を備えていて一様でない。前立山遺跡の場合も、そうしたバラエティの一つとしてとらえることができ、この時期の墓制の複雑な一面を示している。

前立山遺跡は、集落遺構 (I・II 区) の存在する丘陵から下の水田面までは約 20m、集落遺構から墳墓の検出された南側の丘陵 (III 区) までは、さらに 30m の高低差がある。従って、墳墓の位置からは、眼下に集落、さらに、その下に広がる水田地帯や、高津川等を一望のもとに見渡すことができる。また、集落の西側には、自然の湧水があり、集落と湧水と墳墓との間にはお互いに密接な関連があったと考えられる。すなわち、湧水はこの前立山の集落の飲料水や眼下の水田への灌漑に利用されたと考えられる。集落と墳墓出土の土器には時期的な差を認めざるを得ない部分もあるけれども、丘陵上の墳墓の占める位置には他の遺構は一つも重複するものはなく、溝で区画された聖域とし、集落からは墓域として認識されていたことが窺えるのである。

掘立柱建物 前立山の丘陵は、前述のように弥生時代から古墳時代にかけての時期の遺構の他に、律令制時代以降と考えられる掘立柱建物跡 3 棟を検出した。とりわけ、S B 03 は 3 × 5 間で西側に庇状の構築物があったと考えられる建物で、柱穴の掘り方もしっかりとした規模の大きな総柱構造のものである。残念なことに直接これらの掘立柱建物跡に伴う遺物は検出できなかった。しかしながら、周辺からは多量の土器が出土した。

墨書・ヘラ その中に、須恵器・蓋杯蓋に墨書したものがあり、そのうちの一つは「今国」と認めるものがあった。また、土師質土器・皿の見込みに「寺」とヘラ書きされているものが4点あり注目される。これらの遺物は、この3棟の掘立柱建物跡の性格や年代を示していると考えられる。墨書須恵器は、その形態から9世紀の中葉を大きく離れることのない時期であろう。『続日本後紀』承和10年5月(843年)の条には、鹿足郡を美濃郡からわから、新郡として設置したことがみえ、墨書土器や、掘立柱建物跡は、あたかもこの記載と付合するかのようである。今後、付近の遺跡の状況に十分注意を払う必要がある。

中世 中世の遺跡については、九郎原Ⅰ遺跡で中世～近世のものと思われる2×3間の掘立柱建物跡を1棟検出したのみであった。しかし、前立山遺跡、河内遺跡、九郎原Ⅰ遺跡、九郎原Ⅱ遺跡の各遺跡において、多量の中世陶磁器を検出することができた。それらは、日本製のものと中国製のものとに大別できる。前者は、唐津、美濃産のもの、備前の磁鉢がみられ、これに地元で焼れたと思われる日常生活に用いられた鍋、鉢鉢、甕等が多くある。後者には、青磁、白磁、青白磁、染付、天目等がある。特に、甕に代表される瓦質の製品は山口県に多くみられ、山陰海岸には、高津川流域を除いて今のところ全く出用例が知られていない。このことは、中世におけるこの地域の生活が基本的には山口地方のそれと同様であったことを示しているものであろう。中国製品は、12～13世紀のものが二、三点みられる他は、皆、16世紀頃のものである。また、日本製品は、概ね室町時代後半を中心としているようである。さらに、九郎原Ⅱ遺跡で一片発見された滑石製石鍋は、その産地を長崎県に求めることができ、陶磁器とともに当時の東アジアの広い交易の一端を垣間見ることができる。六日市周辺には、中世の山城が高津川沿いに点在していて、中世陶磁器出土地も、ほぼ、これに追従しているようであり、今後、両者の関係を明確にしていく作業が必要であろう。

今後の問題 さて、今回の調査の成果に照らしながら、今後はさらに組織的な調査研究を行い、この地域の歴史をもっと具体的なかたちで明らかにしなければならないであろう。

例えば、島根県下では、晩期前半に位置づけられる土器として、益田市安富町安富王子台遺跡では九郎原Ⅰ遺跡出土土器の中にみられるような刻目凸帯沈線文土器は出土していないが、底部において類似するものがあり、この間隙を埋める資料の検出が俟たれる。ここでは、それに期待しながら、九郎原Ⅰ遺跡出土の刻目凸帯沈線文土器を、晩期中葉に位置づけ、暫定的に「九郎原B式」と仮称しておくことにする。さらに九郎原Ⅰ遺跡の黒曜石の中には、佐賀県煎鍋産のものと考えられる白味がかったものが混在しており、中国山地に典型的に露出するサスカイトとともに産地の同定を行い、石材の持ち運ばれたルートを追求める必要もあろう。

前立山遺跡については弥生時代から古墳時代にかけての集落を、工事区域外に残された丘陵をさらに綿密に調査し、この遺跡との関連を把握していく必要がある。この地域における、いわゆる古墳の出現する時期をつかみ、古代国家成立前夜における実態をも追求しなければならないであろう。また、掘立柱建物跡や墨書土器等は、付近に鹿足郡家の存在を予知させるものであり、律令国家の地方支配体制を解明する上の一石を投ずるものと思われる。かつて旧島根県史において、前立山遺跡のある注連川に鹿足郡家を推定したのは意義のあるものとして浮び出てくる。

六日市町は、現在、行政的には島根県下に区分されているが、その生活をみると、広島、山口県の経済圏に入るものである。それは、婚姻関係や言語等においても同様なことが云え、この度の調査の成果の中で知り得た縄文時代から中世にいたる各時代の遺跡も、そうした傾向にあることを示していたことは、この地域の地域史を考える上に特に興味を引かれるところであると同時に極めて重要なことのように思われるのである。

なお、資料整理等が不十分であるため、今後に残した問題点が多いことをお詫わりしたい。

(内田律雄、卜部吉博、勝部 昭)

- 註1. 鳥取県教育委員会『青木遺跡』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、昭和50年、51年、52年
2. 鳥根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ、Ⅱ、昭和51年、52年
3. 東森市良「九重式土器について」『考古学雑誌』57-1 昭和46年7月
4. 鳥根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ、昭和50年
5. 鳥根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』昭和54年
6. 周防考古学研究所『山口県の弥生式土器集成』昭和40年
7. 門脇俊彦「駒滝原1号墳」『鳥根県文化財調査報告書』第6集 1975年
8. 近藤正他「鳥根県安来平野における土壌裏」『上代文化』36 昭和41年
9. 山本清『山陰古墳文化の研究』昭和38年
10. 江津市教育委員会『波来浜遺跡』昭和48年
11. 註1に同じ
12. 『続日本後紀』
13. 山口県教育委員会『下右田遺跡』昭和54年
14. 長崎県大瀬戸町教育委員会「大瀬戸町石鏡製作所遺跡」『大瀬戸町文化財調査報告書』第1集
15. 山本清編『さんいん古代史の周辺』上 昭和53年9月
16. 野津佐馬之助編『鳥根県史』大正14年

前立山遺跡遠景（東より）



前立山遺跡Ⅱ区調査前（Ⅲ区より）



前立山遺跡Ⅲ区発掘前（西より）



前立山遺跡 I・II区全景調査前
(西から)



前立山遺跡 I・II区全景
(調査後南から)



前立山遺跡 I・II区全景調査後
(南から)



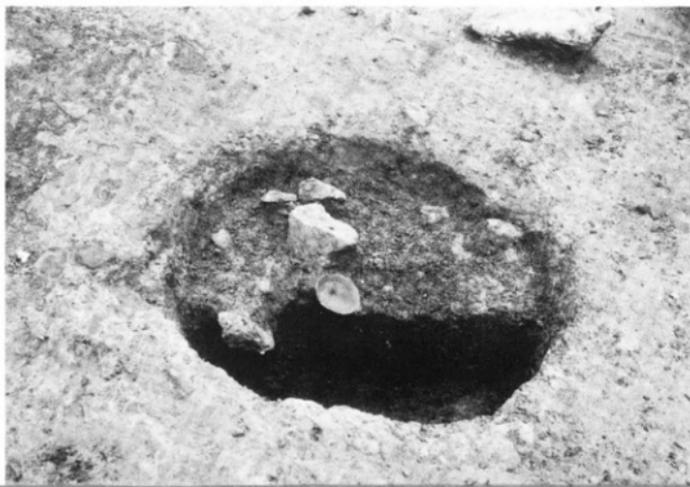
前立山遺跡SB01・02・03全景
(東から)



前立山遺跡SB03柱穴



前立山遺跡SB03柱穴



前立山遺跡SB01・02・03



前立山遺跡SB01・02・03



掘立柱建物跡付近出土墨書須恵器

